

I 里程論

はじめに

陳寿は『魏志倭人伝』で帯方郡から卑弥呼の都までの旅程を書いています。だが、その旅程には「略」「脱漏」があります。私はその「略」「脱漏」を補正・補足して卑弥呼の都に辿り着きました。卑弥呼の都は熊本市中央区京町茶臼山です。

この結論をもって熊本を訊ねて確かめたいことがありました。

- (1) 陳寿は22国連邦を紹介している。その中心が「邪馬国」である。「邪馬国」は日本語「山国(ヤマコク)」である。「山国(ヤマコク)」とは熊本市のどこなのか。
- (2) 22国連邦の始原の国が「鬼国(キコク)」である。「鬼国」は本来「姫国」で、「姫氏」の建国である。「姫国」は菊池市のどの遺跡がふさわしいのか。
- (3) 山鹿市の方保田東原(カウダヒガシバル)遺跡は22国連邦のどの国に相当するのか。
- (4) 川尻(カワシリ)が卑弥呼への使者が到着した港と推論する。果たして現実的なのか。
- (5) 倭国22国連邦の首都は茶臼山である。では、卑弥呼の宮室は茶臼山のどこか。

2024年10月旧友二人の尽力のおかげで念願の熊本訪問二泊三日の旅が実現することになりました。幸運にも、旧友の大学時代の友人が熊本市にご在住でした。旧友が連絡をとったところ、その友人がガイドを引き受けようと言っただき、準備万端、ご厚意溢れるご案内のもと、「花岡山」「金峰山」「釜尾古墳」「本妙寺」「熊本城三の丸エリア・藤崎八幡宮跡・大楠群熊本県護国神社・古城横穴古墳群」「方保田東原遺跡・山鹿市出土文化財管理センター」「山鹿市立博物館」「熊本県立装飾古墳館」「江田船山古墳・和水町歴史民俗資料館」「田原坂西南役戦没者慰霊の碑・薩軍墓地・七本官軍墓地」「塚原古墳公園・熊本市塚原歴史民俗資料館」「川尻港址」「国史跡鞠智城・温故創生館」「阿蘇赤水狩尾遺跡址」等を訪れることができました。山鹿市立博物館、山鹿市出土文化財管理センターでは研究員の方から発掘状況および研究成果を直接お聞きする機会にも恵まれました。改めて皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

こうしてこの旅で得た知見をもとに里程論を加筆、修正しました。また新しく注も加えております。

2024. 10. 31

倭国の呼び名に関する記述は正史によって異なります。

5世紀『後漢書』	邪馬臺国
7世紀『梁書』	邪馬臺国
7世紀『隋書』・『北史』	邪摩堆、邪摩堆
10世紀『太平御覧魏志』	耶馬臺国
12世紀『紹熙本』	邪馬壹国

いずれの名前にも意味があり、その意味はそれぞれに異なります。今、ここでは、これらの名を使用せず、単に女王国としてすすめることにします。女王国とは卑弥呼の都が置かれた国という意味です。これから女王の都の位置を特定しましょう。都への旅程を方角、里程共に記載している正史は4冊あります。

- ①唐貞観10年(636年)完成の『梁書』
- ②北宋初期に成立した類書『太平御覧』(977年～983年)に引かれた『魏志』
- ③南宋刊本『魏志』紹興本(1131年～1162年)
- ④南宋刊本『魏志』紹熙本(1190年～1194年)

『梁書』と『御覧魏志』はほぼ同じ旅程なので『御覧魏志』で代表します。ご存じのように「紹熙本」と『御覧魏志』の里程は次のように作られて、大きな違いは「又」と最終里程にあります。

南宋刊本紹熙本『倭人伝』旅程
從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍
東到其北岸狗邪韓國七千余里
始度一海千余里至對海國
又南渡一海千余里至一大國
又渡一海千余里至末廬國
東南陸行五百里到伊都國
東南至奴國百里
東行至不弥國百里
南至投馬國水行二十日
南至邪馬壹國女王之所都水行十日
陸行一月

『太平御覽魏志倭國傳』旅程
從帶方至倭循海岸水行歷韓國從乍
南乍東到其北岸狗邪韓國七千余里
至對馬國千余里
又南渡一海一千里至一大國
又渡海千余里至末廬國
東南陸行五百里到伊都國
又東南至奴國百里
又東行百里至不弥國
又南水行二十日至於投馬國
又南水行十日陸行一月至耶馬臺國
女王之所都

(1) 里程論の基本

「郡」から「不弥國」までの里程は両本とも同じです。「方角」「里」を入れて整理してみよう。

帶方郡-(7000余里)-狗邪韓國-(1000余里)-對海國-(南1000余里)-一大國-(1000余里)-末廬國-(東南500里)-伊都國-(東南100里)-奴國-(東100里)-不弥國

里程論で最も基本的なことは帶方郡から不弥國までの「国」「方角」「里程」を決して訂正しないということです。

「古」の記録の「方角」「里程」は古代も現代も全く同じです。「国名」は変わるが、位置は古代も現代も変わりはない。それ故、「古記」の分析結果は現代地図の方角、相互の位置関係が一致しなければなりません。一致すれば分析は正しい。

「寿の書は銚りて観る可き事を叙し、審正多し」と裴松之が評した通り、陳寿の旅程は審正、決してさわるべきではありません。

(2) 現代地図距離計測と弥生の地形

陳寿里程を正しく分析すれば陳寿の国々は日本地図上にさし示すことができるはずです。里程分析に地図を用いない方はありません。Yahooインターネット地図を利用させていただきました。また、距離計測にYahoo計測ツールを利用させていただきました。地図を参照しながら女王国里程を分析していきますが、三世紀弥生時代の地形を考慮しなければなりません。多くの先学の研究に頼りました。この場を借りて深謝申し上げます。『倭人伝』の「古」の国は「今」の行政区のどこか？ピンポイントで特定していきたい。

(3) 方角と里程

方角は両本一致します。方角は絶対認識です。古記分析は方角厳守を絶対とします。問題は「里」です。「一里」が何mか？これは学問的研究課題です。いくつか提示されていますが、「倭韓の里は古周尺の尺度で一里=100メートル」という立命館大学教授、藤田元春氏の説が実証的、論理的です。藤田氏が説かれているように、『倭人伝』『太平御覽魏志』の「里」は韓国と日本で共通する尺度です。藤田氏の古周尺による陳寿里程は現代地図計測とほぼ一致します。

(4) 補正と地図シミュレーション

陳寿の「国」「方角」「里」は訂正してはならない。だが、陳寿記述は所によって不完全です。裴松之が「然れども失して略に在り、時に脱漏する所有り」と評する通りです。「里」が略されている場合もあれば、肝心要の最終の女王国旅程は脱漏しています。

陳寿の「略」は補正されるべきです。そしてその補正は現代地図シミュレーションによって是非が検証されるべきです。旅の準備は整いました。同行二人、いざ出発しましょう。

第1章 帶方郡～狗邪韓国

從郡至倭循海岸水行歷韓国乍南乍東到其北岸狗邪韓国七千余里

郡治より倭に至るには海岸に循(したが)いて水行。韓国を歴る。あるいは南、あるいは東。
その(倭の)北岸狗邪韓国に至る。七千余里。

帶方郡治から狗邪韓国まで七千余里。海岸線を水行する。里程は不明である。その後、韓国を歴る。「歴る」の語義は「①次々と通り過ぎる②一つ一つ順をおってゆく」である。「歴」は明らかに韓国内陸行を表している。陸行の里程も不明である。倭の北岸、狗邪韓国に至る。陳寿は「歴韓国」を「乍南乍東」と行程を表している。なぜ「あるいは南あるいは東」とジグザグに進んだのか。当時の韓国の地図を参考に考えてみよう。

『魏志韓伝』は次のように伝える。

『魏志韓伝』

韓在帶方之南東西以海為限南與倭接方可四千里

有三種一曰馬韓二曰辰韓三曰弁韓辰韓者古之辰國也。

韓は帶方の南に在り。東西は海を以て限りとなす。南は倭と接す。方四千里。

三種ありて、一は馬韓と曰ひ、二は辰韓と曰ひ、三は弁韓と曰ふ。辰韓は古の辰国なり。



『倭人伝』狗邪韓国とは弁韓(弁辰狗邪国)である。帶方郡治は現在のソウル市近くに存在したとされるから、そこから弁韓は東南である。「あるいは南に行き、あるいは東に行く」行程はこの陸行にピッタリである。

陳寿は7000余里を水行で始めている。この港はどこか。現代地図ではソウル市から西約40kmの仁川港が妥当である。従って陳寿は記していないが、ソウル市から仁川市まで40kmの陸行があったはずである。次が水行となる。この水行も詳細はないので地図で考えるほかないが、仁川港からの海岸線に沿った水行である。「循」は外洋の航海ではないことを表している。

次は「歴韓国」と書く。仁川港から南に下った馬韓の港に上陸して、そこから東南の弁韓の倭地へ韓国内を陸行したと考えられる。「あるいは南あるいは東」と進まなければ弁韓の南岸の倭地には到着できない。

ここで、韓国旅程を述べているもう一つの文を分析してみよう。

王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王

読みは難しい。通常この文は次のように読まれている。

王、使を遣わして京都・帶方郡・諸韓国に詣り、また郡の倭国に使用するや、皆津に臨みて

この読みは「詣」の目的語を「京都帶方郡諸韓国」とする。「及郡」を次の文の主語とする。

私は「京都帶方郡諸韓国及郡」が目的語と考える。「使倭国」が次の文の主語である。

王遣使詣京都帶方郡諸韓国及郡 / 使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王

「王の使は京都、帶方郡、諸韓国及郡に詣る」と読む。「諸韓国」は馬韓・辰韓・弁韓である。「詣諸韓国及郡」は「馬韓・辰韓・弁韓及び郡に詣る」となる。この表記が韓国内陸行を示していることに疑問の余地はないが、ここで起点を「倭地」に変えて訪問順を変更してみよう。

王、使を遣し、諸韓国及郡、帶方郡、京都に詣る。

文意は明快である。王の使者の目的地は落陽である。その道程が、「諸韓国及郡」→「帶方郡」→「京都」だ、と述べているのである。「南與倭接」と表すように弁辰狗邪国南岸に「倭の地」が存在した。そこから倭国の使者は弁韓、辰韓、馬韓を順に通行した。その行程は「三韓の郡」「郡の長官」の訪問であろう。三韓の郡を歴訪しながら帶方郡に到着したのである。倭地からの行程では方角は「歴韓国乍北乍西」となるが、韓国陸行であることに変わりはない。

「諸韓国」と「郡」は切り離せない。通説の「また郡の倭国に使うや」は目的語を次の文の主語に取り違えている。三木太郎氏はそのような例として太田亮が『漢・韓史に顕れたる日韓古代史料』において韓と楽浪・帶方二郡との攻争の記事に次のような送り仮名を付けたことを挙げている。要約してみよう。

…臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營、時太守弓遵、楽浪太守劉茂興兵伐之、

遵戰死、二郡遂滅、韓、其の俗少綱紀、…

遵戰死、二郡遂に滅びたり。韓、其の俗綱紀少なし。…

太田の読みでは滅びたのは帶方郡、楽浪郡となる。だが正始六年から七年の間に二郡が滅びる事はなかったから、ここは「二郡遂に滅びたり」ではなく、「二郡遂に韓を滅ぼす」と読むべきである。目的語の韓を、次の文の主語と読み違えたのである。（『魏志倭人伝の世界』p108）通説の読みも同じ誤りをしている。詣の目的語を「京都帶方郡諸韓国」とし、次の文の主語を「及郡」とする。前文の「目的語」を次の文の「主語」として取り違えている。

ところで、この陸行に対して異議が出される。「歴韓国乍南乍東到」「詣京都帶方郡諸韓国及郡」は陸行ではないというのである。

台湾国立海洋学院大学教授謝銘仁博士は、「水行ののち朝鮮半島内を陸行したものと解する説は日本流の読み方であって、成立する余地がない」と述べている。

（『邪馬一国はなかった』安本美典）

謝銘仁博士のルートは「オール水行」である。この水行ルートに多くの研究者が賛同する。博士の「オール水行」は単なる解釈ではなく、実際に存在する。『隋書』のルートがそれである。608年、隋煬帝の使者が吹田市江口で出迎えられ、奈良の都にやって来た。この時の使者のルートが博士のいう「オール水行」である。百済に渡り、「竹島（珍島であろうか）」まで一気に南下、そこで東にとって壱岐寄港となっている。この航路は「南」「東」とあり、「乍南乍東」ではない。朝鮮半島の西側と南側の外洋を航海する際、「あるいは南、あるいは東」というジグザグな航行はしない。まっすぐに南に進み、そしてまた、まっすぐに東に進むのみである。

右図に『隋書』『倭人伝』の二つの行程を示してみた。

『隋書』には「竹島」寄港はあるが、狗邪韓国、対馬寄港はない。遠回りをする必要も理由もないからである。一方『倭人伝』は「竹島」「済州島」には触れていない。『隋書』と『倭人伝』とでは道中記が全く異なる。その理由は『隋書』コースと『倭人伝』コースが別々だからである。

隋の航路は『倭人伝』の航路とは比較にならないほど進化している。仁川から壱岐まで約736k

三世紀『倭人伝』ルートは「歴韓国（韓国を歴る）」「詣諸韓国及郡（諸韓国及び郡に詣る）」と表わされているように「陸行」である。当時はまだ陸行を必要としたのである。

壱岐地図を参照にその港を想定すると「一支国」は石田印通寺港、「一大国」は勝本港となろうか。



『倭人伝』韓国7000余里は謝博士、安本氏の想定する「オール水行」ではない。水行と陸行両方がある。そして陸行は二か所想定される。

次は韓国陸行である。「歴韓国乍南乍東」と書くように、馬韓の港から馬韓、辰韓、弁韓の国内を或いは南に、或いは東に進んで狗邪韓国倭地に至る道程である。「乍南乍東」とジグザグに進んだのは、馬韓・辰韓・弁韓のそれぞれの「郡(役所)」を歴訪しながら、東南の狗邪韓国南岸の倭地に至ったからである。陸行約5700里、570kmとなる。

- | |
|---|
| (1) ソウル市…陸行400余里(40km)…仁川港
(2) 仁川港…水行900余里(90km)…馬韓の港(挿橋湖の港)
(3) 馬韓の港(挿橋湖の港)…陸行5700余里(570km)…狗邪韓国南岸倭地 |
|---|

第2章 狗邪韓国～末廬国

次の行程は陳寿が国名、里程、方角を明記している。

始度一海千余里至对海国

又南渡一海千余里名瀚海至一大国

又渡一海千余里至末廬国

この水行ルートは問題なしと見えるが、そう簡単ではない。まず、水行はそれぞれ1000余里であるが、日本地図でこれらの航路を引いても、三つとも同じ長さの航路は引けない。日本地図では明らかに壱岐～唐津間のルートは他のルートより短い。

また、対海国・一大国はそれぞれ対馬・壱岐であるが、郡使が到着した港はどこか、不明である。当時、その港の名があったのかどうか、分らないが、「対海国は対馬市厳原港」「一大国は壱岐市郷ノ浦町」とは断定はできない。塚田啓章氏は「一大」を「イーダイ」と読んで「石田」とする。現代においてもフェリーは幾つかの港から就航している。

これらを考慮して、それぞれ水行ルートを書いてみよう。



- ① 里程はいずれも1000余里である。そこで、できるだけ同じ長さになるようにルートを引く。
- ② 対馬から壱岐へのルートだけは南と明記している。ここは南への直線ルートを引く。
他の二つのルートの方角は地形に従う。
- ③ ルート距離を1000余里に近づけるために、対海国の港は比田勝とする。この間約92km。一大国の港は勝本とする。この間約92km。「勝」が共通する。「勝(カツ)」は「賀津」ではないだろうか。「賀」は人名である。末盧国は唐津である。勝本から唐津は約70km。水行3000余里は計測約254kmである。

- | |
|---|
| (1) 狗邪韓国南岸倭地(金海市)…1000余里(92km)…対海国(比田勝)
(2) 対海国(比田勝)…1000余里(92km)…一大国(勝本)
(3) 一大国(勝本)…1000余里(70km)…末盧国(唐津市) |
|---|

第3章 末盧国～不弥国

末盧国

私たちの旅は末盧国から始めよう。ここまで「7000余里 + 3000余里 = 10000余里」である。末盧国は唐津市である。博多に比定する人もいるが、松浦川として末盧の名が残る唐津が妥当である。博多に中国の使者が到着した記事が現れるのは『隋書』『竹斯(チクシ)国』である。

東南陸行五百里到伊都国

まず、問題はこの方角である。『太平御覧倭国伝』『紹熙本』両本とも方角は「東南」である。ここは旅の第一歩である。まちがえる訳にはいかない。念のため、他も当たってみよう。

- 『魏略』……………「[東南五東里到伊都国](#)」
 『梁書』……………「[又東南陸行五百里至伊都国](#)」
 『翰苑』……………「[東南五百里到伊都国](#)」
 『広志』……………「[倭国東南陸行五百里到伊都国](#)」

伊都国の方角に関しては全史料、全て東南である。東北とした史料はない。旅程は唐津を起点とした東南・陸行である。魏と倭国の人々が度々往来した古代の「末盧国～伊都国」の国際通りは現代でも主要街道であると思われる。

「東南陸行500里到伊都国」は唐津の東南500里と理解しなければならない。魏使は東南の陸路を歩いて伊都国に到着した。故に、陳寿は東南と記したのである。

私は迷うことなく、東南に進むことにするが、世の中はそうではない。我が国の研究者は最初の第一歩である東南を必ず東北に変更する。伊都国の方角を東北に変更する理由は何か？

絶対候補が存在するからである。ほぼ全ての研究者の伊都国は「和名抄・怡土郡」である。

「伊都国＝怡土郡」、これを疑う研究者はまずいない。松本清張は「伊都国は現在の福岡県糸島郡前原町付近。奴国は、現在の福岡市の付近。この二つは畿内説論者も九州説論者も異論はない」と述べている。二つの比定地の論拠を清張は論じていないが、伊都国を怡土郡とする論拠は三木太郎氏の次の考えによく顕れている。「わたしは邪馬台国を畿内と考えているから、邪馬台国の主権を帯びた一大率のような存在が派遣されることを少しも不都合と思わないし、むしろ、この一大率が中央の出先機関である伊都国に派遣されてる事実こそ、畿内のような遠隔の地からよく九州を圧え、中国外交を進めることができた理由と考える」。三木氏の考えでは伊都国の位置は玄界灘に面していなければならない。伊都国＝怡土郡とする所以である。しかし地図で確認するまでもなく、「怡土郡」は唐津市の東北である。このことは万人認めざるをえない。従って、「怡土郡」を擁護する様々な論説が展開される。古田武彦は「唐津からの出

だしの道は東南だ。後の道は東北でも問題ない」という。松本清張は「それを救うのに、方位が実際より五、六十度ズレて考えられていた、だから「南」とはいつでも東の方角になるのだ」という説が一部の学者から出された」と述べている。多くの研究者は「東南は東北の誤写である」と主張する。『倭人伝』をはじめ全ての史書が「東南陸路」と記していることは客観的事実である。そして全ての史書が誤写だという根拠は誰も指し示していない。我が研究者の「東北陸路」は根拠のない主観である。文献分析は何を研究の根本に置くべきか問うまでもない。『倭人伝』東南陸路を歩んでこそ陳寿の伊都国に行き着くことができる。当然ながら、陳寿伊都国に到着してはじめて次の陳寿東南100里奴国に到着することができる。

もし九州地図上に、唐津市から陳寿の東南陸路が存在しないのであれば、東北陸路への変更にも誰も異議を挟むまい。「陳寿の誤りだ」と誹謗しても陳寿も怒るまい。陳寿東南陸路は存在しないのか？ 存在するのであれば、その道が陳寿の道である。当然である。

国道203号線が陳寿「東南陸路」

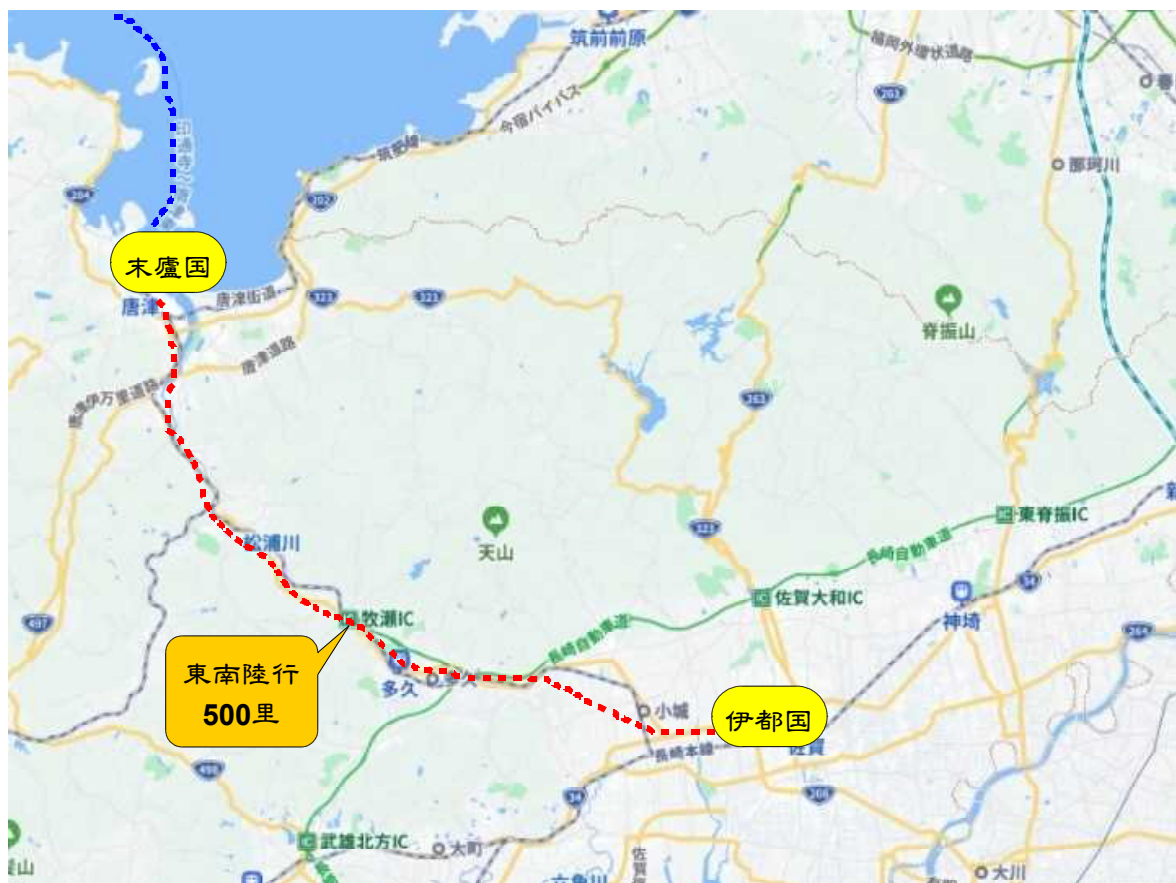
私たちは陳寿のいう通りに唐津市から「東南陸路」を進もう。



東南に向けては立派な街道が存在する。国道203号線。

現代でも唐津と佐賀市を結ぶ幹線道路である。穏やかな川沿いの街道を進む。約50km。佐賀城に到着する。

ここが伊都国である。佐賀市が伊都国である。佐賀城周辺に伊都国弥生集落が存在したと思われる。



「伊都国」の特質は「外交」である。陳寿は「郡使往来常所駐」と記している。魏の外交官は帯方郡と伊都国を往来して伊都国に常駐している。伊都国に魏の大使館が存在したのであろう。「伊都国」のもう一つの特質は一大率の存在である。「率」とは「軍功封賞之科を謂う」（辞海）とあり、軍事部隊の長に与える称号と松本清張氏は解説している。「率」は軍隊である。

自女王国以北特置一大率檢察諸国畏憚之常治伊都国於国中有如刺史

一大率は常に伊都国を本拠とする。陳寿はその任務は檢察、身分は刺史の如しと書いている。石原道博は刺史について「郡国を刺挙し、その政績を奏報する官。前漢武帝の元封五年（前106）に始めておかれた」と注釈している。一大率は軍隊による檢察である。国中にいるという。諸国が畏憚するはずである。一大率が檢察する諸国は女王国より北の諸国という。ここで女王国がどこをさしているのか、今はいえないが、旅程から見て、北の諸国とは不弥国以北の国々と見るのが自然である。

伊都国王は国王、一大率は軍人で構成された檢察官。それぞれ役割が異なる。伊都国王は官爾支、副官泄謨觚柄渠觚と共に国を統治する。一大率は諸国の政績を奏報するというのであるから、奏報する相手は伊都国王ではなく女王卑弥呼であろう。したがって一大率を特置したのは伊都国王ではなく女王卑弥呼と考えられる。

伊都国に外交、檢察の中樞が置かれている。伊都国にこれほどの権力が集中する理由は伊都国の重要性にある。伊都国の重要性は九州地図上一目瞭然である。九州北部の都市から熊本、薩摩を結ぶ街道は佐賀市を中継する。九州全土の交通網の要諦に佐賀市が位置する。佐賀市が九州の「政治」「経済」「軍事」の要所であることは古今変わらない。

要塞都市「吉野ヶ里」が佐賀市に存在したのもここが要所だったからである。その重要性は怡土郡（前原市）とは比較にならない。唐津の東南50km、佐賀市が伊都国である。



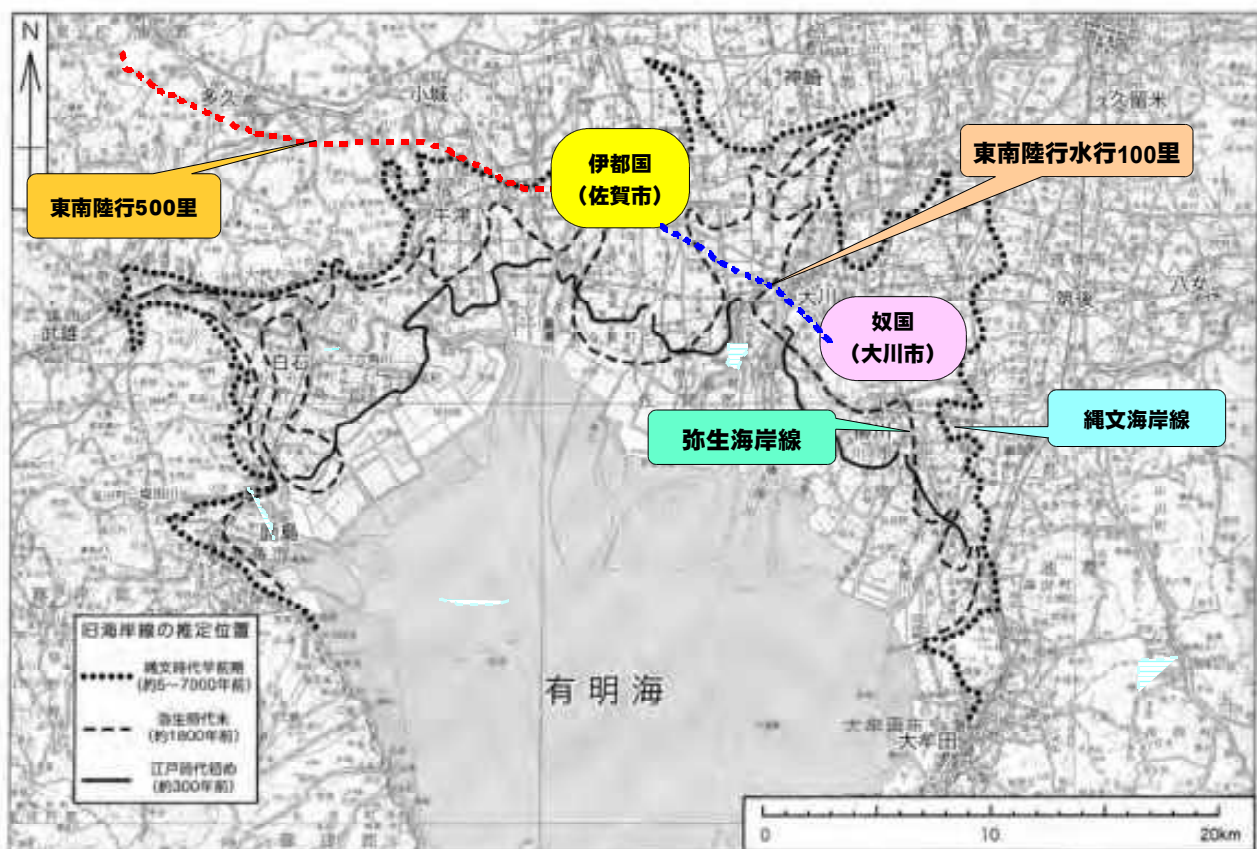
東南至奴國百里

現在、佐賀城の南から東南に道が伸びている。これが奴国に向かう東南路である。だが、意外や、当時、この道のほとんどは海の下だった。有明海が北上していて、佐賀市の東南部は有明海だったのである。下山正一氏・松浦浩久氏・日野剛徳氏が「地域地質研究報告：福岡(14)第71号NI-52-11-9佐賀地域の地質」を發表されている。

この地形は次の奴国への旅程に関係する。私たちは「南佐賀交差点」辺りで乗船、有明海を東南に進み、次に筑後川を渡り、奴国に到着する。旅程は陸行と「有明海～筑後川」水行をかねるので、陳寿は単に「東南至奴国」と書いたものと思われる。この旅程に「行」という文字を使わなかったのはこの事情であろう。

古田武彦氏は奴国旅程に「行」の文字がないという理由で、奴国を旅程から外したが、「行」がないのは、船を使ったからである。

下山正一氏・松浦浩久氏・日野剛徳氏の佐賀地域図をお借りして下に示してみよう。

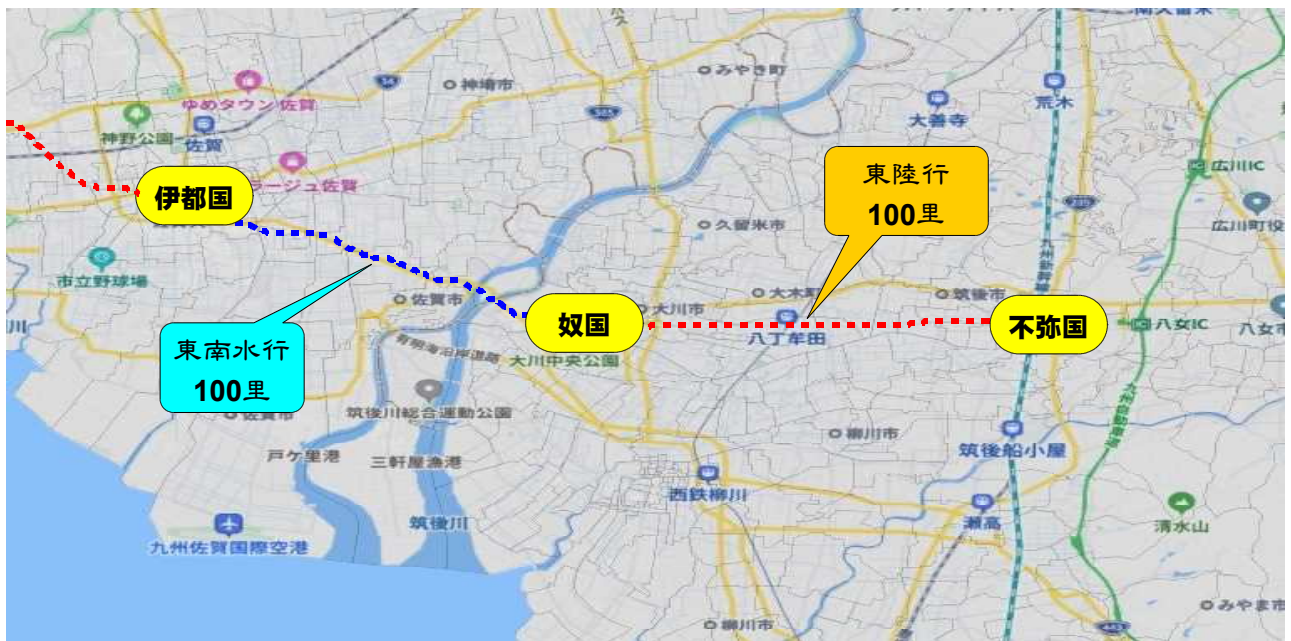


佐賀市県庁から有明海、筑後川を東南に約10km、大川市役所に到着する。ここが奴国である。かつて八女民俗資料館を訪問した際、「大川市は当時、海の下だった」と教えていただいたが、確かに縄文時代は有明海の下である。だが弥生時代は海退して陸地となっている。奴国は2万余戸の大国である。大川市だけでなく、筑後川の上流域の久留米市を含む大国だったと思われる。

東行至不弥国百里

次は不弥国である。奴国(大川市)から陸路を東に百里。そこが不弥国である。

実際、大川市役所すぐ近くから東にまっすぐの道が伸びている。10km進むと、筑後市役所である。筑後市が不弥国である。



ここまでの里数を整理してみよう。

唐津市から筑後市までの里程700里は計測70km。陳寿の「方角」「里」は正確である。

唐津市…(東南50km)…佐賀市…(東南10km)…大川市…(東10km)…筑後市

陳寿里程は狂いなく九州地図に収まる。末廬国は唐津市。伊都国は佐賀市。奴国は大川市。不弥国は筑後市である。それぞれの都市間の計測は陳寿里程と一致する。

松本清張は『「倭人伝」の里数と日数は「漢書」の五服の記事から陳寿がでっちあげた虚妄の数字だと考える』と述べている。虚妄は清張であろう。陳寿の里程は正確、実数である。



第4章 不弥国～投馬国

南至投馬国水行二十日

私たちは不弥国に居る。ここで大いなる迷いが生じる。次の投馬国である。女王国里程分析にとって特別な国が投馬国である。

投馬国とはどこか？その位置が女王国旅程分析にとって重要な意味を持つ。女王国に行き着くには、諸国の位置特定が不可欠であるが、投馬国は他の国とは意味が全く異なる。この国の位置が旅程分析を左右する。そして投馬国ほど想定外の国はない。

投馬国旅程は「南至投馬国水行二十日」である。「方角」と「日数」がある。「日数」は距離を示す一つの方法である。現代でも距離より時間で言われる方が分かりやすいこともある。

投馬国は「不弥国の南」「船で20日」である。これは大航海である。この旅程は「不弥国⇒投馬国」と順進的である。陳寿がこの旅程が「水行」と限定した理由はこの旅程には「陸行」がないからである。筑後市の港から船出、陸路を使うことなく投馬国に到着したのである。

私の不弥国は筑後市である。問題は筑後市の港である。現在の筑後市は直接有明海に面してはいない。陳寿は筑後市から「船」で「南投馬国」というのであるから、「筑後南港」があったことになる。

現代地図では不審に思われるが、弥生時代の地形は違っていた。筑後市の南には矢部川が流れている。JR鹿児島本線に筑後船小屋駅がある。現代ではここが矢部川の港であるが、弥生の矢部川流域はずっと広く、当時の港はもっと北にあった。

「筑後南港」から有明海に出る。20日間航海する。船は東シナ海を南下する。投馬国への「南」「水行二十日」はこの航海である。念を押して言うが、両本とも方角は「南」である。

投馬国は沖縄県那覇市である。



『倭人伝』の距離表示は里程と日程の二つがある。陳寿は帯方郡使が実際に進んだ行程は里程で表すことができた。だが、実際に行かなかった行程は里数で表すことはできない。そこで陳寿は倭国による日数計測を利用した。倭人は里数を知らないと『隋書』は書いている。倭国は

日数によって距離を計算した。里数は分からなくても日数計算は誰でもできる。特別なアクシデントが起こらない限り日数は正確である。同じ距離を行く場合、その交通手段によって日数は異なるが、投馬国は水行のみである。倭人はこの航路を二十日で往来した。これが倭国の記録である。不弥国は筑後市、投馬国是那覇市である。だが、この航路には世界最大の黒潮が流れている。黒潮が立ち塞がるこの海を弥生の船が果たして航海できたのか？このような疑問をいただいた。倭人は黒潮を横断できたのか？



弥生の船が狗邪韓国から末廬国に渡ってきていることは『倭人伝』で明らかである。この海には対馬海流が流れる。この海流を郡使も倭国の使者も横断している。では黒潮はどうか。弥生時代に沖縄と九州の間に交易を示す物証があるのか。もしあれば、人々は黒潮を越えて往来していたことの証拠となろう。

佐賀吉野ヶ里「弥生ミュージアム」のHPに関連記事がある。

紀元前108年に中国の前漢王朝が朝鮮半島に出先機関である楽浪郡を置きます。このことに関連するの、それまで朝鮮半島製が主だった北部九州地方の墳墓の副葬品にこの頃より中国大陸製の鏡や武器などの青銅器が見られるようになります。また、奄美大島や沖縄の珊瑚礁に生息するゴホウラやイモガイという大型の巻貝を加工した貝殻製の腕輪や、新潟県糸魚川産のヒスイなども北部九州地方や近畿地方など西日本の遺跡で発見されています。これらはほとんどが墓の副葬品や特定身分の人々の装飾品であり、威信材の交易がますます盛んになったことが窺えます。鉄器の使用も本格化し、前期には木材を加工する工具として使われていた鉄器が農具としても使われるようになり、需要の高まりに応じて朝鮮半島からの素材の輸入も増加していったことが推定できます。弥生時代中期から後期にかけてこのように広域にわたる交易のルートとネットワークが整備されていったと推定できます。魏志倭人伝にみられるように、後期末には中国大陸の魏と邪馬台国が直接の政治的な交渉を持つようになります。その背景には、弥生時代を通じて蓄積された交易を通じての交流があったと考えられます。」(https://www.yoshinogari.jp/ym/episode05/trade_2.html)



吉野ヶ里遺跡から奄美大島や沖縄の珊瑚礁に生息するゴホウラやイモガイの腕輪が出土している。吉野ヶ里繁栄は卑弥呼の時代より100年ほど前である。この頃すでに沖縄、奄美と佐賀市との間に交易があった証拠といえよう。弥生時代は九州、沖縄、奄美、韓国、中国の広域の交易ルートが確立し、相互の往来が盛んに行われる時代となっていたと考えられている。投馬国～不弥国交易路は現実、所要日数二十日という記録も事実であろう。

倭国の人々は朝鮮海峡を越え帯方郡までやって来ている。だが、それだけではない。倭国の人々は遙か南の投馬国と往来している。両国間は二十日も要する。陳寿はこれらの情報を得ていた。投馬国と倭国の間には世界最大の黒潮が流れている。この黒潮を渡るのは至難である。だが、峻険な山を越える道があるように、黒潮を越える海の道もまた存在するのだ。倭人はその海道を知っている。”なんと驚くべきことか”、という感想を陳寿は持ったのであろうか。「投馬国は水行二十日」と女王国旅程とは無関係な国の記録を残した。金海市と倭国、倭国と那覇市を結ぶ交易路は現代の私たちの想像をも超える。だが、対馬海流、日本海流を越える海道による交流、交易がもたらす革新こそが卑弥呼の国の繁栄の原動力だったといえるであろう。

第5章 倭国22国連邦

「22国」の存在

私たちは不弥国に留まっている。ここまで10700余里である。旅程の大半は過ぎた。ここで、すぐに女王の都に出発したいのであるが、ここに新たな難問が立ち塞がる。「22国」である。

陳寿は突如「22国」を持ち出してきて、「奴国は女王の境界」という。「斯馬国から奴国までが女王の境界、女王の統治国だ」というのである。私たちは女王の国を尋ねて不弥国まで来た。女王国は不弥国の先に存在する。陳寿はここで女王国について何かの情報を示してくれると思いきや、「22国」である。なぜ陳寿は「22国」を提示したのか？「22国」とは一体何か？

卑弥呼の都に向かう前に、まず、この「22国」を片付けなければならない。

次に斯馬國あり、次に己百支國あり、次に伊邪國あり、次に都支國あり、次に弥奴國あり、次に好古都國あり、次に不呼國あり、次に姐奴國あり、次に対蘇國あり、次に蘇奴國あり、次に呼邑國あり、次に華奴蘇奴國あり、次に鬼國あり、次に為吾國あり、次に鬼奴國あり、次に邪馬國あり、次に躬臣國あり、次に巴利國あり、次に支惟國あり、次に鳥奴國あり、次に奴國あり。これ女王の境界の尽くる所なり。

その南に狗奴國あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。郡より女王國に至る万二千余里。

内藤湖南は「斯馬国は伊勢・志摩」「己百支国は伊勢石城」「弥奴は美濃」等々に比定している。同じように、多くの研究者が奈良を起点として全国各地に比定する。だが、この全国比定は妥当であろうか？陳寿は全国各地に散在する22国を「次に、次に」と表現したのであろうか。まず、「次に」「次に」をどう捉えるか、ここから入っていこう。「次に」は特別な意味ではなく、普通の意味に捉えるべきである。「次に有り」「次に有り」とは「順次存在する」の意味である。大阪に淀屋橋と京都三条を結ぶ京阪電車がある。淀屋橋を出た京阪電車は「次は北浜」「次は天満」「次は京橋」「次は野江」と、順次、駅を通過していく。この「次」と同じ用法である。「次に斯馬国」「次に己百支国」「次に伊邪国」「次に都支国」「次に弥奴国」…と、これらの国々が、順次存在したのである。無論、国と云っても弥生集落である。現在の都市のように、

お互いの家の軒を連ねていたわけではないし、また一直線上に存在していたわけでもないが、斯馬国から奴国まで「22国」の弥生集落が順次存在していたのである。「22国」は脈絡なく全国各地に分散していたのではない。

問題は始発である。「始発→斯馬国→己百支国→」である。では、始発は？京阪電車で言えば「始発淀屋橋」を陳寿は「略」している。そこが定まらないと「次の22国」の場所を定めることができない。陳寿の「略」を補正しなければならない。

始発はどこか。むろん投馬国ではない。那覇市の「次」に「22国」はない。では、「女王国の次」か？本命である。多くの研究者はこの位置関係を是とする。「女王国の次に斯馬国有り」と補正するのであるが、肝心の女王国の場所が不明では「22国」は定まらない。

もう一つ候補がある。私たちが、今、在留している不弥国である。

「22国」の一番目の国、斯馬国は「女王国の次」か「不弥国の次」かのどちらかである。どちらにしても、「22国」は不弥国から何百kmも離れていない。

どちらが妥当か、陳寿文面からは判定できない。そこで、「22国」の国名を手がかりにその場所を探してみよう。国名は難解であるが、私たちの日本語である。国の場所を示す何かの糸口は見つけられるに違いない。

< 斯馬国 >

最初に紹介されている国は斯馬国である。「斯馬」の訓みは「しま」である。「しま」は倭人の言葉、つまり日本語である。「斯馬」は「島」。「斯馬国」とは「島国」である。では、「島国」という名にふさわしい場所が近くにあるか？

筑後市のすぐ南にみやま市がある。今、みやま市はもちろん「島」ではない。だが、弥生時代はどうだったのか。何事も現地に立って考えてみよう。弥生時代のみやま市を訪ねてみる。地形に関する研究がなされている。それを転載させていただく。みやま市の弥生地形図は私の想像を遙かに超えていた。

福岡県みやま市(瀬高町・山川町・高田町)の遺跡

(弥生時代:紀元前300年頃～紀元250年頃まで)

当時の地形は有明海の水位が下がり、海岸線は弥生期になるとさらに西に移動していき、小川、大江、金栗、さらに三橋、大和、柳川と島ができ、平地が広がり、弥生期後期には矢部川も一定の流れに変化している。渡来人により水田、水路、道路ができる。

(geo.d51419.com)

3世紀のみやま市



弥生時代、みやま市は島である。弥生後期に海退現象の結果、水位が下がり、次々と島が生まれた。上記のように、「小川」「大江」「金栗」「三橋」「大和」「柳川」が陸地となった。みやま市はまさしく「島国」である。斯馬国はみやま市である。そして、みやま市は筑後市の南に隣接する。つまり、「筑後市の次にみやま市有り」と言える。

不弥国の南に斯馬国が存在した。「次に斯馬国有り」とは「不弥国の次に斯馬国有り」と補正できる。斯馬国から始まる「22国」は不弥国（筑後市）の南に存在する。

みやま市には瀬高町山門遺跡、金栗遺跡を初め、多くの弥生遺跡が存在する。斯馬国とは当時最も大きな島だった瀬高町山門の弥生遺跡群ではなかろうか。

< 鳥奴国 >

「22国」の一つに鳥奴国がある。22の国名には「弥奴国」「姐奴国」「蘇奴国」「華奴蘇奴国」「鬼奴国」「鳥奴国」「奴国」等「奴」が使われている。「奴」を使用した日本の地名が現在に伝わっているかどうか、調べても見当たらない。その理由は「奴」が借字だからである。では「奴」はいかなる倭音の借字なのか。普通「ナ」と読まれ、志賀島で発見の金印「漢委奴国王」は「漢の委(ワ)の奴(ナ)国王」という三段階で読まれる。が、その読みでは王は「奴国の王」となる。ところが、「委奴(イト)国」には王が居たが、「奴国」には王は居なかった。金印は「漢の委奴(イト)国王」と読むべきである。「奴」は倭音「ト」の借字であろう。

陳寿は「委奴(イト)国」を「伊都(イト)国」と変えている。陳寿は「奴(ト)」を「都(ト)」に変換したのである。

倭音「ト」はいかなる意味か？「奴」は、本来の日本語にすると「土」ではないだろうか。かつて、「水」だったが「土」となったという語義である。前原市の古代地名「怡土(イト)」も同じ用法であろう。「怡土」は古代は海、その後、土砂が堆積して「土」となった。「土佐」も同じ語義と思われる。松本清張氏は『魏志』『韓伝』の「蘇塗(ソト)」について、金思燁教授の「蘇塗のソは神を意味し、トは土地を意味する朝鮮語という」を紹介している(『邪馬台国p245)。

大川市が奴国であるが、大川市は縄文時代は有明海だった。やがて、海退現象が生じて「土(陸地)」となった。よって、「土国(トコク)」と呼ばれた。それを陳寿は「奴国」と借字表記したのではないだろうか。「弥奴国」「姐奴国」「蘇奴国」「華奴蘇奴国」「鬼奴国」「鳥奴国」の国々は有明海の海退現象の結果「土」になったか、河川の土砂堆積によって「土」となった土地をさしていると思われる。

「鳥奴」の「鳥」は倭音「ウ」の借字である。「ウ」は本来の日本語にすると「宇」であろう。日本各地に「宇」を使った地名が残る。「宇治」「宇部」「宇田」等である。「宇」の原義は「松野連姫氏系図」に現れる王名である。「宇」は王。従って、「宇田」という地名は「王・宇が所有する田」の意である。「宇城(うき)」は「王・宇の城」が原義である。神武が侵入した「宇陀(うだ)」も「宇一族」の国だった故、戦国となったのである。

熊本県に宇土市がある。この地名には今に至るまで「土」が残されている。宇土市は緑川の下流に位置している。宇土市も有明海の水が引いて「土」となった。よって、地名に「土」が使われたと思われる。加えて、「宇」という王名が地名に継承されている。

「宇土(ウト)市」が「鳥奴(ウト)国」である。鳥奴国は宇土市の「境目西原遺跡」が候補である。女王統治はみやま市から宇土市まで及んでいたことになる。

< 邪馬国 >

「斯馬」は「シマ」、「邪馬」は「ヤマ」である。「シマ」は島、「ヤマ」は山である。「島国」とは島に存在した国の意で、「山国」は山に存在した国を意味する。「ヤマコク」という国が存在したのである。では、邪馬(ヤマ)国はどこに存在したのか。みやま市から順次存在する「22国」の16番目に紹介されており、宇土市よりは北である。「22国」はみやま市から熊本平野にかけて存在している。その中心は現代でも熊本市である。邪馬国は熊本市に存在したと考えるのが順当

である。邪馬国の国名の由来となった「山」とは熊本市に存在する山となる。

『隋書』は「邪靡堆に都す。則ち『魏志』の邪馬台なる者なり」と書き、邪馬台は都の名と捉えている。中国語で「台」は「中央官庁」を意味する。「邪馬台」は「邪馬（日本語）＋台（中国語）」という複合語である。「邪馬台」が意味するのは「邪馬の中央官庁」であるが、「邪馬」とは「邪馬国」の「邪馬」である。従って、「邪馬台」とは「邪馬国にある台」という語義となる。つまり、首都は「邪馬国」にあったのである。首都が置かれた国が中心であることは言うまでもない。

「邪馬台」とは首都名で、現代で言えば「東京」に当たる。この首都名を使って『後漢書』范曄は「邪馬台国」という国名とした。いわば「東京国」としたようなものである。陳寿は「邪馬国」という国名は知っており、『倭人伝』に書いているが、この首都名「邪馬台」は知らなかったと考えられる。何故なら「女王の所都」と一般的に書いているからである。

< 鬼国 >

読みは「キコク」である。日本語本来の文字に戻すと「忌国」となる。正確には「姫国」である。「忌」とは「松野連姫氏系図」の初代王「忌」である。系図では、紀元前五世紀、「呉」が「越」に滅ばされ、王「忌」が王家一族を引き連れ、九州に上陸、菊池郡辺りに国を造ったと伝わる。それが「忌の国＝鬼国」である。

鬼国が「22国」の始原の国である。次の二代目の王「順」はここを出て新しい国を創った。それが「委奴国」と伝わる。その「委奴国」が吉野ヶ里遺跡である。ご存じの如く、吉野ヶ里遺跡は楼閣、壕を備えた嚴重この上もない要塞である。

「越」に祖国を滅ばされ、九州に逃れてきた「呉」の王家姫氏一族は「越」の追撃を警戒して何よりも防御に最適な場所に国を作ったに違いない。吉野ヶ里遺跡がそれを示しているが、初代「忌」の国も吉野ヶ里遺跡と同等かそれ以上の要塞都市だったであろう。

鬼国として最もふさわしい弥生遺跡はどこだろうか。そのような弥生遺跡が菊池市で発見されているのであろうか。

菊池市には「うてな遺跡」「小野崎遺跡」、山鹿市には「方保田東原遺跡(国史跡)」、和水町には「諏訪原遺跡」がある。

これらの多くは菊池川沿岸の台地にある。古墳時代には「江田船山古墳」のような大きな前方後円墳が築かれている。菊池川流域において鬼国にもっとも相応しい弥生遺跡は山鹿市にある「方保田東原遺跡」ではないだろうか。この遺跡は熊本県北部の菊池川とその支流の方保田川に挟まれた台地上に広がる。弥生時代後期から古墳時代前期に繁栄した大集落の遺跡である。

《注1》

このように考えてきたが、実際、山鹿市「方保田東原遺跡」を訪れてみると、この遺跡は越軍の追撃を想定、反撃を可能とするような立地条件が備わっているように見えなかった。

鬼国はどこがふさわしいのか。今回案内していただいた「鞠智城址」は有明海から菊池川を遡って進撃してくる越軍をいち早く発見できる場所にある。「鞠智城址」も鬼国の候補ではある。

しかし、鞠智城址から大規模な弥生遺跡が発見されたという記録はない。また、多くの人が生活するのに必要な水田がここにはない。ここには生活感がないのである。

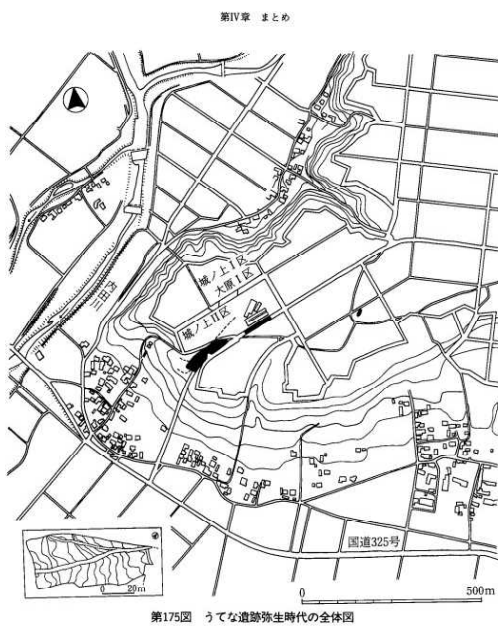
鬼国と思われる弥生遺跡がある。台(うてな)台地の「城ノ上遺跡」である。この遺跡については1992年熊本県文化財調査報告第121集『うてな遺跡』(熊本県教育委員会)に詳しい。本文だけで227頁に及ぶ膨大な報告書である。

1. 環濠について(第175図・第176図)

検出したのは、環濠の一部である10号一A溝跡・'0号一B溝跡の二本である。10号一B溝跡が10号一A溝跡を切っている。新しい10号一B溝跡の時期に、環濠の規模が拡張されている。

10号一A溝跡の北西端部は、北側に曲がり始めており、調査区外では台地の縁に沿ってのびると考えられる。また、10号一B溝跡の北西端部は、ほぼ真っ直ぐにのびており、調査区外でもしばらく真っ直ぐにのび、台地縁辺部付近でのびる方向が北側が変わると思われる。検出した溝跡の北東端部より先は、そのままのび、途中で北側にのびる方向を変え、台地を横切ると推定できる。城ノ上1. 11区と大原I区で検出した溝跡は古墳時代前期のもので(1)、今回検出した溝跡とは繋がらない。また、古墳時代前期の2号方形周溝墓の周溝が10号一A溝跡を切っている。

環濠は台地全体から見ると、西側端部に寄った箇所に位置している。環濠内の状況は、城ノ上I区・II区の調査結果でその一部が分かる。竪穴住居杜は長方形プランを呈し、中央部に炉、長壁に接して貯蔵穴がある。主柱穴は二つで、長軸方向に沿っている。また、壁に沿って地山を掘り残したベッド状遺構が長方形、L字形、. 字形に巡る。城ノ上I区の31号住居杜より、貨泉が出土した。城ノ上I区の52号住居杜は大型の住居杜であり、炉・貯蔵穴がなく集会所と考えられている(2)。



久留米地名研究会の中原英氏が論文「茂賀の浦から狗奴国へ」で「台遺跡」に言及されている。

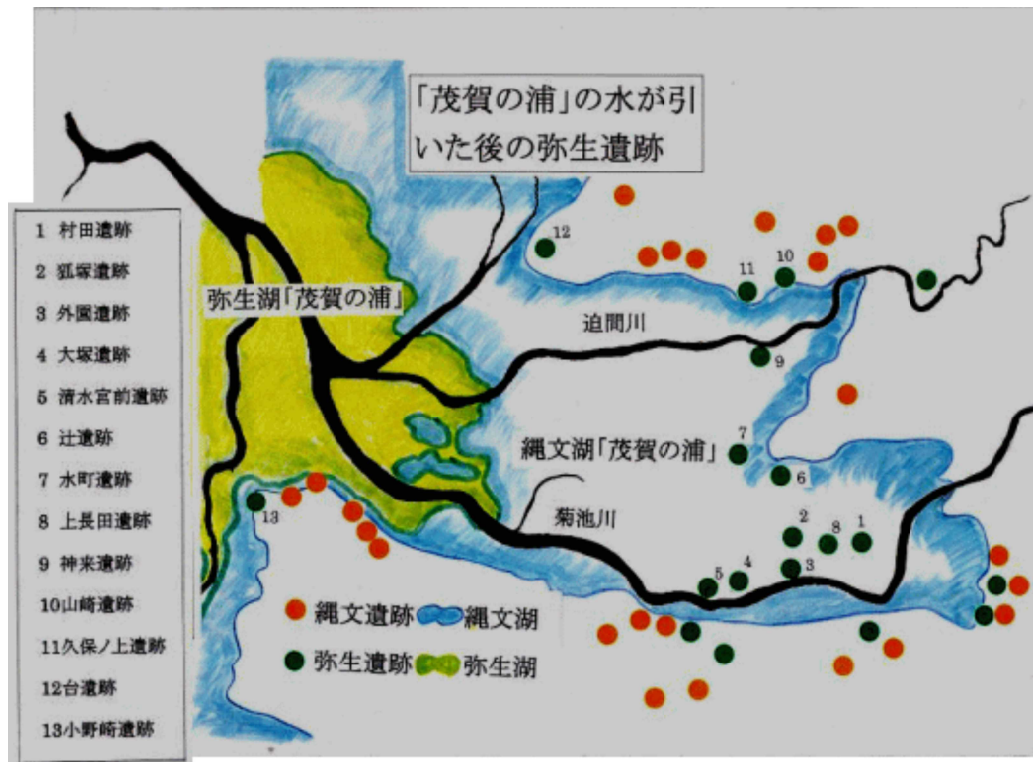
13 「菊池は狗奴国か」

弥生時代になると「茂賀の浦」の水が引いた後に新しい村ができてきた。これらのムラは水田稲作をするための出村であった。そして、盆地面より一段高い台地上の見晴らしの良いところには、ムラを統率するクニができ始めた。

花房台地の小野崎遺跡、三万田遺跡、台(うてな)台地の城ノ上遺跡、岡田遺跡、三次遺跡、山崎遺跡、辺田上霧遺跡、方保田東原遺跡などは、弥生時代に急速に勢力をつけたクニである。台台地の突端の「城の上遺跡」は、発掘当時「吉野ヶ里遺跡」に匹敵する大きなクニであつたろうといわれている。ここから貨泉も出土している。

その後花房台地では、小野崎遺跡が発掘され弥生土器等がコンテナ2000箱ほど出土した。5枚の青銅鏡や2本の鉄の釣り針などが出土しており興味深い。

魏志倭人伝に「…その南に狗奴国あり、男子を王となす、その官に狗古智卑狗あり、女王に属さず…」とあるが、菊池は鞠智城などから、旧地名を「ククチ」と呼ばれていた。「ククチヒク」は、菊池川流域の古代国家を統率する長官ではなかったろうか。狗奴国は、菊池、山鹿、菊水、玉名などの菊池川流域にまたがる連合国であつたろう。」(file:///C:/Users/61717/Desktop/古代湖「茂賀の浦」から狗奴国へ。 熊本県菊池市 中原 英.html)



鬼国は初代姫氏の王「忌」が九州で初めて作った国である。王家一族の存亡を懸けて吉野ヶ里に匹敵するか、それ以上の要塞都市を作ったに違いない。

「忌」は「越」の追撃を警戒、JR鹿児島本線玉名駅付近から菊池川を34kmほど遡り、弥生湖「茂賀ノ浦」に至り、岸边の台地、菊池市七城町高田に国を作ったのではないだろうか。

中原氏作図のように、「茂賀ノ浦」は広大な湖である。台（うてな）遺跡は琵琶湖の東岸に信長が安土城を作ったことを彷彿とさせる。台（うてな）台地は水運、稲作、防御、全て申し分ない条件を備えている。その後「呉」の宿敵「越」が紀元前303年頃に滅びる。危機は去った。姫氏一族は菊池川沿いに次々に新しい国を作ったのではないだろうか。

『倭人伝』は「次に対蘇國あり、次に蘇奴國あり、次に呼邑國あり、次に華奴蘇奴國あり、次に鬼國あり」と22国を示している。台（うてな）遺跡が鬼国と仮定すると「対蘇國」「蘇奴國」「呼邑國」「華奴蘇奴國」等は菊池川流域の国と考えることができるであろう。

《注2》

鬼国の一つ前に紹介されている国が「華奴蘇奴国」である。「華奴」は「カト」、「蘇奴」は「ソト」である。それぞれ別の国であるが、二つの国が併記されていることから両国は対で存在したと考えられる。山鹿市の菊池川高台の方保田東原遺跡は「かとうだ」と読む。田は後に付けたものであろう。「方保」は「かとう」と読むが、普通の読みではない。「かとう」は「華奴（かど）」の訛ではないだろうか。方保田遺跡は方保田川を挟んで東西に存在する。二つの遺跡の姿は「華奴」「蘇奴」二つの国と一致するように見える。

< 奴国 >

女王の境界の国が奴国である。奴国は『倭人伝』旅程で伊都国の次にも現れる。従って、境界の奴国は重出と考える研究者が多いが、別の国である。最初の奴国は大川市である。境界の奴国は熊本平野の南端の国である。

この奴国にも「奴」が用いられている意味を考えれば、この奴国も、旧は有明海の下だったが、弥生の海退によって陸となったのであろう。宇土市の隣で、そのような地勢となれば、宇城（うき）市である。不知火町の「小曾部遺跡」「南請遺跡」「高良柳迫遺跡」等が奴国の候補地である。

< 狗奴国 >

奴国の南にあつて、女王の統治圏外の国が狗奴国である。代々、男王であると伝えている。狗奴国は女王に属さないというのだから、熊本平野に存在しないのではないだろうか？すると、地理的には薩摩であろうと考えてきた。だが、鹿児島市と熊本市は地政上異なる。薩摩・種子島・奄美諸島・沖縄は東シナシーパワーの国である。薩摩(さつま)を陳寿の表記で書き直すと「早投馬(さつま)」となるのではないか。投馬(つま)国は那覇市である。「つま」と「さつま」、両者の間には深いつながりがあつた故であろう。

ところが、斯馬国、烏奴国、奴国は有明海シーパワーの国である。そして狗奴国は奴国の南に位置するといふのだから狗奴国も有明シーパワーの国である。斯馬国から奴国まで21国は女王統治下にある。だが、南端の狗奴国だけが女王の統治下に入らなかったという。奴国の南の狗奴国は宇城市の南隣、八代市となろう。

狗奴国は九州新幹線新八代駅建設の際、発見された「島田遺跡」「上日置女夫木遺跡」「用七遺跡」「西片百遺跡」の弥生遺跡が候補である。

「22国」とは何か

卑弥呼統治の「22国」の幾つかの国の場所は解明できた。「22国」は福岡県みやま市、熊本県菊池市、熊本市、宇土市、八代市にかけて存在した。今は斯馬国から奴国まで「21国」が女王の統治国である。

これ女王の境界の尽くる所なり。

その南に狗奴国あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。

「女王の境界」が奴国である。奴国の南の狗奴国は「境界」外である。だが、奴国(宇城市)と狗奴国(八代市)は隣接する。「境界」は自然によって仕切られたものではない。境界は政治的境界である。その事情を陳寿は書いている。

倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。

つまり、卑弥呼が王になって以来不仲となつた。狗奴国の男王卑弥弓呼は卑弥呼と縁を切つた。卑弥呼以前の王の時代には、狗奴国も「境界」内にいた。その時、国は全部で22国だった、というのである。「21国」と狗奴国とは本来同盟国である。

狗奴国には男王卑弥弓呼が居る。狗奴国に男王が居るように「21国」にも男王が居たと考えるべきである。卑弥呼はこれら「22国」の男王によって「共立」された王なのである。土地と人民を所有するのは「22国」の王である。この王たちは同盟を結んでいる。「卑弥呼共立」が同盟を表している。卑弥呼は「一国の王」ではない。「連邦の王」なのである。広義で使われる女王国とは「単一国家」ではない。22人の男王が治める22国で構成される「連邦国家」である。

陳寿が紹介した「22国」はみやま市から南に集結する弥生国家である。これらの国家は連邦制を採用した特異な存在である。陳寿が「22王国」の名を全て丁寧に記録した理由は中国ではあり得ない連邦国家だったからである。卑弥呼はこの「22王国」を代表する連邦の王なのである。卑弥呼は連邦の王としての地位と権威を持って都に住む。卑弥呼が住む都とは22連邦国の首都(中央官庁)である。歴代の連邦王もこの首都に居た。

通常、弥生遺跡が発掘されても、その遺跡が何と呼ばれたか、声なき声を聞くのは難しいが、幸運にも熊本県の弥生遺跡は『倭人伝』が伝える国々である。発掘された弥生遺跡の幾つかは『倭人伝』の国として特定できるであろう。史的文献と遺跡が一致する極めて希有な例といえる。「女王統治22連邦」のそれぞれの国(弥生遺跡)の正確な比定は私には力不足である。それは熊本県の諸機関、研究所、そして住民の方々による弥生遺跡発掘、調査、研究に期さねばならない。ここでは「22国連邦国」のおよその位置を示してみよう。



第6章 不弥国～女王国

私たちはまだ不弥国に居る。不弥国の「不弥」は倭語である。人気コミック『鬼滅の刃』の彌豆子は「ネズコ」である。刀禰は「トネ」である。「不弥」は古代は「フミ」と発音されていたと考えられるが、現代発音でいうと「船(フネ)」ではないだろうか。現代でも「船町」という港町がある。不弥国は港町であるが、連邦への出入口という重要な位置にある。不弥国の役割は出入国管理である。副官「卑奴母離」とは「人守」、出入国者監督官であろう。

「不弥港」がどこにあったか確かではないが、筑後市役所東隣の「前津」付近ではないだろうか。「不弥港」には投馬国行きの船が停泊している。他にも有明交易の多くの船が停泊している。副官「卑奴母離」は出入国者に「パスポート」の提示を求める。「不弥港」は商人でおおいに賑わい、港の周辺には市が立ち、飲食店が繁盛し、宿屋もあったであろう。今と変わらぬ港町の情景だったと思われる。

出入国管理国家不弥国を関所として南に22人の男王の国がズラリと存在する。22国はそれぞれの王が統治する自治国家である。同時に連邦を形成している。そして、連邦の首都(中央官庁)が存在する。卑弥呼の都とはこの22国連邦の首都である。歴代の連邦王はその首都に居た。連邦の王に推された卑弥呼も今その首都に居る。

卑弥呼の国の姿は東京都と良く似ている。東京都には23区が有る。それぞれ区長がいる。都庁は23区のある新宿区にある。都知事はこの都庁にいる。

卑弥呼の都の正確な位置はまだ霧の中であるが、「22王国連邦」「連邦王卑弥呼」「卑弥呼の都は連邦首都」という骨格は見えている。

南至邪馬壹國

『紹熙本』は「南至邪馬壹国」と作っている。ここには陳寿の「略」がある。この南はどの国の南か、陳寿は略している。一方、『御覧倭国伝』は「又南水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都」と疑問の余地はない。殆ど人は『御覧倭国伝』「投馬国の南至邪馬台国」を当然と見る。「女王国へ行くには投馬国に渡りなさい」と誘導する。さて、どうするか、ここで乗船すべきか、否か？ここ一番の思案のしどころである。慎重を要す。ひとまず、私は投馬国への乗船を見送り、不弥国に留まって考えることにする。

『紹熙本』「南至邪馬壹国」とは「投馬国の南」か？それとも、ここは別の補正が可能なのか？陳寿は明確に「投馬国の又南」と記しているわけではない。その補正は必ずしも「投馬国の又南」となると断定はできない。補正によっては投馬国渡航を見送る選択肢もある。

ここで道理を推してみよう。郡使は船で一大国（壱岐市）から末廬国（唐津市）に到着した。その後、内陸部に向かい伊都国（佐賀市）に到着した。もし、「邪馬台国は投馬国の南」であるなら陸行は必然なのか。「女王国は投馬国の南」だとすれば、その場合、壱岐から投馬国に直行すればいいのではないか。「陸行は不要」、これが道理というものであろう。道理に従えば、投馬国渡航はない。私の補正は「女王国は投馬国の南」ではない。

（投馬国）又南水行十日陸行一月至耶馬台国……『御覧倭国伝』旅程
南至邪馬壹国……『紹熙本』陳寿旅程
不弥国南至邪馬壹国……私の補正

私は投馬国へは渡らない。投馬国行きの乗船切符はこの旅では使わない。だが、我が国の研究者のほぼ全員が不弥国で投馬国行きの船に乗る。「南邪馬壹国」を「投馬国の南邪馬壹国」と補正する人にとって、この乗船に疑問の余地はない。「水行二十日」は長旅である。船上の研究者たちは長旅を楽しみ、いよいよ女王に面会できると期待が膨らんでいる。だが、その期待にそえなくて残念だが、船長が「南」に舵を取り、「二十日」海洋を進めば、船は本州、九州の遙か「南」の投馬国に到着する。こうなってから慌ててももう遅い。それなのに『御覧倭国伝』旅程が女王国ルートとして流布している理由は「南」を「東」に訂正するからである。旅程分析に方角訂正は厳禁である。「南至邪馬壹国」は必ず「南」、決してさわってはならない。投馬国は水行南二十日の国である。その先に女王国はない。『御覧倭国伝』の「投馬国の又南邪馬台国」は実際ではない。投馬国渡航ほど女王国への旅程を狂わせているものはない。

卑弥呼の都への里程1300余里

帯方郡から不弥国（筑後市）まで10700余里である。女王の都は「不弥国の南」に存在する。陳寿はその里程を書いていないが、不弥国のすぐ南に隣接したのではないことは明白である。もし、すぐ南に隣接したのなら、帯方郡から卑弥呼の都までの距離は10700余里となる。しかし、郡から都までの距離は12000余里と明記されているから、卑弥呼の都が筑後市のすぐ南、瀬高町山門あたりとする考えでは距離が合わないのである。

不弥国から女王の都までには陳寿が知らなかった「里程」が存在する。この未知の「里程」を発見して進まなければならない。

では、不弥国から女王の都までの里程は何里か？難しい問題ではない。陳寿は帯方郡から女王の都までの総距離を12000余里と明記している。帯方郡から不弥国までの里程は10700余里であるから不弥国から女王の都までの里程は簡単に計算できる。

12000余里 - 10700余里 = 1300余里。卑弥呼の都は筑後市の南1300余里の所にある。

この1300余里を陳寿のもう一つの記事からも確かめることができる。

参問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋可五千余里

倭地を参問するに海中の洲島の上に絶在す。或は絶え或は連なる。周旋五千余里ばかり。

問題は「倭地」である。どう捉えるか、様々な見解がある。無論現代の国土とは無関係である。陳寿はどのように捉えていたか。倭地に関しては『倭人伝』冒頭に次の記述がある。

從郡至倭循海岸水行歷韓国乍南乍東到其北岸狗邪韓国七千余里

郡より倭に至るには海岸に循(したが)いて水行。韓国を乍は南に、乍は東に曆る。

其の北岸狗邪韓国に到る。七千餘里

「其北岸」は「倭の北岸」である。この解釈が「狗邪韓国(弁辰狗邪国)南岸に倭地が有る」「倭地はない」とに分かれる。「倭地が有る」なら「周旋五千余里」は狗邪韓国南岸倭地から女王国までの里程となる。「倭地が無い」なら「周旋五千余里」は実質対馬から女王国までの里程となる。

「倭地」とはあくまで「領地」であって「領海」ではない。朝鮮海峡が倭の領海だったとしてもこの海峡を「倭地」とはいわない。陳寿には「狗邪韓国南岸の倭地」の情報があつたから「倭の北岸」と書いたのであろう。「倭の北岸」とは「倭の領海の北岸(beach)」のことではない。「倭の領海の北岸の領地(territory)」のことである。

「始度一海」は「北岸の倭地」を前提とした表現である。魏から見れば、狗邪韓国南岸の倭地が倭国の始まり(始発)である。この倭地から「初めて」海を渡る。次の倭地は対馬である。「初めて」は的確な表現である。

「狗邪韓国南岸倭地から女王の都まで周旋五千餘里」と理解するのが自然である。「領海」概念によって朝鮮海峡が倭地と理解すべきでない。

狗邪韓国南岸倭地から女王国まで5000余里

「狗邪韓国南岸倭地～末廬国」は3000余里。「末廬国～不弥国」は700余里。従って「不弥国～女王の都」は1300余里となる。女王国里程は「不弥国南1300余里」である。

卑弥呼の都は「不弥国の南1300余里」

陳寿は「不弥国～女王国」里程を記さなかった。私たちにも簡単に分かるこの里程を陳寿が書かなかったのは史家としての姿勢であろう。「寿の書は銓りて観る可き事を叙し審正多し」と裴松之が賞賛したように、「銓りて観る可き事を叙す」姿勢を貫いたからである。

今、私は陳寿が「脱漏」した女王の都への里程は「筑後市南1300余里」と分析している。

だが、「筑後市の南1300余里」はどの研究者にもない。むしろ陳寿の「脱漏」に対してどのように補正補足するかはそれぞれの研究者に委ねられている。「1300余里」がないのはいいとして、どのように旅程を組んでいるのであろうか。

『倭人伝の世界』において女王国旅程の典型を示された三木太郎氏と、今もって多くの賛同者がいる故古田武彦氏の『邪馬一国の道標』から「1300余里のない里程」を考えてみよう。

三木太郎氏里程

三木氏は『魏略』→『御覧魏志』→『倭人伝』を成立順としている。故、三木氏の女王国旅程は『御覧魏志倭国伝』に基づく。その旅程は総て順進的である。ここに興味深い里数がある。

- ① 行程記事は順進的に読むのが正しい。
- ② 郡から邪馬台国までの距離は1万5200余里となる。
- ③ 倭地5000余里の範囲は居住範囲を示すものではなく、末廬か伊都から邪馬台までの距離を報告したものである。
(『魏志倭人伝の世界』p67)

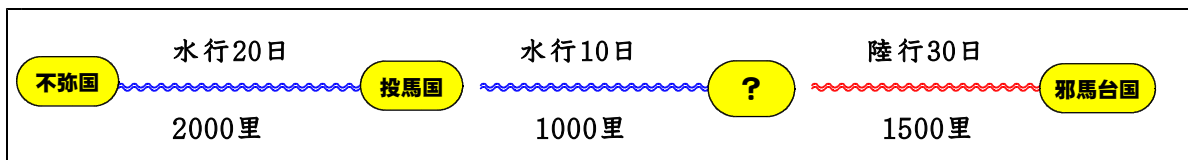
(1) 三木氏の旅程表を示してみよう。

「邪馬台国の位置は、この表の理解に立つて究明される必要がある。これによるかぎり、九州説の成立しがたいことは明らかであるが、ここでは、畿内説が有利であることだけふれておきたい。」と述べられている。(同書 p68)

帯方郡→(7000余里)→狗邪韓国→(1000余里)→対海国→(1000余里)→一大国→(1000余里)→末盧国→(500里)→伊都国→(100里)→奴国→(100里)→不弥国→水行20日(2000里)→投馬国→水行10日・陸行1月(2500里)→邪馬台国→？→奴国→？→狗奴国

帯方郡から不弥国まで10700余里は陳寿旅程である。次の「不弥国→投馬国→邪馬台国」が三木氏の里程である。その里程では不弥国から投馬国へ水行20日2000里の航海をする。そして投馬国から邪馬台国へ水行10日陸行1月2500里を旅する。ここで「究明」すべきは計4500里は何を根拠に算出されたか。そしてこの「一里は何m」か、である。

- (2) 「水行は一日100里、陸行は一日50里とすると、邪馬台国から不弥国までの水行30日・陸行一月は4500里となる」と三木氏は書く。これが氏の「日数→里」換算根拠である。典拠は『唐六典』巻三である。氏の「日程」「里程」は下図のようになる。



『倭人伝』里程は「古周尺一里100m」である。「末盧国…500里…伊都国」は実測50km。狂いはない。では、「古周尺」によって三木氏の里程を考えてみよう。

「水行3000里」は古周尺300km。300kmを30日で航海。水行速度は一日10kmとなる。

「陸行1500里」は古周尺150km。150kmを30日で歩く。陸行速度は一日5kmである。

古周尺では「水行速度一日10km」「陸行速度一日5km」となる。

この水行速度、陸行速度は実際といえるか。私たちは小学校遠足で一時間4kmは普通に歩いた。もしこの速度で陸行したとすれば、唐津市役所から佐賀市佐賀県庁までの50kmに10日要することになる。普通は徒歩2日である。「陸行速度一日5km」は非現実である。

そこで、『唐六典』「水行一日100里」「陸行一日50里」を「漢尺一里=435m」で換算してみよう。漢尺では「水行一日100里=43.5km」「陸行一日50里=21.8km」となる。

この速度が実際である。この数値が実速度である。

三木氏旅程「水行20日=2000里」「水行10日陸行一月=2500里」は『唐六典』に拠る換算である。正確な換算、正確な数値である。問題は「一里」にある。『唐六典』「一里」は「古周尺一里100m」でなく「漢尺一里=435m」である。

- (3) 『倭人伝』「水行20日」は『唐六典』によると、 $2000\text{里} \times 435\text{m} = 870\text{km}$ となる。間違いではない。間は正しい。不弥国と投馬国はこれほど隔たっていたのである。
『倭人伝』「水行10日・陸行30日」は $2500\text{里} \times 435\text{m} = 1087.5\text{km}$ となる。この間も正しい。この数値はJR新幹線博多駅から東京駅までぐらいの距離である。
三木氏旅程の「水行20日=2000里」+「水行10日・陸行1月=2500里」は、 $4500\text{里} \times 435\text{m} = 1957.5\text{km}$ となる。とてつもない距離である。

- (4) 三木氏は「郡から邪馬台国」までの距離を1万5200余里と計算した。「郡～不弥国=10700里」と「不弥国～女王国=4500里」を足して15200里である。だが、この加算は正しくない。

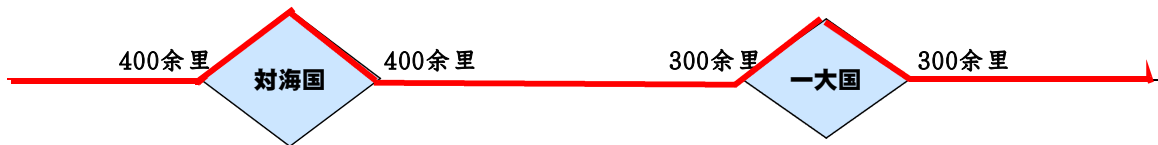
「10700里」は「古周尺一里100m」である。一方、「4500里」は「漢尺一里435m」である。単位が異なる「里」の単純加算は正しくない。

古田武彦氏里程

陳寿の里程は不弥国までが10700里である。残りは1300里である。誰が引き算しても1300里となるが、大方はこの数字をまともに取り上げようとしない。若き(?)古田武彦はこの1300里に果敢に挑んでいる。その当否は別にして目的地に到着するには「方角」と「距離」が全てである。

帯方郡→(7000余里)→狗邪韓国→(1000余里)→対海国→(陸行800余里 + 1000余里)→一大国→(陸行600余里 + 1000余里)→末盧国→(500里)→伊都国→(100里)→不弥国→(0里)邪馬一国

- (1) 古田氏は総距離12000余里の不足分1300余里を「方400余里の対海国」「方300余里の一大国」、この両国の四角形の二辺に見いだしている。(『邪馬一国への道標』p181)



古田氏は「対馬半周800余里」「壱岐半周600余里」計1400余里を里程に加算する。そうすると、合計12100里となる。100里オーバーすることになるが、氏は「奴国は傍国」として奴国100里を旅程から削除するので、結果ピッタリ12000余里となる。

計算は合うが、「対馬半周800余里」「壱岐半周600余里」の海岸線は実際に歩くことはできない。魏使は海岸線はむろん島の中央を貫通する道路も歩いていない。郡使が歩いていない1400里を里程に加算するのは非理である。そこで古田は、1400余里は「陳寿の机上の算法」であって「魏使が実際にこのような対馬壱岐半周行路をとったことは意味しない」と釈明している。

そうはいうものの陳寿の里程にはこの「陸行1400里」はない。陳寿本人が実際に記した里程は「狗邪韓国→対海国→一大国→末盧国」の「水行3000余里」である。この港町から港町への「水行3000余里」は地図に引くことができる。「対馬半周・壱岐半周陸行1400里」はないが、もし、古田が「対馬半周水行600里」「壱岐半周水行210里」というならこれは実際である。この二つの「半周」は対馬海岸線、壱岐海岸線の航海である。だが、この里程は加算されるべきではない。それぞれの「1000余里」の中にすでに含まれている。

「1400余里は私の計算ではありません。陳寿です」と、古田氏に身に覚えの無い机上計算の濡れ衣を着せられては「独り之が為に屈せず」陳寿も苦笑いしているであらう。

「対馬半周陸行800里壱岐半周陸行600里」は他ならぬ古田自身の「机上の算法」である。

- (2) 「机上1400余里」によっても総計12000里となる。だが、この机上計算は当然実の旅程に狂いを生じさせる。郡から不弥国ですでに12000余里となってしまう。不弥国と邪馬一国間は「0里」となる。氏は「不弥国は玄関口である」というが、不弥国と邪馬一国は別国である。二つの国の間には「里程」がある。古田机上計算では不弥国もあつてはならない。総距離を12000余里とするためには「伊都国→邪馬一国」としなければならない。これはもはや陳寿旅程ではない。古田旅程である。机上の無理がここに現れている。
- (3) 古田氏の「対馬半周陸行・壱岐半周陸行」はなんとか「不足1300里」を発見しようとする真摯な努力と見えるが、「机上1400里加算」によって「伊都国～奴国100里」と「不弥国～女王国1300里」が不要となる。これが氏のねらいであろう。

古田氏の「邪馬壱国」は博多である。氏の机上計算は「博多ありき」から逆に導かれたもの

ではないだろうか。「邪馬壱国は博多」とするには、「伊都国から東南100里奴国」は要らない。この道は博多から逸れる。”不弥国から女王国1300里、何を言われる。とんでもない。博多を過ぎてしまうではないか。”古田は「机上1400里」によって博多に行き着いたのである。

不弥国南至女王国1300余里

- (1) 不弥国→(水行二十日)→投馬国→(水行十日陸行一月)→邪馬台国
- (2) 対馬半周800余里+壱岐半周600余里

(1)は不弥国と女王国が1957.5km離れることになる。

(2)は机上。実際にはない里程である。

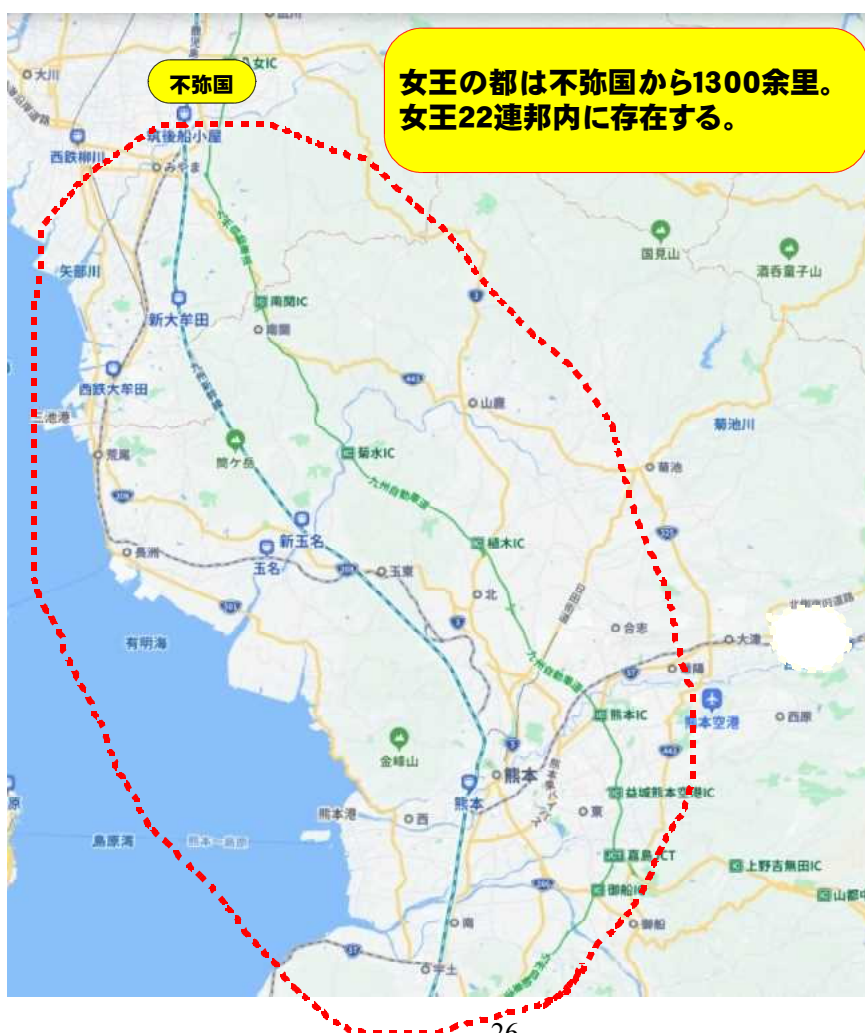
どちらも陳寿が脱漏した「不弥国～女王国」里程を補足しているとはいいがたい。

陳寿が末盧国から不弥国までの「国」「方角」「里」を具体的に書くことができたのは郡使が不弥国まで行ったからである。郡使が不弥国で手に入れた情報は投馬国である。投馬国はここから南、水行二十日の海の彼方にある。郡使は不弥国から投馬国へ出航する船を見たのであろうか。そして郡使はもう一つ情報を得た。

”女王の都も南に存在する”

この二つの情報を陳寿は「南至投馬国水行二十日」「南至邪馬壱国」と記した。

私は陳寿の「南至邪馬壱国」を「不弥国南至女王国1300余里」と補正した。不弥国は筑後市、その南には女王連邦22国(狗奴国は連邦を離脱)が存在する。そして「不弥国南1300余里」はこの連邦圏内に収まる。「不弥国南1300余里」はどのような行程で、どこに行き着くのであろうか。下図の如くその行程は陸路と水路、どちらも考えられる。この行程については陳寿は全く報告を受けてはいないので陳寿は何も記すことはできなかった。しかし私たちは前進できる。



不弥国南至女王国1300余里は水行1200里と陸行100里

1300余里旅程はまず水行である。この想定には根拠がある。陳寿の次の記事である。

- (1) 王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡(王、使を遣わし京都、帶方郡、諸韓國及び郡に詣る)
- (2) 使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王
- (3) 不得差錯(差錯を得ず)

卑弥呼の都への旅程に関係するのは(2)である。

使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王

主語は使倭国。動詞は詣、女王が目的語である。

使倭国は皆、津に臨むと、傳送の文書、賜遺之物を搜露し、女王に詣る。

「使倭国は皆津に臨むと」はここまでの行程が「水行」であることを示している。

当時、不弥国(筑後市)の南は有明海である。「使倭国」は不弥国から陸路を採らず、海路を採ったことを示している。その海路は筑後市役所の東「前津」付近で乗船、有明海に出て大牟田市、玉名市等、女王統治の「22国」の海岸沿いに南下して「津」に到着する航路である。

「使倭国」が着岸した「津」はどこか？

この「津」は筑後市から有明海を南下したところにある「津」である。現代では熊本港となろう。だが、卑弥呼の時代の津はどこだったのか。

古い記録に、「鎌倉時代、緑川下流の川尻(かわしり)に港が開かれた」とある。川尻とは河口の意味である。当時、この辺りが海岸線で、故、最古の港が作られたと思われる。

使倭国が到着した「津」は川尻港とする。

「水行」は筑後市前津から川尻港まで。
「水行」は1200余里とする。計測約85km。

《注3》

今回の旅で川尻も訪れたい場所だった。この港は肥後藩にとって重要な港だったという。「川尻は肥後藩の軍港で年貢米の集荷積出港でした。ほとんどの年貢米は水運を通じて飽田・託麻・益城・宇土の四郡十八手水から二十五万俵が川尻御蔵に集められました」と現地掲示板で説明されている。遺構は肥後藩の建造であるが古来ここに港があったことはまちがいない。

不弥国の港を出て有明海を南下してきた卑弥呼への使者はこの船着き場に到着したと私は想定しているが、熊本市在住の友人は白川河口の港も想定できるのではないかと話された。加藤清正公は白川を水運に利用した。現に熊本港は白川河口にある。

鎌倉時代、江戸時代、この川尻港が使用されたことには理由があると考えられるが、卑弥呼の時代から良港であったことは確かと思える。





- (注) * 陳寿は金海市から対馬市までの水行を1000余里とする。
 * 陳寿は対馬市から壱岐市までの水行を1000余里とする。
 * 陳寿は壱岐市から唐津市までの水行を1000余里とする。
 * 私は筑後市前津から川尻町までの水行を1200余里とする。

ところで、「使倭国」という語法があるのか。『倭人伝』で「使」は12回現れる。

- ①「今使譯所通」②「郡使往来常所駐」③「交易有無使大倭監之」④「王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡」⑤「使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王」
 ⑥「帶方太守劉夏遣使」⑦「送汝大夫難升米次使都市牛利」⑧「汝来使難升米牛利」
 ⑨「還到録受悉可以示汝国中人使知国家哀汝」
 ⑩「其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人」⑪「倭王因使上表答謝恩」
 ⑫「倭王復遣使」

(1) 名詞「使者」の用法は①②④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑫である。

- ④「王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡」は「王は使を遣わし、京都、帶方郡、諸韓國及び郡に詣る」。この王は卑弥呼ではない。卑弥呼の場合は女王と書く。
 ⑤「使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王」は全く別の文である。「皆」は直前の「使倭国」を受け「使倭国は皆」となる。「使倭国」は魏の用語である。分かりにくいですが、「使」は「魏の使者」ではなく「倭国の使者」であろう。「使倭国」は「魏を訪れた倭国の使者」の略形とも考えられる。倭国の王が魏へ派遣した倭国の使者という意味となるであろうか。

(2) 使役助詞「～しむ。～せしむ」は⑨である。

- ⑨「還到録受悉可以示汝国中人使知国家哀汝」は「還りに到らば録を受け取り、ことごとく汝の国中の人に示すべし。国家(明帝)が汝を哀(信愛)することを知らしめよ」。
 ③「交易有無使大倭監之」は「使大倭之を監する」。この場合、主語は「官・使大倭」である。また「大倭をして之を監せしむ」とも訓む。この場合は「官」は「大倭」である。この訓みでは主語は伊都国王となろうか。

川尻港から女王の都へ陸行100里

川尻港のすぐ近くに女王の都が存在したのであれば、「陸行」は不要となる。が、陳寿は「津」から女王の都までの様子を「傳送の文書、賜遺之物を搜露し、女王に詣る」と書いている。

「使倭国」は送られてきた文書、皇帝から賜った貴重な贈り物の装封を港で解いて、国の人々に披露しながら女王のもとに参上した、と読める。ここは陸行である。

この文は景初三年明帝の詔書「還到録受悉可以示汝国中人使知国家哀汝」と同調する。

明帝は卑弥呼に格別に豪華な贈り物をした。「紺地句文錦三匹」「細班華鬘五張」「白絹五十匹」「金八両」「五尺刀二口」「銅鏡百枚」「真珠鉛丹各五十斤」という。

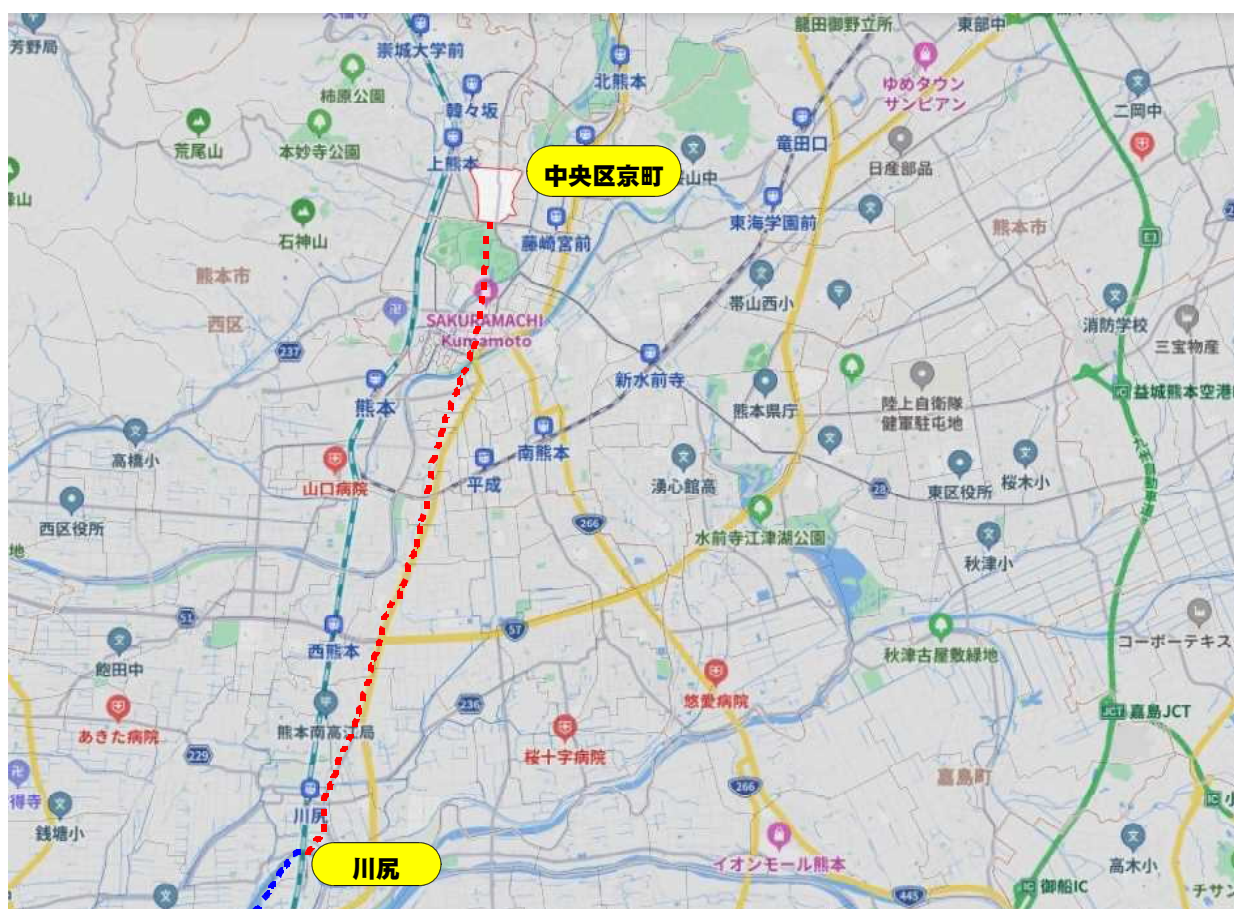
明帝は、これら贈与の品々をことごとく「国中の人」に示し、自分の卑弥呼への信愛の深さを知らしめよ、と細やかに指示している。この時の倭国の使者は灘升米・牛利である。彼らを「使倭国（倭国大使）」と称したのかもしれない。

「使倭国」が川尻港で荷の装封を解いたのは「川尻港から女王の都への街道は女王統治下にある」ことを示している。「使倭国」は荷の装封を解いただけでなく、警戒心も解いたのである。「使倭国」は川尻港から女王国内の街道を女王の都へ向かった。では、使者は川尻港からどの方角へ向かったのか？ここが最終旅程である。女王の都は目前である。最も肝腎なことが不明であるが、もう、ここまで来れば、迷うことはない。女王の都の位置は限定できる。熊本市、その中で、最も古くから栄えてきた町である。

川尻町から薩摩街道を北へ約10km。中央区京町。ここが旅の目的地である。

女王之所都

熊本市中央区京町。女王が都とする所。ここが女王の都である。



里程論は陳寿が残した国、方角、里数を数理的に分析した試論である。帯方郡（ソウル市付近）から女王の都（中央区京町）まで12000余里の分析結果をまとめてみよう。

韓国里程7000余里

從郡至仁川港陸行四百里
循海岸水行九百余里
歷韓国乍南乍東到其北岸狗邪
韓国五千七百里

郡治より仁川港に至る。陸行400里。
海岸に循って水行。900余里。
韓国を或いは南、或いは東に歴て、倭地の北岸（狗邪韓国の南岸倭地）に至る。5700里。

倭国里程5000余里

始度一海千余里至対海国
又南渡一海千余里至一大国
又渡一海千餘里至末廬国
又東南陸行五百里到伊都国
又東南陸行水行百里至奴国
又東行陸行百里至不弥国
又南水行千二百余里至川尻津
又北陸行百里到女王之所都

始めて一海を渡る1000余里。対海国に至る。
また南一海を渡る1000余里。一大国に至る。
また一海を渡る1000余里。末廬国に至る。
また東南に陸行500里。伊都国に到る。
また東南に陸行水行100里。奴国に至る。
また東に陸行100里。不弥国に至る。
また南に水行1200余里。川尻津に至る。
また北に陸行100里。女王の都とする所に到る。

Ⅱ 日程論

第1章 二つの単位

陳寿は里数と日数の二つの単位を用いて旅程を示しているのは周知の事実である。なぜ二つの単位を必要としたのか。松本清張の考察は妥当と思える。

もうひとつ、つけくわえたいのは、不弥国から投馬国・邪馬台国までの水行と陸行を日数であらわしているのに、狗邪韓国から末廬国にわたる朝鮮海峡の水行を里数にしていることである。同じ「水行」なのに、なぜ、ここだけが日数でなく里数なのか。逆に不弥国から投馬国・邪馬台国までの水行がなぜ帯方郡から狗邪韓国までの水行「七千里」、それより末廬国までの水行「三千里」のように里数にしないで日数にしたのか。このへんの謎をみよう。

「倭人伝」の行程の「里数」になっている部分は、帯方郡から実際に通行したところ、「日数」になっている部分は郡使がじっさいに行っていないところである。陳寿（または魚豢）が帯方郡からの報告書にもとづき「里」と「日」でその区別をあらわしたのだと、私は考えている。

里数、日数が存在する理由は次のように考えられる。

- (1) 里数は郡使が実際に通行した旅程である。つまり、陳寿の里数は郡使の報告であろう。
- (2) 日数は郡使が実際には行かなかった旅程である。では、誰がこの日数を計測したのか。清張は「投馬国でも邪馬台国でも、ただ、伊都国から遠いところにあるというだけで、それを陳寿が机上で水行・陸行の「陽数」の日程にでっちあげたにすぎない」と述べている。陳寿の日数は机上の創作であるという。郡使は投馬国と女王国に行っていない。故、里数が書けなかったのは清張のいう通りである。だが、倭人はどうか。言うまでもない。投馬国も女王国も倭人の国である。倭人は不弥国から投馬国までの水行に何日要するのか知っていたにちがいない。卑弥呼の使者は帯方郡に到着している。当然、何日要したか記録したはずである。不弥国から女王の都まで何日要するのか、もちろん知っている。
日数は倭人の計測である。陳寿机上ではなく、実際に倭人が計測したものである。陳寿は郡使が訪問していない未知の里数は倭人の計測した日数で代替したのである。

- (3) 里数は郡使の報告、日数は倭国の報告。であれば、里数、日数ともに実数である。実数が報告されているのに陳寿が机上で虚の里数、日数をでっち上げるとことはなかろう。

日数の里数換算

『倭人伝』にはふたつの日数記事がある。ひとつは「不弥国南至投馬国水行二十日」である。この記事に略はない。出発は不弥国、目的地は投馬国である。所要日数は二十日。

もう一つが「女王の所都水行十日陸行一月」である。女王の都までの日数であるが、この記述にはどこから女王の都までの日数か、出発地が略されている。そこでその補正をいかにするかが問題となる。

謝銘仁博士は「水行十日、陸行一月を帯方郡から邪馬台国までの所要日数とする読み方は極端な読み方であって、問題にならない」という。また、三木太郎氏も「倭人伝の行程をどのように検討しても、こうした読解（注・水行十日陸行一月は帯方郡～邪馬台国間の日数）の根拠を見出すことはできない。そればかりではなく、御覧魏志では「又、南に水行すること十日・陸行すること一月にして、邪馬台国に至る」と読めるように「又」という接続詞によって前後行程記事と繋がっている。」と述べている。謝氏、三木氏共に投馬国から女王の都までとする。

(從投馬国至) 女王の所都水行十日陸行一月…謝氏、三木氏

この順進的読法による行程理解に多くの人が賛同する。そして、この行程は解釈上順当である。しかし、水行十日陸行一月が投馬国から女王国への日程とすると、総距離12000余里をはるかに超える。不弥国までがすでに10700余里である。残りは1300里、この距離に水行十日陸行一月も要するとはいえないことは明らかである。こうしてこの難題を解決するために古来幾多の行程解釈が提出されてきた。榎一雄氏の放射的読法もその一つである。榎氏は「水行すれば十日、陸行すれば一月」と読んだ。この読法にも多くの批判が寄せられたのも事実である。順進的読法、放射的読法のどちらに従っても距離数は整合しない。松本清張は陳寿里程は虚妄であって検討に値しないとまで論じた。各分野の権威がこれほど探求を尽くしても女王の都は定まらない。そこで、里程分析はさておいて、弥生遺跡から女王の国を特定しようとする研究者も多い。だが、水行十日陸行一月は一体何kmなのか、まず明らかにしよう。補正はその後である。

水行十日陸行一月は距離換算すると何kmとなるのか。その数値から「女王の所都水行十日陸行一月」はどこから女王の国までの所要日数なのか、妥当な判断できると思われる。日数を里数に換算するには、『唐六典』巻三の水行・陸行速度がある。

凡陸行之程、馬日七十里、步及驢五十里、牛三十里。水行之程、舟之重者日三十里、江四十里、余水四十五里。空舟溯河四十里、江五十里、余水六十里。沿流之舟則輕重同制、河日一百五十里、江百里、余水七十里

状況設定が詳しく、それぞれ速度が異なるが、歩一日は50里、舟一日は100里としよう。榎氏も三木氏も引用されているので周知の速度であるが、ここでの問題はこの一里の長さにある。

陳寿『倭人伝』の一里は「古周尺一里100m」である。『唐六典』の歩一日50里、舟一日100里が『倭人伝』の一里100mと同じなのか、異なるのか、ここに問題がある。両氏とも一里の長さに言及されていないが、一里の長さを古周尺100mとして、歩一日50里、舟一日100里を換算すると、歩一日50里=5000m(5km)、舟一日100里=10000m(10km)となる。徒歩で一日5kmとは妥当な数字ではない。『唐六典』一里は古周尺ではない。そこで漢尺を用いてみよう。漢尺は一里435mである。漢尺で換算する。

陸行一日50里は50里×435m = 21.75km 水行一日100里は100里×435m = 43.5km

妥当な数値である。『唐六典』一里は漢尺である。では、これに拠って陳寿の日程記事「投馬

国水行二十日」と「女王の所都水行十日陸行一月」をkmに換算してみよう。

$$\text{投馬国水行二十日} = 20\text{日} \times 100\text{里} \times 435\text{m} = 870\text{km}$$

- (1) 不弥国から投馬国までは870kmである。私の不弥国は筑後市、投馬国は那覇市である。ネット距離計測ツールを使って計測するとこの間約880kmである。『唐六典』換算と一致する。これによって『唐六典』一里は漢尺であることが裏付けられる。

$$\text{水行十日} = 10\text{日} \times 100\text{里} \times 435\text{m} = 435\text{km}$$

$$\text{陸行一月} = 31\text{日} \times 50\text{里} \times 435\text{m} = 674.25\text{km}$$

$$\text{女王の所都水行十日陸行一月} = 435\text{km} + 674.25\text{km} = 1109.25\text{km}$$

- (2) 「水行十日陸行一月」は1109.25kmである。

謝氏、三木氏旅程「投馬国→(水行十日陸行一月)→女王の都」が実際の旅程だったのであればこの両国間は1109.25kmも離れていたことになる。JR新幹線博多駅から東京駅ほどの距離である。『唐六典』の里程換算は正確である。一里が漢尺であることも妥当である。両氏が投馬国をどこに比定しているか不明であるが、「從投馬国水行十日陸行一月至女王所都」という両氏の旅程は距離的に見て成り立たないのは明らかである。

「女王之所都水行十日陸行一月」は投馬国から女王国への日程ではない。

女王之所都水行十日陸行一月の補正

では、陳寿「女王之所都水行十日陸行一月」はいかに補正すべきか。謝銘仁博士のいう”極端な読み”となる。

女王之所都水行十日陸行一月……………陳寿

從郡至女王之所都水行十日陸行一月……………私の補正

私の補正は「水行十日陸行一月」は帯方郡から女王の都までの所要日数である。距離換算すると1109.25kmである。この数値が帯方郡から女王の都までの総距離となるはずである。

そこで、帯方郡(ソウル市近郊)から女王の都(熊本市中央区京町)までの旅程を水行と陸行に分けてその距離を計測してみよう。

水行距離

- (1) 帯方郡から狗邪韓国までの旅程は7000余里である。陳寿はその水行・陸行の詳細を残していないので想定することになる。私の水行想定は「海岸に循って水行」という陳寿の記述から仁川港から馬韓の港までの水行とする。
- ① 仁川港…900余里(計測90km)…馬韓の港(挿橋湖)
- (2) 次の水行は陳寿が明記した3000余里である。
- ② 金海市…1000余里(計測92km)…対馬市比田勝
- ③ 対馬市勝本…1000余里(計測92km)…壱岐市勝本
- ④ 壱岐市勝本…1000余里(計測70km)…唐津市
- (3) 当時の地形から察すると伊都国から奴国への100里(計測10km)は水行である。だが、この水行100里は奴国～不弥国間陸行100里と併せて一日の行程でなので、伊都国～不弥国間の水行100里・陸行100里(計測20km)は陸行とする。
- (4) 最後の水行は不弥国から川尻港までの水行である。1200余里とする。計測85kmである。この水行1200里はむしろ陳寿の旅程にはない。私の分析である。
- ⑤ 不弥国(筑後市役所)…1200余里(計測85km)…津(川尻町)

水行5100余里(計測429km)

陸行距離

では、陸行距離はどうか。

- (1) 韓国の里程について陳寿は7000里としか記していない。韓国は魏の統治下にあるから詳細を記す必要がなかったからであろうが、陸行距離を計算するには韓国内の陸行ルートを想定する必要がある。帶方郡から韓国内の陸行距離は水行900里を引いて6100余里とする。まず、ソウル市近郊の帶方郡治から仁川港まで約40kmある。そこから船で海岸に沿って南下して馬韓の港に上陸する。馬韓の港から東南の狗邪韓国南岸倭地までは陸行である。ジグザグに進んだのであるが、実際にどの街道を進んだか、正確な行路は特定できない。よって陳寿の里程をそのまま使って、5700里(570km)とする。
 - ① 帶方郡…400余里(40km)…仁川港
 - ② 馬韓の港…5700余里(570km)…狗邪韓国(金海市)
- (2) 国内の陸行、末盧国から不弥国までの里程は陳寿の記録がある。
 - ③ 末盧国(唐津市)…500里(50km)…伊都国(佐賀市役所)
 - ④ 伊都国(佐賀市役所)…100余里(10km)…奴国(大川市役所)
 - ⑤ 奴国(大川市役所)…100里(10km)…不弥国(筑後市役所)
- (3) 旅程最終の津(川尻港)から中央区京町までの陸行は私の想定で、計測10kmである。
 - ⑥ 津(川尻町)…100里(10km)…女王の都(熊本市中央区京町)

陸行6900余里(計測690km)

- ①ソウル市近郊から中央区京町まで距離計測は水行429km陸行690km計1119kmである。
- ②『唐六典』「水行10日陸行31日」は水行435km陸行674.25km計1109.25kmである。
- ③帶方郡から女王の都までの計測距離と『唐六典』「水行10日陸行31日」の換算距離とはほぼ一致する。
- ④日数「水行10日陸行31日」は帶方郡から卑弥呼の都までの日数である。

「水行10日陸行31日」は「從帶方郡至女王之所都水行10日陸行一月」である。「女王之所都水行十日陸行一月」は一部の旅程の所要日数ではない。帶方郡から卑弥呼の都までの旅のトータル日数である。郡使は女王の都に到着できなかった。そこで陳寿は倭国使節団の帶方郡訪問記録の日数で代替したといえよう。

第2章 異説「郡使は卑弥呼の都に到着した」

- (1) 里数表記は郡使報告
- (2) 日程表記は倭国情報

これが『倭人伝』に二つの単位が存在する理由と考える。郡使は卑弥呼の都に到着していないので陳寿は不弥国から女王の都への旅程の「国」「方角」「里数」「水行、陸行」を記すことができなかった。そこで全行程を倭国使者の帶方郡訪問の日程「水行十日陸行一月」によって代替したと考えるが、郡使は卑弥呼の都に到達したとする見解もある。

その史料とするのは景初二年女王の使者難升米等の帶方郡訪問から始まる一連の魏との外交記事である。

- (1) 景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都
景初二年(238年)六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣る。天子に詣り、朝獻せんことを求む。太守劉夏、吏將を遣わし、京都に送り詣る。
- (2) 其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人斑布二匹二丈以到

…今以汝為親魏倭王假金印紫綬裝封付帶方太守假綬

…汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞今以難升米為率善中郎將牛利為率善校尉假銀印青綬引見勞賜遺還

その年の十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く。親魏倭王卑彌呼に制詔す。帶方太守劉夏、使を遣わし、汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝の獻ずる所の男生口四人女生口六人斑布二匹二丈を奉り以て至る。

…今、汝を以て親魏倭王となす。金印紫綬を假し、裝封して帶方太守に付し假綬する。

…汝の來使難升米、牛利は遠道路を涉り、勤勞した。今を以て難升米を率善中郎將と為し、牛利を率善校尉と為す。銀印青綬を假し、引見勞賜し、遺還す。

- (3) 正始元年太守弓遵遺建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齋詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表答謝詔恩

正始元年(240年)、太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣る。倭王に拝假し、ならびに詔を齋し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因りて上表、詔恩を答謝す。

- (4) 其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縑絲衣帛布丹木短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

その四年(243年)、倭王、また使者大夫伊聲耆掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・絲衣・帛布・丹・木・短弓・矢を上獻す。掖邪狗等、率善中郎將の印綬を壹拜す。

- (5) 其六年詔賜倭難升米黃幢付郡假授

その六年(245年)詔して倭の難升米に黃幢を賜い、郡に付して假授す。

- (6) 其八年太守王頌到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡相攻狀說遣塞曹掾史張政等因齋詔書黃幢拜假難升米為檄告之
卑彌呼以死大作冢徑百餘步徇葬者奴婢百餘人

その八年(247年)、太守王頌、官に到る。倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王卑彌弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する狀を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黃幢を齋し、難升米に拝假す。檄を為して之を告諭す。
卑彌呼以て死す。大いに冢を作る。徑百餘步。徇葬する者、奴婢百餘人。

これらの記事で焦点は正始元年(240年)の記事である。

太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて倭國に詣る。倭王に拝假し、并に詔を齋す。

この記事について古田武彦氏は次のように自説を述べている。

これは倭人伝中、核心をなす史実だ。しかるに「邪馬台國」研究史上「倭使は倭國の都には行かなかった」という説がくりかえし登場した。その原因は行路記事の「読み方」にある。「帶方郡から不弥國(博多灣岸)までは『里程』不弥國から女王國までは『日程』で書かれている」と。これが近畿説・九州説を問わず、共同読解法だった。この「前半は里程、後半は日程」という「木に竹を継いだような」読法。この一点から「後半は倭人からの聞き書き」という憶測が生じ、「魏使は中途の不弥國までしか歩を印していない」という帰結を導きがちだったのだ。しかし、これはおかしい。なぜなら、一方で明白に「倭郡に至り、倭王に会った」と、全伝の眼目をなす一文を書きながら、他方でいかにもあやしげな(途中ストップを容易に疑わせるような)「継ぎはぎ」行路をしるすとは。これでは自分の中心記事を「実はあやしい」と著者(陳寿)自身が告発しているようなものではないか。「矛盾」の故事さながらに。

…答えはひとつ。魏使も著者も西晋朝も、決してこんな木に竹を継ぐ「継ぎはぎ」読法で読んではいなかったのだ。すなわち、里程で書かれている最終地点で倭國の都(博多灣岸)に到着した。いいかえれば「不弥國は邪馬壱國の玄關」——これが唯一の正解であるとわたしには思われる。
『まぼろしの祝詞誕生』p171

- (1)「魏使は倭郡に至り、倭王に会った」が全伝の眼目の一文であるという。この倭王とは誰か、古田氏の検証はない。卑弥呼連邦国には22人の王と伊都国王、計23人の王が居た。それぞれが王を名乗っていたことは『隋書』に記されている。古田氏は正始元年(240年)の倭王が卑弥呼だと考えているが、根拠は示されていない。
- (2)古田氏は「倭郡に至り」と読んでいるが、『倭人伝』は「倭国に詣る」である。魏使が到着したのは「倭都」ではない。ここは古田氏の読み違いである。著書は「倭郡」となっているが「倭都」の印字間違いと思われる。魏使は「倭都」ではなく「倭国」に至ったのである。だが、「倭国」も女王国を含めて30国ある。魏使が到着した「倭国は邪馬壹国である」と断定するには検証が必要である。古田氏の文には修辭は多いが肝心の論証はない。倭国は『倭人伝』は魏使が常に留まるのは伊都国としている。倭国＝伊都国と捉えることもできる。もし「倭国」が女王国だったのなら、陳寿は明白に「女王国」「女王の都」と表記したのではないだろうか。
- (3)古田氏が眼目の一文とした「正始元年(240年)」の記事は魏使が卑弥呼の国、卑弥呼の都に到着した根拠とはならない。

もう一人、三木太郎氏の見解を示してみよう。

倭王の呼称は、倭人伝に五回あらわれる。

事例を示すと、

- (1)親魏倭王卑弥呼に制詔す。…今、汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮す。
- (2)正始元年…倭王に拝仮し…。
- (3)倭王、使に因りて上表し、詔恩に答謝す。
- (4)其の四年、倭王、復使の大夫伊声耆掖邪狗等八人を遣わして…。

とある。

(1)～(4)の五回の倭王の表記は、一応年代順に記しておいたから、(1)が倭王の初見になる。この年は、景初三年十二月で、魏皇帝曹芳の制書によって、これまで、王・女王と呼称された卑弥呼が親魏倭王に冊封されたわけである。倭人伝で倭王の呼称があらわれるのは、これ以後だから、倭人伝の文章がかなり編年的に整理されて書かれたものであることがうかがえる。

『魏志倭人伝の世界』p145

- (1)三木氏は卑弥呼が「親魏倭王」に制詔された景初三年以降の「倭王」とは卑弥呼をさすという。従って「正始元年…倭王に拝仮し…」の倭王は卑弥呼という理解である。そのように理解すれば、240年建中校尉梯儁は女王の都に到着して卑弥呼に会っていたことになる。

倭王＝親魏倭王なのか。

陳寿は伊都国には王が居ることを記している。また狗奴国にも王が居ることも記している。そして、王が居たのはこの二国だけではなく、21国にも王が居たことを知っていたと思われる。『隋書』が「魏の時、訳を中国に通ずるもの三十余国、皆自ら王と称す」と書いていることからして、22国にはそれぞれ王がいたのである。王は全部で23人である。これらの王は全て「倭王」である。倭国には23人の倭王と彼らによって共立された連邦王卑弥呼が居た。

この情報に基づいて魏朝は卑弥呼に対しては「親魏倭王」という特別の名を制詔したのではないだろうか。「倭王」は単に「倭国の王」という普通名詞に過ぎないが、一方「親魏倭王」は称号である。正始元年、建中校尉梯儁が会った王が卑弥呼なら、「…親魏倭王に拝仮し…」と表記したであろう。

- (2)正始元年の倭王の名は「并」である。

正始元年太守弓遵遺建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齋詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表答謝詔恩

正始元年(240年)、太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて倭国に詣り、倭王に拜仮し、ならびに詔を齋し、金帛錦罽刀鏡采物を賜う。倭王、使に因って上奏し、詔恩を答謝す。

(石原道博編訳『魏志倭人伝』)

「并」の通常の用法は「併(あわせる)」「並(ならぶ)」である。石原の読みもこの意味である。「拜假倭王」は倭王に拜假す。「齋詔」は詔を齋(もたら)す。「賜金帛錦罽刀鏡采物」は金帛、錦罽、刀、鏡、采物を賜る。それぞれ明白である。

詣倭国(倭国に詣る) / 拜假倭王(倭王に拜假する) / 齋詔(詔を齋す)

これで十分である。「拜假」と「齋詔」を「並びに」と繋ぐのであれば、「拜假す、ならびに、詔を齋す、ならびに、金帛錦罽刀鏡采物を賜う」となるであろう。だが、「拜假す - 齋す - 賜う」の三つの行為に「ならびに」は不必要である。

「并」は「ならびに」ではない、と思われる。「并」には別の用法がある。それは人名としての用法である。「カツ」と読む。この文では「倭王并(ワオウ・カツ)」と読むべきではなかろうか。「太伯」の伝統を継ぐ中国一字名である。

帯方郡太守弓遵の使者、建中校尉梯儻が倭国にやって来た。使者は王と会った。王は名を名乗った。「并(カツ)」と。

拜假倭王并齋詔賜金帛錦罽刀鏡采物

倭王并(カツ)に拜假す。詔を齋(もたら)す。金帛錦罽刀鏡采物を賜う。

「并」は「克」「勝」「葛」「且」が考えられる。六世紀、筑紫の君「磐井」の子どもは「葛子」とある。この名前も「カツシ」と読むのであろう。『神武紀』には「兄猾・弟猾」が登場する。彼らの名前も「猾(カツ)」である。この兄弟は「菟田縣」の長官で、倭国の地方行政官だった。むろんこの倭国は卑弥呼の倭国ではない。

正始元年(240年)倭王「并」は男王である。この時、女王卑弥呼は健在である。卑弥呼の死を伝える記事は247年である。238年から247年まで連邦国王は卑弥呼である。「并」は連邦の王ではない。22国のいずれかの国の王か、または伊都国の王か、どちらかであるが、郡使は伊都国に常駐したという記事から考えると、倭王「并」は伊都国王とするのが妥当である。

(3) 正始四年(243年)の倭王

その四年、倭王、また使大夫伊聲耆掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・縣衣・帛布・丹・木・短弓・矢を上献す。掖邪狗等、率善中郎將の印綬を壹拝す。

243年倭王の使者は「大夫伊聲耆掖邪狗」である。景初二年(238年)の卑弥呼の使者は「大夫難升米」である。この二人は別人で倭国における身分が異なると思われる。正始六年(245年)、魏は難升米に黄幢を下賜している。黄幢について三木氏は、「黄幢とは『幢蓋は將軍刺史の儀なり』(諸橋轍次氏『大漢和辞典』)とあるように、中国では將軍・刺史に授けられるものである」と解説している。黄幢は將軍に授けられるものであることからして、難升米は將軍ということになる。「難升」は陳寿の借字表記であるから、日本語表記にすると「南将」となるであろう。米は姓である。卑弥呼の連邦国には都の北を護る「北将」と南を護る「南将」の二人の將軍がいたのではないだろうか。景初二年(238年)卑弥呼が遣わした最初の使者は將軍・米である。いわば倭国連邦の軍トップである。ところが正始四年(243年)の倭王の使者は「大夫伊聲耆掖邪狗」である。名前は「伊」で「伊」は伊都国の王家「伊」一族と思われる。正始元年の倭王と正始四年の倭王は伊都国王と考えられる。

(4) 正始元年(240年)、郡使は倭王に会った。倭王は伊都国王「并」。会見場所は伊都国である。正始四年(243年)の倭王は伊聲耆掖邪狗等を派遣した王である。使節団長は「伊」。伊都国王家の一族であろう。郡使は常に伊都国に駐在したという『倭人伝』の記事は郡使の外交窓口は伊都国王であることを示している。

景初二年から始まる魏との外交記事は帯方郡からの使者が卑弥呼の都、熊本市京町に到着したとする根拠にはならない。郡使は伊都国にとどまっている。やはり、陳寿が不弥国から女王国への旅程を明記できなかった理由は郡使が卑弥呼の都まで到着した事実がなかったと考えるべきである。

第3章 卑弥呼の死

景初二年に始まる魏と倭国との一連の外交記事からは郡使が卑弥呼の都に到着したという確証を得ることができない。日程論の途中ではあるが、正始八年は倭国にとって重要な年なので、ここで見ておきたい。正始八年の記事は卑弥呼の死を伝える。卑弥呼はどのような最後を迎えたのか？卑弥呼が連邦の王に就任して以来、倭国は平和であった。ところが正始八年(247年)にその平和は破られた。そして卑弥呼の死である。その死亡記事には亡くなった理由は明記されず、ただ「卑弥呼以死」と記しているだけである。

- ①其八年太守王頎到官 / 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和
- ②遣倭載斯烏越等詣郡 / 相攻狀説
- ③遣塞曹掾史張政等 / 因齋詔書黃幢拜假難升米爲檄告之
- ④卑彌呼以死 / 大作冢徑百餘步 / 徇葬者奴碑百餘人

狗奴国との武力衝突・載斯烏越の派遣・張政の来朝と難升米への檄と告諭という出来事と卑弥呼の死に因果関係にあるのか、ないのか、あるとしたはどんな因果なのか。多くの考察がある。

阿部秀雄氏の考察を孫引きさせていただく。

正始八年条の「卑弥呼は以て死す」については、「以」の記入を認めるかぎり、帯方太守の派遣した郡使が、難升米に対して「檄をつくって告げ諭した」ことによって、卑弥呼が死亡したものと理解する必要がある。郡使が告諭したのは卑弥呼を死亡させるためである——いいかえれば魏朝から死をたまわったのである。ところが通説的見解は、ただ老齢の卑弥呼が死亡したとか、あるいは戦死したなどと解している。これは「檄をつくって告げ諭す」が、いきかせるために檄(かきつけ・てがみ)をもちいたことをあらわしていることをなんら理解していないからである。…つまり普通では承服させることがむずかしい事柄を、説得して承服させることができた事件に「諭す」をもちいたのであり、倭人伝に記されている郡使の「告げ諭す」二例もその例外ではない。(『卑弥呼と倭王』p14)

魏朝は卑弥呼を殺す決定をした。それを難升米に伝えた。ところが難升米はその決定に異を唱えた。そこで魏朝は「檄」を作り、承服できない難升米を説得して承認させた。「告諭」の用法はこういうことである。卑弥呼は魏によって殺された。魏朝の「檄と告諭」を以(もつ)て卑弥呼は死んだと、阿部氏は筋読みしている。難升米への告諭は卑弥呼殺害であるという。

三木太郎氏は卑弥呼の死と抗争とは無関係と捉える。

倭人伝には、使者の派遣事例を六例載せているが、派遣者がはっきりと表されていないのは、正始八年(247)だけで、あとは、王、倭の女王、倭王、倭王、台与と記されている。したがって、この点からみても、正始八年に主体者が欠けているのは異例であることが分かる。まして、正始八年の記事は、倭人伝の中でも最も信用できるとされている外交記事だから、当然倭王が主体者として明記されなければならない箇所だ。上田氏が卑弥呼の死あるいは衰弱を予想されたのは当然である。

…倭人伝があえて倭王とせず倭の女王としたのは、卑弥呼がすでに過去の存在となっていたことを示したものにほかならない。…卑弥呼の死はこのように狗奴国との争乱とは無縁のものであるが、一般に、狗奴国を過大評価するために、前記の推測を生むことになる。倭人伝によるかぎり、狗奴国は、邪馬台国や、さらにそれに統属される二八力国と、対立する国としては決して描かれていないのである。(『魏志倭人伝の世界』p97~)

三木太郎氏は「卑弥呼以(もつ)て死す」と読まずに「卑弥呼以(すで)に死す」と読む。正始八年(247年)の以前に卑弥呼は「以(すで)に」死んでいたとする読みである。そして上田

正昭氏の見解、「いまかりにこうした考え（正始六年には卑弥呼が死んでいた）がなりたたぬとしても、高齢の卑弥呼にはもはや実力はなく、難升米に実権は移動していたとみなすことができよう」（『倭国の世界』上田正昭）を紹介している。

三木氏の読みは、正始八年には卑弥呼は既に死んでいたから派遣主体を欠いた、である。

さらに正始八年に来朝した張政が、卑弥呼に告諭せず、難升米に告諭したことも既に卑弥呼がもはや死んでいたことの理由として示されている。「卑弥呼の死は、このように狗奴国との争乱とは無縁である」と結論している。

「おそらく、倭国が正始八年に使節を派遣して郡に狗奴国との事を報告したのは、卑弥呼の死によって狗奴国の反抗がいちじるしくなり、一方、倭国では、主権者を失って、制圧の具体策に困じたことによるのだろう。ここに、魏朝の公的権威が介在する余地が生まれたのである」と述べている。抗争が卑弥呼の死因になったのではなく、卑弥呼の死が抗争の起因となったと筋読みしている。だが、三木氏は難升米告諭内容にふれていない。

松本清張氏の深読みはこうである。

卑弥呼は鬼道の祭司である。いわゆる桓霊の間、部族の首長どもがたがいに争った末、その休戦と合意のうえで、皆から共に立てられた「一時的」な「祭司的王」であった。いままで書いてきたように実体はかならずしもそうではなかったが、ここは「女王」という「倭人伝」の編者の表現にしたがってもよい。狗奴国との敗戦によって、彼女の力が衰頹したことが証明された。もっとも老齢でもあったろうから、呪力も衰えていたであろう。かくて卑弥呼は重大な敗戦の責めにより諸部族たちに殺された、と私は推定する。

…「以って」を「もって」では意味をなさないの、「よって」と訓む。「よって」の用例は少なくない。したがって、ここを「張政が檄をつくってこれを告諭したので、よって（そのために）卑弥呼は死んだ」と読む。…いわゆる女王国連合の諸部族の首長たち（諸国王）は、敗戦の責めを卑弥呼に帰し、まさにこれを殺すべしと一致していいあわせた。難升米はこの決定を帯方郡特使の張政にいい、張政は郡の権威によってその旨を卑弥呼に檄にして送り、諭し告げた。よって卑弥呼はそれを受けて死んだ（殺された）のであろう。

（『邪馬台国』p252～254）

松本清張氏は卑弥呼は狗奴国との抗争に大敗したと読み、その敗戦の責任を卑弥呼に帰した諸部族の首長たちは卑弥呼の死を決定した。松本清張は難升米はその決定を張政に伝え、張政は郡の権威によって卑弥呼に告諭して死に至らしめたと読む。告諭は卑弥呼に対して行われ、その内容は自害の強要である。その告諭に「以（よって）」卑弥呼は死んだ。

「以」は「すでに」「もって」「よって」と三通りに読まれている。

- * 難升米への告諭は魏による卑弥呼を死亡させるためのものである。難升米は受け入れなかったが、説得して承認させた。告諭をもって卑弥呼は死んだ。……阿部氏
- * 正始八年、狗奴国との抗争以前にすでに卑弥呼は死んでいた。卑弥呼の死因は抗争と張政の難升米への告諭とは無関係である。……三木氏・上田氏
- * 狗奴国との敗戦の責任によって諸国王は卑弥呼の死を決定した。その決定に従って魏朝は卑弥呼に告諭した。その告諭によって卑弥呼は自害した。……松本清張氏

私は普通に「もって」と読んでいいのではと思う。正始八年の一連の出来事は三者三様に読み解かれているが、私は筋読みのカギは戦時の倭国使者載斯烏越にあると思う。

(1) 載斯烏越とは何者のか。

帯方郡に向かった倭国の使者は「載斯烏越」である。「載斯烏越」とは何者か？載斯は倭語「サイシ」の借字である。陳寿の使った借字を日本語に戻すと「祭司」となろう。烏越は倭人の姓名「ウエツ」の借字である。姓は「宇」、名は「悦？」であろう。

この時、なぜ、祭司である「宇」が使者にたったのか？なぜ、戦況報告に軍人ではない祭司が使者となったのか？奇妙だと思われる。難升米が抗争の責任者として郡への片道41日、往復82日、戦場を離れる訳にはいかなかったのは当然である。では、なぜ、載斯烏越が使者なのか。

(2) 祭司「宇・悦」の派遣者は誰か。

「遺倭載斯烏越等詣郡」には派遣者が明記されていない。三木氏の言われるとおりである。では、「載斯烏越」を送った主体は誰なのか？三木氏のいわれるように卑弥呼がすでに死んでいて、卑弥呼が派遣したのではないならば、一体誰が派遣したのかという疑問が浮かぶ。

伊都国王が派遣したのなら「倭王」と記したであろうし、「牛利」が派遣したならその名を記したであろう。烏越が独自の判断で帯方郡まで出かけたのであろうか？この場合はむしろ派遣者を記すことはできない。だが、伊都国王ならそれも考えられるが、烏越にそのような権限があったとはとても考えられない。誰かが載斯烏越を派遣したのである。一体誰か？三木氏はこの点には言及していない。

「遺倭載斯烏越等詣郡」は通常「倭の載斯烏越を遣わし」と読まれる。この読みでは派遣主体はない。だが、「烏越」が倭人であることはいうまでもない。わざわざ「倭の」と説明する必要はない。従って、ここは「倭は載斯烏越を遣わし」と読むこともできる。派遣主体は「倭」である。しかし、この場合でも倭の誰が派遣したかは不明である。誰が烏越を送ったのか？

① 難升米

三木氏がいうように卑弥呼が正始八年には死んでいて、実権が難升米に移動していたとすると、使者を帯方郡に派遣できる力を持っていたのは難升米をおいて他にいない。難升米は狗奴国との抗争における司令官である。彼が戦況報告のための使者を派遣したと考えるが最も自然である。だが、難升米が烏越を派遣したと考えるには問題がある。難升米が帯方郡太守に戦況報告の使者を送るとすれば、信のおける自分の部下である。祭司ではない。

② 卑弥呼

このように使者人選を考えると難升米が祭司「宇」を派遣したはずがない。狗奴国王が「宇」を送った可能性もあるが、その場合、郡太守は受け入れたであろうか。狗奴国は親魏倭王卑弥呼の抗争相手である。太守は受け入れまい。難升米、狗奴国王でもないとしたら誰か？

状況から判断してみよう。狗奴国は本来倭国22国同盟の一員である。ただ、その王が卑弥呼と不仲であったため同盟を離脱した国である。この抗争は「連邦21国対狗奴国」の構図で、阿部氏、松本氏が想定されるような卑弥呼連邦の大敗など万が一にもない。軍事力の差は歴然である。また三木氏が言われるような「卑弥呼の死によって狗奴国の反抗がいちじるしくなった」という想定も無理である。そもそも狗奴国側に「連盟離脱」の理由はあっても武力抗争の理由などない。この抗争は狗奴国が仕掛けたのではない。逆である。仕掛けは連邦国側である。では卑弥呼の意思か。卑弥呼は倭国連邦の内戦を治めるために共立された女王である。卑弥呼に抗争の意思はない。残るは難升米となる。卑弥呼高齢が理由か他の理由で、軍を統括する難升米が連邦を離脱した狗奴国に連邦復帰を迫った、あるいは狗奴国を滅ぼそうとしたか、難升米が戦を仕掛けたと考えられる。この状況で、使者として軍、政治と無関係の祭司が郡に向かったと考えると、祭司を派遣したのは卑弥呼しかいない。

正始八年抗争勃発時、卑弥呼は上田正昭氏のいうように高齢で難升米に実権が移動していたとしても存命だった。卑弥呼が祭司を使者に送ったのである。祭祀は卑弥呼の仕事である。祭司「宇」は卑弥呼の部下である。

卑弥呼の意思はどうだったのか。非戦論、だったと思われる。明らかに「抗争継続」「援軍要請」ではない。卑弥呼の使者「宇」の報告を受けた帯方郡太守は属官、塞曹掾史張政を送ってきた。張政は黄懂と詔書を難升米に与え、「檄」によって難升米に告諭した。告諭について「普通では承服させることがむずかしい事柄を、説得し承服させること（阿部秀雄）」という強い意味をもつ。ここで阿部氏は「卑弥呼殺害」を難升米に承服させたと筋読みするが、卑弥呼を殺害する理由など魏にあるはずがない。難升米への告諭内容は祭司宇の要請に従ったものである。その要請とは卑弥呼の要請である。卑弥呼の要請とは「即時停戦」「和平調停」である。

この抗争を止める力は私にはもはやない。將軍^{まい}米は押さえられない。とすれば、頼りは魏である。私は親魏倭王である。私の願いを帯方郡太守は聞き入れてくれるであろう。使者を送ろう。その使者は誰にするか。米の部下を使うことはできない。私が信頼できるのは軍と政治に無関係な人物、祭司である。祭祀は私の仕事である。宇悦を派遣しよう。

成り行きを見れば狗奴国との抗争は難升米が仕掛けたと読むのが自然である。故、張政が諭すべき相手は難升米である。張政の告諭は和平提案だったと思われる。それは難升米は承服できないことだった。難升米に停戦意思はなかった。だが、難升米は魏朝の官である。黄懂と詔書が与えられて「告諭」されては和平提案を飲まざるをえなかった。その結果、抗争は終結した。告諭の結末を陳寿は書いていないが、難升米が引いて抗争は治まったのである。張政と難升米の会見場所はどこか？魏の黄懂と詔書を与え、「檄」によって太守の意思を伝えるとすれば公式の場である。伊都国に存在した迎賓館以外にはない。この時も帯方郡使張政は伊都国にとどまり、難升米がそこに出向いたと思われる。

卑弥呼は祭司宇を使者とした。祭司宇は卑弥呼の密命を持って太守王頎のもとに行った。密命は和平調停である。卑弥呼は難升米の狗奴国への侵略を即時停止することを帯方郡太守に要請したのではないだろうか。正始八年の争乱と終結の一連の出来事の主体者の名前は明記されていないが、冒頭に卑弥呼の名を挙げることによって和平調停は卑弥呼であることを暗示していると思える。卑弥呼の願い通り、將軍米への告諭は成功した。和平を以(もつ)て、卑弥呼は亡くなった。

わずか13歳ほどの若さで内戦の倭国連邦の女王に就き、内乱を治め倭国連邦に平和共存をもたらし、中国と和平外交を進めた平和主義者卑弥呼の最後として誠に相応しい死ではなかっただろうか。陳寿は卑弥呼の和平調停を塚の建造記事によって暗に讃えた。塚は「徑百餘歩」という。一里は300歩である。一里100mとして一步は33cmである。卑弥呼の塚は直径33mである。熊本市中央区京町の北、径33mほどの小さな塚に卑弥呼は眠っている。

第4章 『御覧魏志倭国伝』旅程

ここで三木氏が典拠とした『御覧魏志倭国伝』旅程を取り上げてみよう。『御覧魏志倭国伝』は次のように旅程を作っている。この旅程に「略」はない。完成している。

又南水行二十日至於投馬国

又南水行二十日投馬国に至る

又南水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都

又南水行十日陸行一月耶馬台国に至る。女王の都とする所である。

投馬国は不弥国の南二十日である。『倭人伝』『御覧魏志』共にその方角、日数は一致する。ここに略はなく文意に紛れはない。困難はこの行程が「水行」であること。そして里程でなく、日数で示していることにある。もし「陸行」ならば「二十日」の距離はほぼ推定できる。だがこの行程は「水行」で「二十日」である。この距離をkmに換算しなければ投馬国の正確な位置を知ることにはできない。三木太郎氏はこの里程を考察して、「不弥国～投馬国水行二十日は2000里」としている。三木氏の2000里の典拠は『唐六典』である。『唐六典』では「水行一日100里」であるから、二十日は2000里となる。ところがこの一里は古周尺一里100mではなく、漢尺一里435mである。三木氏はこの換算に言及していないが、「水行二十日」は漢尺一里435mによって計算すれば870kmとなる。

水行二十日が870kmに相当するとは、恐らく、三木氏を含めて多くの史家の想定外の距離であろう。三木氏には方角考察はないが、『御覧』『倭人伝』共に投馬国は不弥国の南である。投馬国は不弥国の南・870kmに存在する。この南を変更する理由は一切ない。不弥国は筑後市である。筑後市の南・870kmの所に存在するのは沖縄県那覇市である。

『御覧魏志』は「又南水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都」と、女王国は投馬国の南と明記している。だが、投馬国が那覇市だという認識を得れば投馬国の南に女王国はないことは誰にでも分かる。だが、ここでも「水行十日陸行一月」を距離換算しよう。水行十日は435km、陸行一月(31日)は31日×50里×435m = 674kmである。

恐らくこの数字も多くの史家の想定外であろう。だが、考えてみれば驚くような数字ではない。

昔から徒歩は一時間一里(4km)といわれてきた。一日5時間歩くとして一日20km。31日で620kmとなる。陸行一月は674kmは常識的といえる。すると、『御覧』女王国は投馬国の南1109kmのところに存在することになる。『御覧魏志倭国伝』の女王国は存在しない。

そこで、内藤湖南をはじめ我が国の研究者は主張する。“南は東の誤写である”。誤写であるという根拠は示されていないが、「投馬国の南」に国は存在しないことが理由であろう。しかし、南だけが問題なのであるか。南を東に訂正すれば卑弥呼の都に行き着くのであろうか。

我が国研究者の「東」に沿って日本地図を進んでみよう。卑弥呼の都はどこになるか。

又「東」水行二十日至於投馬国

又「東」水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都

不弥国から「東」に水行20日。投馬国に至る。この国を中継して「東」に船で10日航海する。ここまで計30日の大航海である。南でも東でも距離は同じである。『唐六典』によると水行30日は30日×100里×435m = 1305kmである。

今、不弥国を博多区とする。瀬戸内海を東行して大阪港が約530km。まだまだ航海が続く。大阪湾を南下、紀伊半島を迂回して熊野灘に出る。三重県熊野市が約800kmである。この辺りが投馬国である。熊野市から更に10日435km。鎌倉市が約380kmである。水行はここまでとしよう。

次は陸行。鎌倉に上陸する。『唐六典』によると陸行31日は約674kmである。名高い白河の関を越えて、杜の都仙台に至る。女王の都は「邪馬台」、杜の都は「仙台」、偶然にも「台」が共通するが、仙台は女王の都ではない。我が国研究者の「東の邪馬台国」はかくも遠い。

又投馬国南水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都…沖縄の南台湾に至る。

又投馬国東水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都…仙台に至る。

『御覧倭国伝』の「投馬国南女王の都」は実在しない。我が研究者の「投馬国東女王の都」も実在しない。南に行っても、東に行っても女王の都へは行けない理由は方角だけの問題ではなく、『御覧』旅程自体が誤りだからである。

- (1) 卑弥呼の都は投馬国の南ではない。その東でもない。卑弥呼の都への旅程に投馬国を入れることが誤りである。
- (2) 水行十日陸行一月は投馬国から卑弥呼の都への日数ではない。帯方郡から卑弥呼の都への総日数である。『御覧倭国伝』編者はここを取り違えている。

『御覧魏志倭国伝』旅程は全くの誤りである。なぜこの誤った旅程が生まれたのであろうか。

女王国旅程を示した本は『魏略』『魏志倭人伝』『御覧魏志倭国伝』である。『魏略』には伊都国からの旅程はない。『魏志倭人伝』『御覧魏志倭国伝』に女王国旅程があるが、『魏志倭人伝』と『御覧魏志倭国伝』の間には影響関係がある。では、『魏志倭人伝』と『御覧魏志倭国伝』はどちらが先に作られたのであろうか。

三木氏は三書の成立順を、魏略→御覧魏志→倭人伝とする。むろん精密な論証によるものであるが、今、陳寿『魏志倭人伝』旅程は略があり、脱漏があるが、『御覧魏志倭国伝』は完成されていることを手掛かりに両本の影響関係を考えてみたい。二つ考えられる。

- (1)『魏志倭人伝』→(補正)→『御覧魏志倭国伝』
- (2)『御覧魏志倭国伝』→(略)→『魏志倭人伝』

(1)は先に成立した『倭人伝』の陳寿「略」を『御覧倭国伝』編者が補正したと考える。
(2)は先に成立した『御覧倭国伝』を陳寿が略したと考える。

どちらが妥当であろうか。『御覧倭国伝』旅程は実在しないという結論から判断すると、『御覧倭国伝』編者が陳寿「略」を補正したが、その補正が誤りだった。故、実在しない『御覧倭国伝』旅程が誕生した。このように因果関係を捉えるのが妥当であろう。『御覧』の“虚”から『倭人伝』の“実”が生まれてのではなく、逆である。『倭人伝』の“実”から『御覧』の“虚”が生まれた。成立順は『魏志倭人伝』→『御覧倭国伝』である。

第5章 『倭人伝』水行速度及び陸行速度

陳寿は郡から女王の都までを旅程を「12000余里」で示し、もう一つは「水行十日陸行一月」で示した。里数計測はできなくとも日数計測は誰にでもできる。その日数は“実”である。「里数」は距離、「日数」は時間である。距離と時間は人間の知恵である。現代でも、私たちは例えば、“東京～大阪間は距離およそ500km、所要時間は車で約7時間”と言うではないか。目的地を示すには「時間」「距離」が必要であることは古今同じである。

郡から女王の都まで日数を得ることができた。各里程の距離も計測できる。日数と距離を得たことによって、私が知りたかった『倭人伝』の水行・陸行速度を求めることができる。そして速度が分かれば各里程の日数が分かる。韓国内7000余里を何日で旅したのか？金海市から唐津市までの3000余里の海を何日で航海したのか？計算できる。
卑弥呼の使者の船の速度はいかに？卑弥呼の使者の歩行速度はいかに？『唐六典』の速度はすでに知っている。『唐六典』と『倭人伝』の速度は一致するのか、否か。
「距離」を「日数」で割って『倭人伝』の水行速度・陸行速度を求めてみよう。

水行速度

帯方郡から女王の都（熊本市中央区京町）間の水行距離は5100余里、計測計429kmである。429kmを「十日」で航海したことになる。水行速度は一日約42.9kmである。
この船の速度は妥当なのであろうか。三世紀の船がいかなる速度で対馬海峡、玄界灘を航海したのか、その記録はない。判断のくだしようがないが、幸い、水行に関して陳寿はもう一つの記録を残している。
「不弥国南水行二十日至投馬国」である。不弥国は筑後市、投馬国は那覇市である。地図で計測すると、筑後市から那覇市までは実測約880kmである。この880kmを20日間かけて航海した。その速度は一日約44kmである。日本海と東シナ海、異なる海の航海ではあるが、速度はほぼ同じである。『倭人伝』における当時の船の速度は一日約42.9kmと判断してよい。

陸行速度

陸路は6900里、690kmである。この距離を一月（31日）かけて歩いたという計算となる。陸行は一日約22.26kmである。この速度は妥当か。

1861年仁孝天皇第八皇女和宮親子が京から江戸に下った。その時の記録がある。皇女和宮親子の降嫁は東海道を使わず、中山道を使った。東海道の方が早いが、攘夷派の降嫁阻止の動きを警戒して、警護上安全のため中山道を選ったといわれる。一行は京を10月20日に発ち11月15日に江戸に着いた。日数は25日。中山道の距離は534km。和宮一行の速度は一日21.26kmである。

『倭人伝』陸行速度は一日22.26kmである。和宮一行の速度と『倭人伝』の陸行速度はほぼ同じである。『倭人伝』の歩行速度は実速度といえよう。仮に、一日の歩行距離が40kmであったとしたら、どうであろうか。現代のプロアドベンチャーレーサー田中陽希氏でも一日40kmはなかなか難しいであろう。帯方郡から卑弥呼の都へは水行、陸行併せて41日の長旅である。陸行は一日約22.26kmが現実的である。

帯方郡から女王の都まで総距離は12000余里。総日数は水行10日陸行31日。陳寿の距離、日数から演算できる三世紀『倭人伝』の水行速度、陸行速度は次のようになる。また『唐六典』による水行・陸行速度も併記してみよう。

『倭人伝』水行速度は一日約42.9km
『倭人伝』陸行速度は一日約22.26km

『唐六典』水行速度は一日約43.5km
『唐六典』陸行速度は一日約21.75km

第6章 水行十日陸行一月

『倭人伝』速度と『唐六典』速度はほぼ一致する。『倭人伝』速度が解明できたことによって旅程の水行・陸行の各里程に何日要したか、より正確な日数を調べてみよう。

韓国水行(仁川港～馬韓の港)

仁川港から馬韓の港まで90kmとした。この航海は韓半島の西海岸に沿っての航海である。水行速度一日42.9kmで進めば途中の港で一泊必要である。そこで韓国地図によって航路と宿泊地を想定してみる。およそ行程の半分の距離に当たるの前谷里の港とした。

- ①仁川港～42km　～　前谷里の港……1日
- ②前谷里～48km　～　挿橋湖の港……1日



韓国陸行(ソウル市～仁川港)

この間約40kmである。途中一泊する。中間にある富川市とした。

- ① ソウル市～24km～富川市～16km～仁川市……………2日



韓国陸行(挿橋湖～金海市)

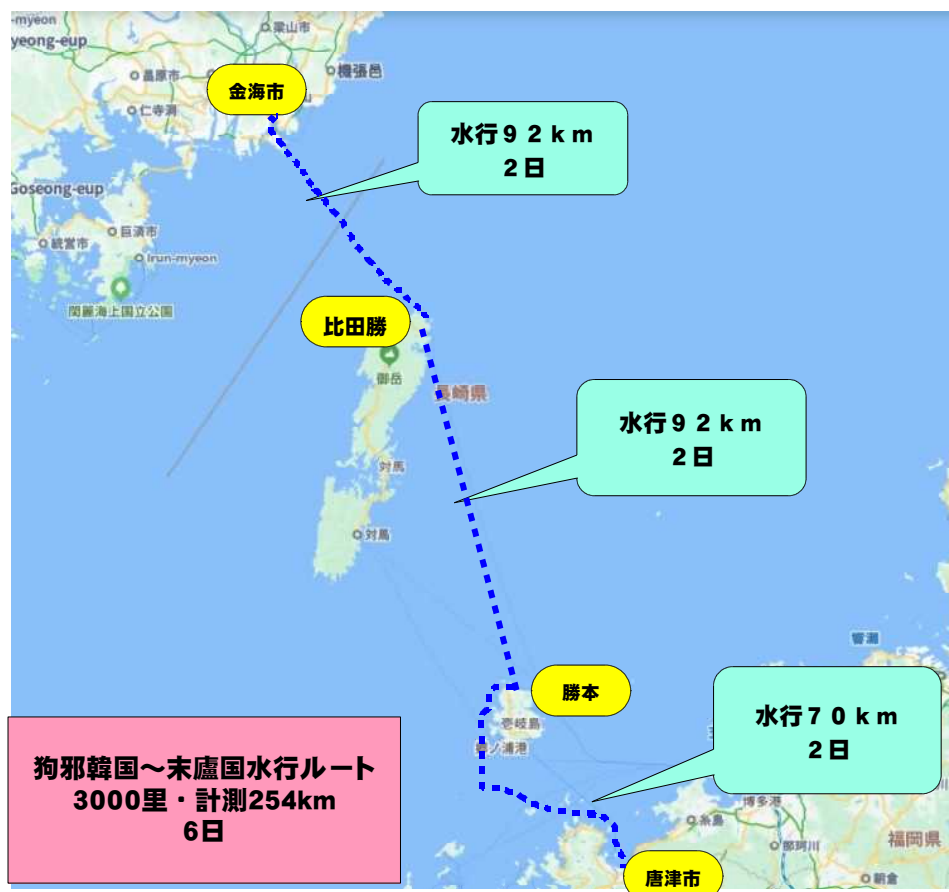
- ② 馬韓の港(挿橋湖)～570km～金海市……………26日

この行程は想定が難しいので、陳寿の指示に従って東南に道をとる。陸行速度一日22.26kで進むと26日要する。韓国陸行は計28日。韓国は水行2日陸行28日併せて30日の旅となる。



倭国水行3000里(金海市～唐津市)

- ① 金海市～92km～比田勝……………2日 ② 比田勝～92km～勝本……………2日
③ 勝本～70km～唐津市……………2日



倭国陸行500里 (唐津市～佐賀市)

- ① 唐津市から佐賀市は計測50kmである。一泊を要する。多久市とする。



倭国陸行200里 (佐賀市～筑後市)

- ② 佐賀市～10km～大川市～10km～筑後市……1日



倭国水行1200里 (筑後市～川尻町)

④ 筑後市～51km～玉名市岱明町……………1日

⑤ 玉名市岱明町～34km～川尻町……………1日

この行程は計測85kmとなる。途中一泊した。宿泊地は玉名市岱明町とした。岱明町には2011年に発掘された環濠集落塚原遺跡がある。

弥生時代の環濠集落跡が発掘された塚原遺跡

玉名市岱明町玉名市教委文化課は2011. 12. 9、同市岱明町野口の塚原遺跡で、弥生時代中後期(1～3世紀)の環濠[かんこう]集落跡と大型の竪穴建物跡などを発掘した、と発表した。古い海岸線のそばで、近くには装飾品の「貝輪(かいわ)」が出土した遺跡もあり、同課は「海上交易の中継拠点の集落」とみている。出土したのは、住居・建物跡23カ所やV字形の溝(幅約5メートル、深さ約2・2メートル)、甕棺墓[かめかんぼ]4基など。溝は形状や位置から集落を守る機能を持ち、一帯が環濠集落だったことを物語る。竪穴建物跡は直径11メートルの円形で、弥生中後期としては九州最大級。集会場などの利用が考えられるという。



倭国陸行100里(川尻町～熊本市京町)

⑥ 川尻町～10km～京町…………(玉名市からの水行1日の日程)



水行十日 陸行一月

水行10日

- ① 仁川港～42km～前谷里の港…………1日
- ② 前谷里～48km～挿橋湖の港…………1日
- ③ 金海市～92km～比田勝…………2日
- ④ 比田勝～92km～勝本…………2日
- ⑤ 勝本～70km～唐津市…………2日
- ⑥ 筑後市～51km～玉名市岱明町……1日
- ⑦ 玉名市岱明町～34km～川尻町……1日

(注) 川尻町から熊本市中央区京町は10kmの陸路である。だがこの10kmは玉名から川尻の水行34kmの行程と併せて計44kmなので1日とする。

陸行31日

- ① ソウル市～24km～富川市…………1日
- 富川市～16km～仁川市…………1日
- ② 挿橋湖～570km～金海市…………26日
- ③ 唐津市～50km～佐賀市役所……2日
- ④ 佐賀市役所～10km～大川市役所～10km～筑後市役所……1日

(注) 佐賀市からの大川市への10kmはほぼ水行である。大川市から筑後市は陸行10kmである。水陸併せて存在するが、20kmは一日の行程なので陸行とする。

韓国水行2日・陸行28日図



倭国水行8日・陸行3日図



女王の国は熊本市中央区京町である。

陳寿はソウル市から熊本市中央区京町までの里程を12000余里とした。水行距離5100余里、陸行距離6900余里である。水行距離計測は429km、陸行距離計測は690km、計1119kmである。『唐六典』では計1109.25kmとなる。

陳寿はソウル市から熊本市中央区京町までの日程を水行10日陸行31日と記した。韓国内700里は水行2日、陸行28日。金海市から唐津市3000里の水行に6日。唐津市から筑後市まで陸行700里に3日。筑後市から熊本市中央区京町まで水行1200里・陸行100里に2日である。『倭人伝』速度で帯方郡から女王の都に水行10日陸行31日で到着できる。水行10日陸行31日の距離は1109.25kmである。中央区京町が女王卑弥呼の都である。

范曄は『後漢書』で大倭王の首都を「邪馬台」と表している。「台」は中国語で中央官庁、宮殿を意味する。「邪馬」は倭国連邦22国の一つの国の名である。従って「邪馬台」は「邪馬国の台（中央官庁）」の意となる。

熊本市中央区京町の地形図をお借りして掲載する。京町はまさしく「台」である。



では「邪馬国」とはどこか。「邪馬国」とは日本語「山国」である。国名の由来となった「山」はどの山であろうか。茶白山及び京町台となろう。ここが「邪馬国」エリアである。そして、京町本丁で「京町台遺跡群」が発見されている。この弥生遺跡群が「邪馬国」となる。

遺跡名:京町台遺跡群

(熊本市埋蔵文化財地図No.8 - 45、東西400m、南北350m)

所在地:熊本市京町本丁5-12地区:教育学部附属小学校・附属中学校敷地

時期:弥生時代後期(約2000年前)・奈良・平安時代(約1300年前)

近世(約500～400年前)

立地:台地上(標高30～40m)

京町台遺跡群内には、熊本市立京陵中学校と熊本営林局も含まれます。京町地区がある京町台地は、坪井川と井芹川に挟まれていて、台地の東西は急峻な崖地になっています。この天然の要害ともいうべき地の利を活かして、台地の南端には熊本城が築かれており、周辺の台地上には武家屋敷が築かれていました。京町台遺跡で最初に発掘調査が実施されたのは、営林署内の宿舍改築工事(1966年)で、重弧文をもつ弥生土器と、奈良・平安時代の土器(土師器・瓦器など)が少量出土しました。

現在京町台遺跡群は、弥生時代の集落遺跡として認定されています。熊本大学埋蔵文化財調査室では、附属小・中学校構内でも調査を実施しています。江戸時代の附属小・中学校の敷地内は古地図によれば、肥後藩の家老澤村家の広大な屋敷地でした。小学校の敷地内は土地が削られていて、遺跡の残り方はあまりよくありませんが、中学校の敷地では弥生時代後期の竪穴住居址や石棺墓、江戸時代の土坑や井戸が発見され、江戸時代の出土品からは日常生活で使うものに加えて優品が多く出土し、当時の武家屋敷での生活の姿がうかがえます(9405調査地点)。

0007I区 V 層遺物出土状況(0007調査地点)

(<https://www.kumamoto-u.ac.jp/organizations/maibun/isekisyoukai/kyoumati>)

参照 2024年11月3日

京町台地は大阪の上町台地とよく似ている。上町台地も古代、西側の大阪湾、東側の河内灘を北に向かって突き出た台地であった。その北端の要衝に古くは「日本国天皇家」の「難波宮」があった。中世には「石山本願寺」が作られ、その周囲に広大な門前町が栄えた。後に、豊臣秀吉が石山本願寺跡に大阪城を築いたことは誰でも知っている。また上町台地の付け根には四天王寺が造られ、この地も大いに賑わった。

大阪の繁栄は上町台地から始まったといえる。大阪を象徴する御堂筋は上町台地と並行して南北に走っている。上町台地の北端の大阪城周辺は、今も、府庁、府警、法務局、高等裁判所等集結する官庁街である。

《注4》

今回の熊本訪問の目的の一つが「邪馬国」であることは最初に述べた。私は「邪馬国」の位置は熊本市中央区と考えていたがピンポイントで示すことはできなかった。「邪馬国」は借字で本来は「山国」である。故、この国は「山」に存在したはずである。その山はどの山か。インターネット地図では分からない。

今回、案内していただいた金峰山頂(665m)から熊本平野を見ると「山」と見えるの「花岡山」「独鈷山」「万日山」「茶白山」である。「花岡山」「独鈷山」「万日山」も「邪馬国」の候補地といえるが、多くの人が生活するにはいささか狭い、また不便であるように思える。

考えてみれば、倭国22国連邦は「鬼国(菊池市七城町想定)」に始まる。その国から降りて、菊池川流域の台地に国を作り、また、熊本平野に進出して国を作った。北から南への進出であるから、到着するのは京町台地・茶白山である。京町台・茶白山に国(弥生集落)を作るのが自然の成り行きである。京町台遺跡群が「邪馬国」である。

第2章 女王の都 邪馬台

「邪馬国」は京町台遺跡群である。では、卑弥呼の都、大倭王の都「邪馬台」はどこか。

茶臼山は標高38mの台地であるが、なによりも、防御上最適な地といえる。西に井芹川が流れ、東は坪井川が流れる。茶臼山は、卑弥呼の都、『後漢書』大倭王の都「邪馬台」として全ての条件を備えている。ここが倭国連邦の首都である。

五世紀、南朝劉宋の使者は筑後市から有明海を南下して、川尻に到着。北進して熊本市中央区京町に到着した。そして「台（中央官庁）」に登った。茶臼山の王宮に倭国連邦の「大倭王」が居た。使者は「其大倭王居邪馬台国」と報告し、范曄は『後漢書』にそのように著した。「邪馬国」は「京町台遺跡群」である。そして都、「邪馬台」は茶臼山である。

- (1) 京町台遺跡群が「邪馬国」である。
- (2) 京町台遺跡群が女王の住む国、つまり、女王国である。
- (3) 京町茶臼山が「邪馬台」である。
- (4) 京町茶臼山が女王の都とする所、卑弥呼の都である。



女王の「宮室」はどこに

熊本市中央区京町茶臼山が女王の都とする所である。ここが『後漢書』大倭王の宮殿「邪馬台」である。では、女王の宮室は茶臼山のどこに建てられていたのか、さらに踏み込んでみよう。

熊本市中央区京町茶臼山に存在した卑弥呼の「宮室」は『後漢書』の大倭王までの150年間その場所は動いていないと思われる。茶臼山ほど王宮に相応しい場所はない。無論、この間、改築、増築をしたのは当然であるが、王宮はその場所を離れることはなかった。

では、京町茶臼山のどこに卑弥呼の王宮、大倭王の王宮は建っていたのであろうか。
陳寿は「宮室、樓觀、城柵を厳しく設ける。常に人有り。兵を持って守衛す」と伝えている。「宮室」。読みは「きゅうしつ」、意味は「王の邸宅」である。「樓觀」「城柵」を備えた卑弥呼の「宮室」に誠に相応しい場所がある。茶臼山藤崎台である。
ここには、かつて、藤崎八幡宮が存在した。

藤崎八幡宮（ふじさきはちまんぐう）は、熊本県熊本市中央区にある神社である。
旧社格は国幣小社。熊本市域の総鎮守として信仰を集める。（HP）

藤崎の地名について熊本県の歴史研究家鈴木喬氏が次のように述べられている。

「肥後国誌」<ref>上下巻、補遺・索引 復刻大5年刊／後藤是山、青潮社刊などあり。
</ref>によると藤崎に八崎あり、藤崎、鐘射崎、牧崎、榎崎、河原崎、御崎、弥勒崎、筆崎とある。つまり台地の先の尖ったでっぱりが岬（崎）とよばれている。藤崎も藤の花が咲いたら「藤咲」の字を当てるべきなのに、「藤崎」という字を当てているところからみると、井芹川に突き出た岬であったと考えていい。また藤という振り仮名が今でこそ「ふじ」ですが旧かな使いによると「ふぢ」でした。これを濁らないで読むと「ふぢさき」で、つまり井芹川の淵に突き出た岬という意味からついた地名でいい。鈴木喬「藤崎八幡宮の歴史」p.10</ref>

鈴木喬氏の云われる通りである。「藤崎」は本来「淵岬」で、江戸時代の古地図では藤崎台の南側に濠がある。かつては淵だったのである。
この藤崎台こそが卑弥呼の「宮室」「樓觀」「城柵」の場所として、その高さ、その広さ、その地形が誠にピッタリである。

卑弥呼「宮室」は茶臼山藤崎台

五世紀、南朝宋は倭国首都を「邪馬台」と呼んだ。「藤崎台」はその名の通りまさしく「台」である。倭国連邦の代々の王はここに王宮を構えてきたと思われる。

その後、七世紀末倭国連邦の終焉とともに「王宮」は「お宮」となり、熊本の鎮守として人々から崇拝されてきたのではないか。その地の王の住居が「お宮」として存続して崇拝されるのは日本各地で見られる。神社と云うより「お宮さん」として地域に親しまれている。

大阪府吹田市に垂水神社がある。長い参道を登ったところに社殿がある。ここには弥生時代の住居跡が確認されており、古代から人が住んできた。社殿の裏山にはうっそうとした木々が茂る。社殿の西側には現在も山から水が湧いて垂れ落ち「垂水の滝」と呼ばれている。志貴皇子は吹田市の天皇家のこの離宮で新春の秀歌を詠んだ。

”石走る垂水の上の早蕨の萌え出る春になりにけるかも”

この「けるかも」と一気に詠みくだされたのも、容易なるが如くにして決して容易なわざではない。此御歌は皇子の御作中でも優れており、万葉集中の傑作の一つだと謂っていいようである、と斎藤茂吉は評している。志貴皇子は一年の始まりの祝賀の儀の平城京を離れ、吹田の離宮に居た。春の遊びを詠っているものの、歌材は岩を伝う水のほとりに萌え出た早蕨である。天皇家の皇子に春の訪れを告げたのが早蕨とはあまりにも寂しい。歌には皇子の寂寥感がにじみ出ているように感じられる。この離宮も現代では垂水神社として祀られている。「宮（みや）」とは「御屋」であろう。王の邸宅であった名残である。

御崎社は、旧社地の藤崎台の地主神で、本宮勧請の前から茶臼山に祀られていました。
本宮の遷座と共に移転しました。（『九州の神社』藤崎八幡宮）

「御崎社」が本来の神社。「地主神」、つまり、この地を治めた王を祀った宮であろう。「御崎社」こそ卑弥呼の「宮室」、倭王の王宮の継承ではないだろう。熊本市の総鎮守と崇められる藤崎八幡宮は西南の役で焼失し、現在の地、熊本市中央区井川淵町に移されたが、それまでは藤崎台が最も重要な場所、神聖な場所であったと思われる。

卑弥呼の「宮室」が何と呼ばれていたか、不詳である。だが、「台」「宮室」は中国語である。これではない。「お御屋（みや）」が相応しいと思える。或いは、茶臼山にあることから「お山」と呼ばれていたかもしれない。

藤崎八幡宮が熊本市域の総鎮守として信仰を集めてきたのは、倭国連邦国王の代々の王宮がここに存在したからであろう。七世紀、倭国連邦は消滅したが、その王宮は、地主神、藤崎八幡宮として崇拝されてきたのではないだろうか。

茶臼山藤崎台の東側に熊本城が存在する。始まりは、室町時代、肥後守護菊池氏の一族、出田秀信が築いた千葉城といわれる。菊池氏は代々、この地を支配してきた。茶臼山藤崎台には倭国連邦の王宮が「藤崎八幡宮」として崇拝されている。そこは神聖な場所である。よって、出田秀信はそこを避けて東に築城したのではないだろうか。

- (1) 藤崎台には楼観が建ち、城柵で護られていた。東西は川、南側は淵だった。
- (2) 歴代連邦王の王宮もここに存在した。
- (3) 連邦崩壊後、王宮は熊本総鎮守「御崎社」として祀られてきた。



《注5》

卑弥呼の宮室の場所は「藤崎八幡宮」がもつともふさわしいと考えてきた。宮室について松本清張は『宮室というのは、中国の古い注釈に「宮はその外の囲繞をいい、室はその内をいう」とある。別の注釈では「宮」は廟のことで、室は寝室のことだという』と解説している。（〔清張通史〕）

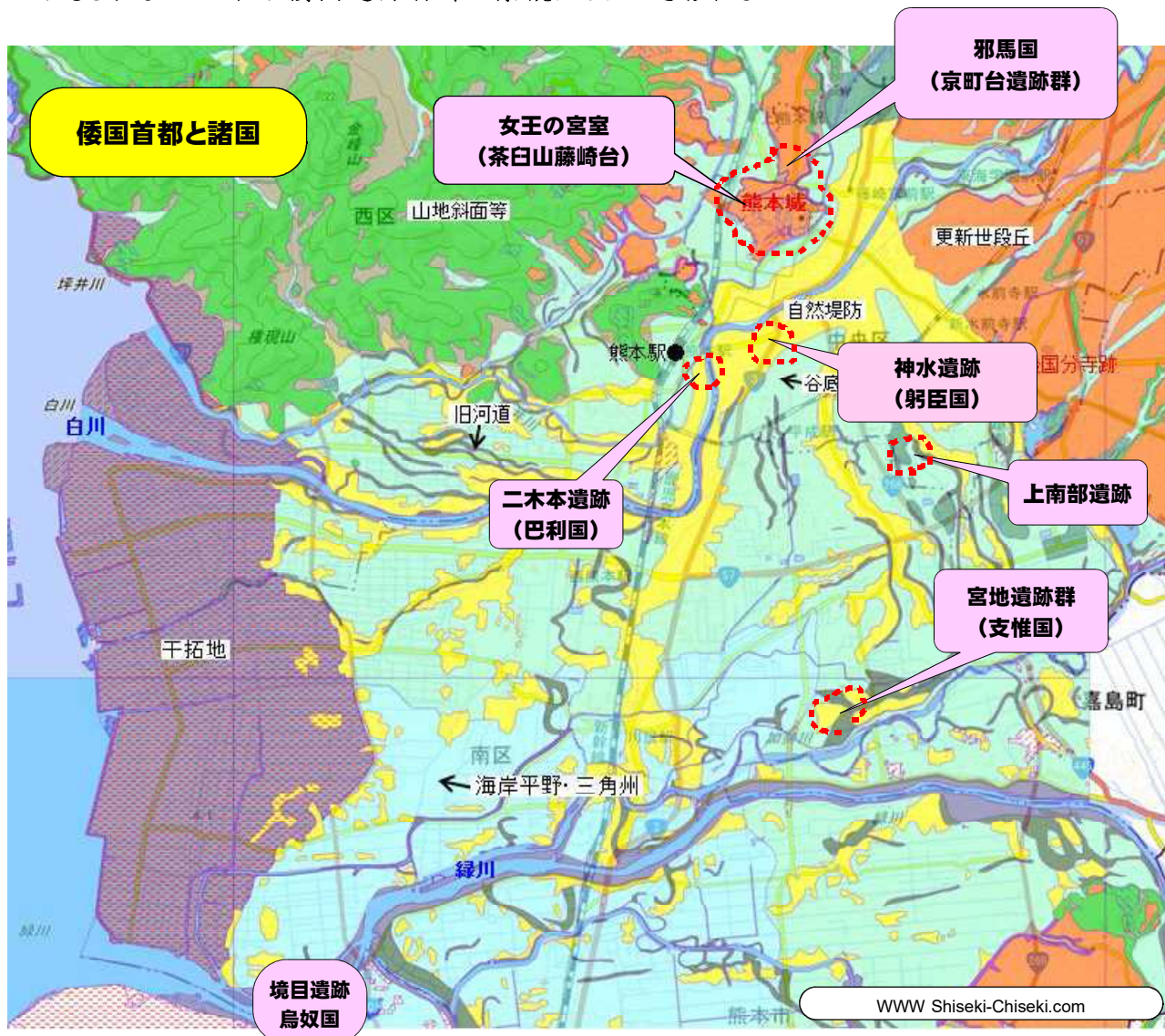
卑弥呼は鬼道（祈祷）を仕事したと陳寿は伝えるので、そのような聖なる場所が存在したのであろう。今回、熊本県立図書館所蔵の宝暦年後半頃（1700年後半頃）の「二の丸絵図」を見ることができた。そこに当時の藤崎八幡宮が描かれている。その敷地は現代の藤崎台球場とほ

ば重なる。藤崎台球場でそんなに外れてはいないが、熊本の友人は熊本県護国神社も中心エリアではなかろうかと話された。

確かに、球場と熊本県護国神社は地続きである。卑弥呼の宮室は「廟」と「住居」だとすれば熊本県護国神社と藤崎台球場が宮室エリアと見るのが相応しい。

倭国連邦首都図

「邪馬国」は中央区京町台遺跡群である。都「邪馬台」は茶臼山である。茶臼山に倭国22国連邦の首都が存在した。「卑弥呼の宮城」は熊本県護国神社・藤崎台球場エリアであろう。楼観が建ち、兵士が護る宮室に卑弥呼は居た。卑弥呼の宮室はベンガラで紅く輝いていたのかもしれない。これが倭国連邦首都の景観だったと思われる。



茶臼山の南、熊本平野の台地には「神水遺跡」「二本木遺跡」「上南部遺跡」「宮地遺跡群」等が発見されている。これらの弥生遺跡は22国連邦国である。

陳寿は「邪馬国」の次に「躬臣国」「巴利国」「支惟国」「烏奴国」「奴国」「狗奴国」と順に紹介している。どの弥生遺跡がそれぞれの国か確定は難しいが、候補をあげてみよう。

- (1) 「躬臣国」は茶臼山に近いと考えられる。中央区大江1丁目「神水遺跡」が候補である。
- (2) 「巴利」は「はり」であろうか。やはり茶臼山に近いと考えられる。西区春日2丁目「二本木遺跡群」が候補である。
- (3) 「支惟国」は城南町宮地遺跡群が候補である。



- (4) 「烏奴国」は宇土市境目遺跡、石ノ瀬遺跡が候補である。
- (5) 「奴国」は宇城(うき)市大塚台遺跡が候補である。
- (6) 「奴国」の南に位置すると書かれた「狗奴国」は八代市島田遺跡・用七遺跡・上日置女夫木遺跡・西片百田遺跡が候補である。

IV 洛陽倭国使節団

238年6月、卑弥呼の使節団が帯方郡を訪問した。彼らは天子に朝献したいと申し出た。なぜ、この時に倭国及び卑弥呼は朝献を申し出たのか。松本清張氏は次のように分析している。

魏の建国は220年である。倭王がはじめて朝貢した年よりも十九年も前だ。魏の成立以来十九年間ほったらかしておき、景初三年になって、急に思いついたように魏に朝貢を倭王が出したのはなぜだろうか。「倭人伝」を解釈するカギの一つがここにある。

その解答は、魏が成立した220年には、帯方郡はまだ公孫氏の支配だったからである。つまり倭国は中国そのものよりも、朝鮮との交易が眼目だったのである。したがって、朝鮮西北部が前漢の直接支配下におかれると倭王は楽浪郡を通じて漢朝の長安に、後漢になるとやはり楽浪郡を通じて遷都した洛陽に、公孫氏の支配になると公孫氏のつくった帯方郡を通じて遼東に朝貢した。魏が楽浪・帯方の二郡を回復(238年)するとすぐ翌年には帯方郡を通じて洛陽に朝貢したのである。魏の建国後十九年も倭国の人たちが魏に朝貢しなかった理由はこうした事情がからだ。

(『邪馬台国』p117)

第1章 倭国使節団

238年の卑弥呼は魏の二郡回復を祝って使節団を送った。その構成は次のように考えられる。

(1) 団長：難升米

難升米は「なしめ」(松本清張)、「なしょうまい」(三木太郎)、「なとめ」(安本美典)と読まれている。難升米は魏から黄幢が与えられている。黄幢は將軍に授けられるものであることからして、難升米の身分は將軍ということになる。すると「升」は倭国本来の漢字に直すと「将」が相応しい。「難」もまた倭国の文字では「南」であろう。「米」は一字名である。難升米は本来の日本語に直すと「南将(ナンショウ)・米(マイ)」であろう。卑弥呼の都(熊本市中央区京町台)及びその南方面を管轄する軍のトップといえよう。正始八年抗争となった「狗奴国(八代市)」は彼の管轄下の国だったのである。

(2) 副団長：都市牛利

都市とは何か。解釈が難しい。「都」は卑弥呼の都の意味であろう。「市」がやっかいである。

「市」は倭音「シ」の借字である。正始八年(247年)の使者載斯烏越を参考にすると、載斯は役職名「祭司」である。司は「担当する」「管理する」で職務を意味する。「都市」の「市」も本来は役職「司」であろう。「都司」は都の行政官を意味する。「牛利」は姓名である。現代囲碁棋士に牛栄子という方が居る。姓は牛(ぎゅう)、名は栄子(えいこ)である。次使は姓が牛(ぎゅう)、名が利(り)である。都司・牛利が役職及び姓名である。

卑弥呼使節団は軍のトップと都の行政官のトップが団長、副団長だったとなる。

(3) 男生口四人、女生口六人

「生口」ほど解釈が混乱している語はない。問題はその読みにある。漢音で「セイコウ」と読む。安本美典氏も「生口」とふりがなを打っている(『邪馬台国論争に決着がついた』p144)だが、「セイコウ」と読むと日本語として意味不明である。従って、奴隷などと「生口」とかけ離れた人物像が出来上がった。

陳寿が郡使から聞いた倭音は「セイコウ」ではなかったと思われる。陳寿はいかに聞いたのであろうか。「ショウク」、であろう。陳寿はそれを「生口」と表記したのである。「生口」は漢音の「セイコウ」ではなく、呉音で「ショウク」と読まれるべきである。

陳寿は倭人が「ショウク」と発音した倭語を「生口」ではなく、「小工」と表記すべきだった。そうすれば混乱は避けられたのである。「小工」は日本語としての意味は明瞭である。ただ、「小工」は現代日本語にはない。なぜなら遠の昔にその実体が消えたからである。だが、対の言葉である「大工(ダイク)」は生きている。倭国社会には「ダイク(大工)」と「ショウク(小工)」の職人が存在したのである。

「大工」は大人の工人(職人)、「小工」は子どもの工人(職人)を意味する。

使節団の一員として随行した「小工」は男の子4人、女の子6人だったということになる。当時の倭国社会では彼らは立派な職工だった。そして、彼らは自らが織った「班布二匹二丈」を皇帝への贈り物として献上した。この織物は倭国にとってはそれほど貴重だったからである。

(4) 持衰一人

持衰も難解である。なぜなら、これも倭音「ジサイ」の借字だからである。陳寿は「ジサイ」と聞いて、持衰と表記した。この漢字の「衰」は喪服のことである。従って「持衰は読んで字の如く喪に服している人の意であろう」と、三木氏は解釈している。(『倭人伝の世界』p132)

石原道博氏は「おそらく喪服をつけたことか、他人の喪をひきうけたことをさすのであろう」(『魏志倭人伝』p479)と注記している。安本美典氏も「衰は粗末な喪服」としている。だが、身近な人をなくし、悲しみにくれる人を長旅に同行させてどうしようというのか。

三人とも陳寿の借字を元に思考を重ねているが、借字ではなく元の倭語に戻して考えるべきである。「ジサイ」の「ジ」の倭国本来の文字は「除」、「除目(ジモク)」と同じ呉音である。「サイ」は「災」であろう。「ジサイ」は「除災」となる。「災いを除く」意である。現代では漢音で「除災(ジョサイ)」として使われているが、意味は同じである。

旅には思いがけない災難、災害は付きものである。そうした災難、災害を除く役割を担った人物が「ジサイ(除災)」というわけである。現代においても災難、災害を除去するのは神官、僧侶である。厄払いは寺院、神社の仕事である。「持衰」も、同じ意味で聖職者である。従って戒律があった、「頭髪を整えない(つまりは坊主)」「シラミを殺さない(殺生をしない)」「衣服を洗わない(これは意味不明)」「肉食をしない」「女性と交わらない」である。これらの戒律は、仏門の剃髪、肉食禁止、または妻は娶らないなどの戒律と通底する。現在の仏門、神門の戒律及び仕事は『倭人伝』聖職者「ジサイ」を継承している。

(5) 使節団

使節団について陳寿は次のように書いている。

其行来渡海詣中国

石原道博氏は「その行来・渡海、中国に詣る」(『魏志倭人伝』p47)と読む。多くの人がこの読みに従う。三木氏の読みも「其の行来、渡海して中国に詣る」(『魏志倭人伝の世界』p198)で、変わりはない。安本氏は「渡海して中国にゆききするときには」と意訳している。

三者共、「行来」と読まれている。「行来」は「行ったり来たりすること」の意であるが、読みは

安本氏の読みのように「ゆきき」である。これは「峠」と同じで漢語ではなく日本語である。「往来」は「行ったり来たりする」意味の漢語であるが、「行来」は漢語ではない。『倭人伝』で陳寿が「行来」を「ゆきき」の意味として使ったとは考えられない。

「其行来」は別の読みをすべきである。「其の行」と読む。「其の」は「倭の」、「行」は「一行」の意味の名詞である。「行」は「行く」という意味の動詞ではない。

この文の主語は「其の行」、動詞が「来」である。「其の行、来たり」と読む。

「其の行」とは「倭の使節団一行」のことである。軍のトップ、行政官のトップ、「小工」、「除災」で構成された倭国一行を陳寿は「其の行」と表記したのである。

其(倭)の一行来たり。(帶方郡から黄海)を渡り、中国に詣る。

(6) 「ジサイ(除災)」への報酬

「ジサイ」について陳寿は次のように記している。

若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹

石原道博氏は次のように読む。

もし行く者吉善なれば、共にその生口・財物を顧し、もし疾病あり、暴害に遭えば、便ちこれを殺さんと欲す。その持衰謹まずといえはなり。

三木氏もほぼ同様に読む。

若し行く者吉善なれば、共に其の生口・財物を顧^{むく}い、若し、疾病有り、暴害に遭えば。便ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹まずと謂えはなり。

この読みでも趣意はそんなに変わらないが、やはり「行」が曖昧である。「行く者」は日本語的読みである。「行く者」と読めば、「帰る者」も記載すべきことになる。

ここの「行」は「倭の一行」、倭国使節団をさす。では「者」は？「者」は「若(もし)……者(ば)」という仮定の用法である。「行」と「者」は別の用法である。

若し、行(使節団一行)が吉善なれば、共に「ジサイ(除災)」の「小工」と財物を顧

若し、疾病有り、暴害に遭えば、すなわち、これを殺そうとする。「ジサイ(除災)」が戒律を破ったという訳である。

難しいのは「顧」である。三木氏は「むくい」と読む。石原氏は読みをうっていない。安本氏は「与え」と読んでいる。動詞「顧」の基本意味は①顧みる・振り向く ②気にかける・配慮するである。

「ジサイ(除災)」は専門職ではあるまい。その旅毎に任命されたか、引き受けたか不明であるが、「小工」「財物」を持つ倭国の「大人」の一人がその任務の当たったと思われる。だが、その任務は命を懸けたものである。従って、一行が無事帰還すれば当然成功報酬があったにちがいない。その報酬が「共顧其生口財物」ではないだろうか。一行が共に協力して「ジサイ(除災)」となった人の「生口・財物を顧みる」「生口・財物を配慮する」となるが、要は無事に帰った一行が「ジサイ」となった人に自分の生口と財物の一部をお礼として差し出した行為をいったのではないだろうか。

松本清張氏は

もし航海者たちが無事目的地に着けば、みなで共同してその者に生口・財物などの報酬^{せいこう}を与える

と意識している。

(7) その他

「行」には陳寿が記録していない他の同行者もいたと思われる。考えられるのは警護を担当する軍人である。道中、何者が襲うかも知れない。「其の行」が武装していたのは当然である。旅の総勢は20～30人ほどだったのであろうか。

第2章 帯方郡から洛陽への旅程

卑弥呼使節団は238年薫風香る5月に倭国の首都、熊本市中央区京町を旅立った。水行10日、陸行31日計41日をかけて、6月に帯方郡に到着した。そして12月には洛陽で皇帝から詔書を受けている。魏の都洛陽は中国河南省北西部の都市で、洛川北岸にあったという。

さて、帯方郡から洛陽までどのようなルートを通って行ったのであろうか。まず、仁川港から中国大陸へは海を渡った。「其行来渡海詣中国」と書いている。海は黄海である。

仁川港からどの港を目指したか？その水行ルートを現代のフェリールートで参考に見よう。

水行ルート

- ①仁川港～港湾街道.....372km
- ②仁川港～青島市.....588km
- ③仁川港～連運港市....708km

どの航路が適当であろうか。現代フェリーで考えると仁川～連運港が最短、最速である。だが当時の船で700kmを途中停泊、補給なしで航海するのは困難と思われる。

従ってまず仁川からの最短距離の港湾街道へまず渡り、そこから南西に青島に渡り、次に連運港市に至ったと想定してみよう。『倭人伝』水行速度は一日約42.9kmと計算してこの日程は20日となる。

仁川港～372km～港湾街道～228km青島市～204km～連運港市
9日 6日 5日



陸行ルート

陸行ルートも想定してみよう。どのルートを通ったか不詳であるが、連運港市から洛陽市まで主要都市を通過するルートを想定してみよう。

連運港市～110km～新沂市～120km～徐州市～160km～遂陽市～146km～開封市～70km～鄭州市～135km～洛陽市 計約741km



『倭人伝』陸行速度一日約22.26kmとして、34日の日程となる。

帯方郡から洛陽まで水行20日陸行36日（郡から仁川までの陸行2日を含む）である。卑弥呼の使節団一行は帯方郡から洛陽まで最短で56日で到着した計算になる。

使節団は6月に郡に到着した。そして皇帝から詔書を受け取ったのが12月であるから、この間6ヶ月である。初夏に帯方郡に到着して、洛陽で冬を迎えている。日程のみ考えればこれほどの日数を要しない。

景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡/求詣天子朝献/太守劉夏遣吏将送詣京都

倭王卑弥呼の使者一行は6月に帯方郡に到着。洛陽まで行き、天子に朝献したいと太守劉夏に申し出た際、劉夏はいかに対応したのか。劉夏に応諾の決断ができたのであろうか。地方長官として魏の朝廷に報告し、その許可を求めたのではないだろうか。

そのように想定をすれば、劉夏は使節団を郡に留め置き、吏将を洛陽に遣したことになる。往復に少なくとも112日要するであろう。皇帝の返書を持って帰ってきたのが、4ヶ月後の9月となる。そうして、劉夏は使節団を洛陽に送らせた。到着は11月となり、皇帝の詔書が12月となる。倭国一行は魏朝への初めての使者である。このような手続きがあったのではないだろうか。朝貢を無事済ませた一行は帰路についた。12月に洛陽を発つていけば、帯方郡到着は2月である。急いで倭国に向かったとすれば卑弥呼の都への到着は4月である。

初夏5月に都を出立した使節団一行は翌年の春、桜の4月に都に帰ってきたということになる。

第3章 女王の都から洛陽への旅程図

女王国から狗邪韓国倭地 5000余里 水行4200里 = 339km = 8日
陸行800里 = 80km = 3日

熊本市中央区京町→(南陸行100里 = 10km + 北水行1200里 = 85km = 2日)→筑後市
筑後市→(西陸行100里 = 10km = 半日)→大川市
大川市→(東北水行陸行100里 = 10km = 半日)→佐賀市
佐賀市→(東北陸行500里 = 50km = 2日)→唐津市
唐津市→(北東水行1000里 = 70km = 2日)→壱岐市
壱岐市→(北水行1000里 = 92km = 2日)→対馬市
対馬市→(北西水行1000里 = 92km = 2日)→金海市



仁川市から～洛陽 水行792km20日 / 陸行741km35日
 仁川港～(東水行379km=9日)～港湾街道
 港湾街道～(南西水行124km=3日)～海陽市
 海陽市～(南西水行108km=3日)～青島市
 青島市～(南西水行106km=3日)～日照市
 日照市～(南西水行75km=2日)～連運港市
 連運港市～(西陸行230km=11日)～徐州市
 徐州市～(西陸行160km=8日)～遂陽市
 遂陽市～(西陸行216km=10日)～鄭州市
 鄭州市～(西陸行135km=6日)～洛陽市





V 結び

私たちの旅は終わった。女王の都、熊本市中央区京町に到着した。女王卑弥呼が茶臼山の宮室で時を超えて訪れた私たちを待っている。

女王への報告書は完成している。以下、ご覧いただきましょう。

第1章 国と都

(1) 女王の国は22の王国による連邦国家です。

不弥(船)国の南に22国が存在します。これらの国は男王が治める自治国家です。

斯馬国・己百支国・伊邪国・都支国・弥奴国・好古都国・不呼国・姐奴国・対蘇国・蘇奴国・呼邑国・華奴蘇奴国・鬼国・為吾国・鬼奴国・邪馬国・躬臣国・巴利国・支惟国・鳥奴国・奴国・狗奴国

倭国は単一の統一国家ではなく、これら22の自治国家による連邦国家です。『隋書』の「魏時譯通中国三十余国皆自称王」が王の存在を裏付けます。今、狗奴国の王は卑弥呼と不仲となり連邦を離脱していますが、元々は連邦の一員です。戸数七万戸は邪馬台国の総戸数と考えられていますが、実は22国連邦の総戸数です。一国当たり3182戸となり、妥当な数字です。

(2) 22人の王の出自

22人の王は一体何者なのか。一つのヒントは国名にあります。国名に王名をつけることがあるからです。22国の国名に王名をつけたと思われる国は「鬼国」です。「鬼」は「おに」という王名ではありません。「鬼」は陳寿が倭音「キ」を「鬼(キ)」と表記したのです。では「キ」は倭国の文字に戻すとどうなるか。「忌」、正しくは「姫」となると推測できます。「鬼国」は「姫国」となり、「鬼奴国」は「姫土国」です。現代、「忌」を使った地名はありませんが、「姫」を使った地名は多く存在します。志摩姫島、姫方町、乙姫、姫浦などです。

では、なぜ「鬼(キ)」が「姫(キ)」だといえるのでしょうか。この推定の根拠が「松野連姫氏系図」と言われる系図にあります。この系図は国会図書館に所蔵されています。また、菊池市の松野家に伝わるといわれます。系図は明治時代に鈴木真年が収集したと言われていますが、信憑性を疑い、偽書と考える史家もいます。

系図は呉王夫差に始まり、倭国での初代王が「忌」となっています。倭人の祖は中国春秋時代の呉王家である。倭人とは呉人だと系図は主張しています。系図の出発、系図の根本に関わることで、このことから考えていきましょう。

①『魏略』

其俗男子皆点而文聞其旧語自謂太伯之後昔夏后小康之子封於会稽断髮文身以避咬竜之害今倭人亦文身以厭水害也

『魏略』は倭人の旧語（伝承）では倭人は自ら太伯の後（子孫）であるという記しています。太伯は呉の始祖です。系図の夫差と倭国王の始祖「忌」は呉の王家です。『魏略』の記事と系図の始祖は一致しています。

系図の「忌」は本来の文字ではありません。呉の王家一族の名は「姫」です。系図の「忌」は「姫」です。故、「姫氏系図」といわれるのです。

『倭人伝』の「鬼国（キコク）」は「姫国（キコク）」です。この「姫国」が初代倭王「姫」が倭国で最初に打ち立てた国です。倭国22国連邦の始原の国といえます。

② 倭人の呉語

『倭人伝』に現れる難解な語句「生口」「持衰」は呉音で読まなければなりません。「ショウク」「ジサイ」と読みます。文字に直すと「小工」「除災」です。どちらも呉語です。倭人は呉語を使用していたのです。

『後漢書』には倭国の朝貢が記されています。

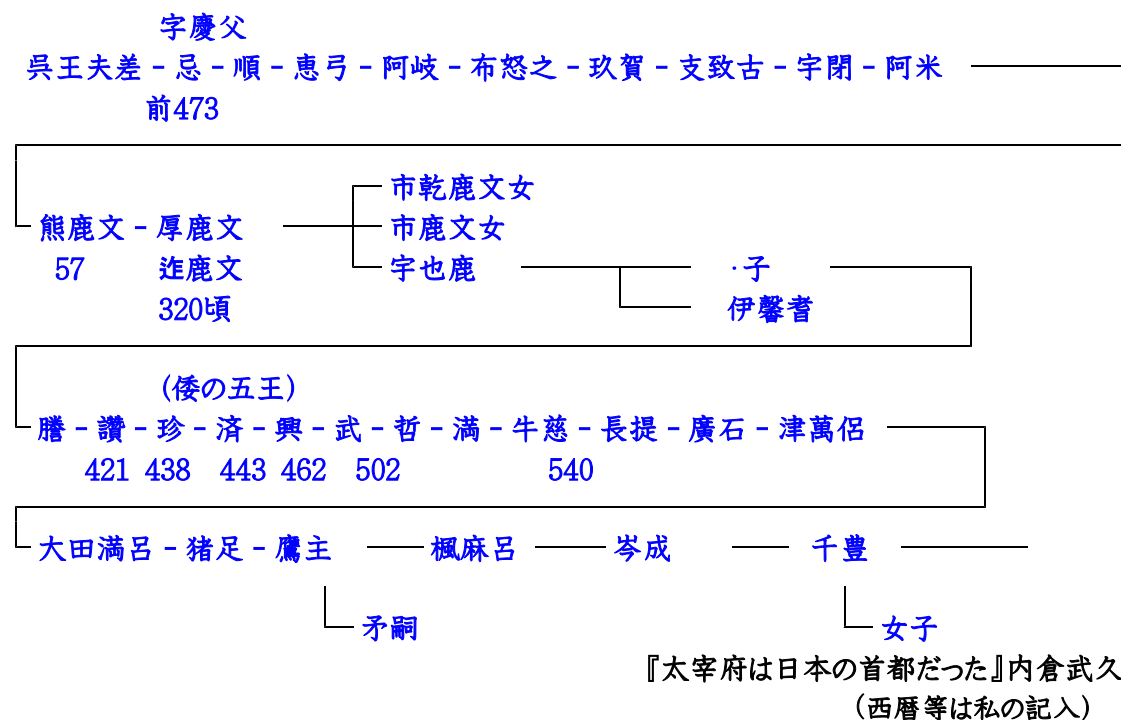
建武中元二年(57年)倭奴国奉貢朝賀使人自称大夫

安帝永初元年倭国王帥升等生口百六十人願請見

倭国の王は57年後漢光武帝に使者を送り、また第六代安帝の時代にも使者を送っています。いずれも皇帝就任への祝賀使節です。なぜ使節を送ることができたのか。倭人は中国語を理解できたからです。「系図は偽書」と破棄することはできないでしょう。

松野連姫氏系図

呉の王家姫氏が日本に渡来したのは紀元前五世紀です。呉は越によって滅ばされました。その時、王家姫氏一族は祖国を去り熊本県菊池郡に上陸した、と伝わります。姫王家の系図は次のように記されています。



① 二つの王家姫氏と熊氏

系図は姫氏系図となっていますが、王名を見れば、二つの王家が存在することが分かります。第十代王は「熊鹿文」です。「熊」は「姫氏」に遅れること200年、同じように祖国楚の滅亡後九州に渡ってきた楚の王家一族の名です。楚王家は代々「熊」と名乗りました。「熊」は楚王家の栄光の名前なのですが、「タケル」とも名乗っています。神武天皇家景行の子どもが「タケル」という称号を熊襲（熊氏）の王から与えられたことは有名な話です。系図は第九代「阿米」までが「姫氏」系図、「熊鹿文」以降は「熊氏」系図となります。「鬼国」が姫氏初代王「忌」が創建した国です。同じく、「鬼奴国」も「姫土国」となり、姫氏一族の国です。「鳥奴国」は宇土市です。「宇」は第八代王「宇・閉」の国です。倭国22連邦は姫氏一族の王の国といえます。

- ② 系図には傍書きがあつて、第二代目王「順」は新しく国を作ったというのです。「順」は初代忌の「鬼国（菊池市）」を出て建国しました。その国名が「委奴国」です。この国名を「ワのナ国」と二段に三宅米吉は読んだが、「奴」は倭音「ト」の借字で、「委奴国」は「イト国」と読むべきです。同じように22連邦の「弥奴国」も「ミト国」と読むべきです。「順」の作った「イト国」が吉野ヶ里遺跡です。吉野ヶ里遺跡は二世紀には終焉し、卑弥呼の時代には佐賀市内に移っていました。その国を陳寿は「伊都国」と書きました。陳寿は「ト」の借字「奴」を使わず「都（ト）」を使っています。恐らく、「伊都国」が「伊の都」と認識していたからではないでしょうか。伊都国とは王「伊」の都である。同じく「伊邪国」があります。この国も王「伊」の国でしょう。姫氏系図には「伊」という王はいません。だが熊本には「井」という姓の人が多くいます。伝承では「蜀」の国の人といわれます。

- ③ 順が建国した委奴国（吉野ヶ里遺跡）が倭国連邦の外交、檢察の中心でした。この国の王が中国への使節を送ったのです。『後漢書』の「建武中元二年倭奴国奉貢朝賀使人自称大夫」の「倭奴国」は順の「委奴国（吉野ヶ里遺跡）」です。『倭人伝』で陳寿は「世々王有る」と記しています。これも吉野ヶ里遺跡北部の王家の墓と一致します。

順 - 恵弓 - 阿岐 - 布怒之 - 玖賀 - 支致古 - 宇閉 - 阿米は姫氏の王です。これらの王家一族は委奴国から出征して九州、四国、近畿に分国を作りました。第四代王は「阿岐（アギ）」です。姓は「阿（ア）」、名は「岐（ギ）」です。『神武紀』に「安藝」が現れます。神武が一時居所を置いた国です。「安藝」は「アギ」、第四代王「阿岐」の国です。第六代「玖賀」は恐らく訛って「古賀」です。第九代王「阿米」は姓は「ア」、名は「マイ」です。卑弥呼の將軍「難升米」は「米（マイ）」を引き継ぎます。この王家は「阿」一族です。王「阿」の名は「阿蘇」「阿波」「阿南」「阿武」「阿倍」等として伝わります。第九代王「阿米（アマイ）」が日本古代史上、最も重要な王です。『古事記』に一カ所だけ「阿米」が記録されます。地の文ではなく神武の二度目の妻となる犀川の「伊須気余理比賣」の歌に表れます。彼女は神武たちを「阿米都都（阿米の男）」と呼びます。神武は「阿米」一族と広く知れ渡っていたのです。神武天皇家の始祖神「アマテラス」が生まれた国が「天（アマ）」ですが、「天（アマ）」は「天上」の意味ではなく、「阿米（アマイ）」の意味です。神武天皇家の聖地「天（アマ）」はどこに存在したのか。上瀬、中瀬、下瀬がある下関市彦島老町です。ここが『記紀』の「アマ」です。「天孫」はここから小倉北区へ降臨しました。（詳細は「神武東征」をご参照ください）

- ④ 第九代阿米から第十代熊まで200年以上の空白があります。『宋書』にも登場する系図の五王、讚 - 珍 - 済 - 興 - 武は熊氏一族です。『宋書』は478年倭王武が順帝へ上奏した「昔より祖禰みずから甲冑をつらぬき、山川を跋涉し、寧処にいとまあらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡って海北を平げること九十五国」と熊氏の祖先の歴史を書いています。熊氏の祖先は紀元前223年秦に国が滅ぼされ倭国に渡ってきました。第十代王熊は西暦50年頃の王ですから、上表はそれより170年ほど前の熊氏祖先の征服譚でしょう。「毛人」「衆夷」を武力制圧し、また海を渡り、国を制圧した、この海北の国とは韓半島南端の倭地でしょう。楚の王家熊の祖先が作った国は卑弥呼の倭国22連邦（有明連邦）とは明らかに異なります。楚王熊氏が打ち立てた国が博多を中心として発掘される弥生遺跡群ではないでしょうか。西暦57年後漢光武帝から授与された金印「漢委奴国

王印」が福岡市東区志賀島で発見されたのも当然で、博多は熊王家の支配地だったからです。後漢光武帝の金印は「漢委奴国王」です。この倭王が第十代の熊鹿文だとすると、この時熊は「委奴国（吉野ヶ里）」の王です。当時、熊氏は佐賀市、福岡市を統治していたのでしょ。姫氏は呉王家、熊氏は楚王家と異なる王家にも関わらず両者は共存の道を選択していたといえます。系図に二つの王家が存在することがその証です。卑弥呼の倭国は「呉楚」連合といえるでしょ。

- ⑤松本清張氏は「福岡県南部」、安本美典氏は「甘木市・夜須市・朝倉町」、古田武彦氏は「博多区」をそれぞれ邪馬台国・邪馬一国と比定しています。だがこれらの地は『倭人伝』卑弥呼の倭国ではありません。熊氏一族の倭国です。
- ⑥ここでもう一度倭国22連邦国の王の問題に戻りましょ。連邦国名にはもう一つ、特徴的な国名があります。「蘇」です。

次に対蘇国あり。次に蘇奴国有り。次に呼邑国あり、次に華奴蘇奴国あり

「蘇」を使った国名が連続します。「蘇奴国」は「ソト国」と読みます。「華奴蘇奴国」は「カトソト」となります。これらの国は同じ王家と考えられます。そこで「蘇」は熊氏の祖国「楚」ではないかと考えてきました。倭国連邦は姫氏王と熊氏王の連邦で、倭国の内乱とは姫氏王と熊氏王との権力闘争であると理解してきましたが、「蘇」とは熊王家の「楚」ではないのではな。漢字の意味が全く異なります。「蘇」を再考しましょ。「蘇(ソ)」とは何か。松本清張の論説に一つのヒントがあります。

「魏志」の「韓伝」には、鬼神を主祭する天君のいる宗教地を蘇塗^{そと}といい、それは中国の浮屠のようなものだとある。…邪馬台国は、卑弥呼が鬼道につかえる「別邑」の宗教地で、朝鮮の蘇塗に似た性格であつたろう。たとえば三輪山のような山の麓の広域な場所にあつたのかもしれない。わたしは、「邪馬」(ヤマ)が倭語のヤマ(山)を写し、「台」(ト)が朝鮮語のト(土地の意味)を写したとすれば、「邪馬台」の意味に一つの解釈ともなるかと思う。(金思燁教授によれば、蘇塗のソは神を意味し、トは土地を意味する朝鮮語という。

(『邪馬台国』p243)

『倭人伝』「蘇奴」は「ソト」です。『韓伝』の「蘇塗」も「ソト」と読みます。「蘇」は「神」を意味するということです。「奴」と「塗」は文字が異なりますが、『倭人伝』の「奴」は「土(ト)」の借字です。金思燁教授は「塗」も「ト」と読み、土地を意味するということですから、「蘇奴」は「蘇土」で、『韓伝』の「蘇塗」も「蘇土」となります。蘇奴＝蘇塗で、読みも意味も全く同じです。

『倭人伝』陳寿が記した22連邦の「蘇奴(ソト)国」は『韓伝』の「蘇塗(ソト)国」である。この一致から『倭人伝』「蘇奴国」は朝鮮半島出身王家一族が打ち立てた国ということになります。倭国22国の王には朝鮮に出自を持つ倭国王がいた。その可能性は大です。狗邪韓国南部には倭地があり卑弥呼の国の一部でした。いち早く鉄製の武器を手に入れた朝鮮王家が倭国内に建国することは当然考えられます。あるいは別の考えもできます。「蘇」は朝鮮、中国の姓です。「蘇奴」は蘇氏の国、「華奴」は華氏の国となります。

倭国22連邦の王は「姫」「伊(井)」「宇」「蘇」「華」等々で国際色豊かな連邦国家だったと考えてよいでしょ。

- (2) 卑弥呼はこれら22人の男王によって共立された連邦の王です。

卑弥呼以前の7, 80年、22国の王の誰か、恐らく邪馬国王が連邦王に就いていました。その治世に22人の王は分裂し相攻撃することになりました。内戦が10年ほど続き、多くの人が死にました。そこで22人の王たちは手を結び祈祷の伝統を受け継ぐ若い女子を外部から迎え、連邦の王に共立しました。連邦の結束に政治制度、檢察制度だけでなく、祭祀制度をも重要視して連邦を統合しようとしたのでしょ。女王卑弥呼が誕生しました。

卑弥呼は連邦王としての地位と権力を有します。だが、領土と人民は有しません。

(3) 倭国連邦22国の盟主国が「邪馬(山)国」です。「邪馬(山)」とは京町台地です。京町台遺跡群が「邪馬国」です。

(4) 魏は22の王国と狗邪韓国倭地・対海国・一大国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国・投馬国の8国を加えた30国を「倭国」と呼んでいます。

倭国は女王国とも書かれています。「女王国以北には特に一大率を置き、諸国を檢察する」の女王国です。この女王国は22連邦をさしています。22連邦はその北に位置する不弥国から狗邪韓国倭地までの7国を一大率によって檢察させていたのです。

また、陳寿は「郡より女王国に至る万二千余里」と書いています。この女王国とは「女王が住む国」、つまり「邪馬国」をさします。

(5) 女王の宮室は茶臼山西部にあります。

陳寿は卑弥呼の宮室を「宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛」と載せています。茶臼山の旧藤崎八幡宮と熊本県護国神社一帯がまさにその雰囲気です。高台にあり、城柵の規模も広すぎず狭すぎず適当な広さです。宮室とは居住屋敷と祈禱の神殿の二つをさすと言われます。2024年熊本訪問の際、熊本在住の友人に熊本城を案内していただいたが、三の丸一帯だけでも随分広い。茶臼山西部が卑弥呼の宮室エリアとなるでしょう。



(6) 茶臼山東部に倭国連邦の首都があります。

茶臼山に卑弥呼の宮室があります。だが茶臼山は随分広い。ここに卑弥呼だけが住んでいたのでしょうか。これほどの要所に卑弥呼の宮室だけが存在したとは考えられません。

『隋書』は「都於邪靡堆則魏志所謂邪馬台者也」と記しています。『隋書』は邪馬台は首都の名だとして正確に認識しています。「都は魏志のいう邪馬台に置く」というのですから、邪馬台つまり茶臼山に首都があるといっているのです。茶臼山には卑弥呼の宮室だけでなく、倭国の都(中央官庁)があります。首都(中央官庁)は「邪馬国」の官庁ではなく、倭国22国連邦の中央官庁です。東京23区の都庁が新宿区にあるように、22連邦の首都、倭国30国の中央官庁が茶臼山にあります。当然、中央官庁は戸籍、税、交易、産業などを管理する行政府があります。その長を「都司」といいます。卑弥呼の時代の「都司」は牛・利です。

また、軍司令部も茶臼山に存在します。現在の軍トップは南将・米です。米は南将という肩書きが示すように連邦首都とその南部方面を管轄する倭国軍のトップです。卑弥呼の宮室

を警護する兵士も將軍・米の部下です。茶臼山には連邦王、將軍、都司など倭国の中心人物の館が存在します。その配置はどのようになっているのでしょうか。卑弥呼の宮室エリアは西部で間違いはないといえますが、軍本部、行政府は確かではありません。



南朝劉宋は女王の国を「邪馬台国」と書いています。ところが「邪馬台」とは『隋書』が記しているように首都名なのです。「邪馬国の高台の中央官庁」という意味の首都名です。南朝劉宋が首都茶臼山を「邪馬台」と呼ぶのは誠に適切な表現ですが、首都名を使って、「邪馬台国」と呼ぶのは現代的にはいえばあまり適切とはいえません。「邪馬台国」を「邪馬台を首都とする国」「邪馬台が置かれている国」という意味で使っています。この表記は現代的にいうと「東京国」「北京国」「ソウル国」と同じです。それでも、日本国、中国、韓国をさすことは分かるので、范曄はそうに国を表したのかと納得しないでもありませんが、「邪馬台国」という国があるのだ、と多くの人が錯覚するようになってしまいました。「邪馬台国＝邪馬台のある国」の実際の名は「邪馬国」なのです。

『後漢書』は「その大倭王は邪馬台国に居る」と書いています。この文が誤解を生みました。范曄が「その大倭王は(都である)邪馬台に居る」、あるいは、「その大倭王は(都のある)邪馬国に居る」と書いていたら、首都名は「邪馬台」、首都の置かれている国の名は「邪馬国」と分別でき、誤解を招かなかったでしょう。

第2章 里程と日程

(1) 帯方郡から女王の都まで里程は「12000余里」です。その詳細を報告します。

韓国里程7000余里

從郡至仁川港陸行四百里

循海岸水行九百余里

歴韓国乍南乍東到其北岸狗邪

韓国倭地五千七百里

郡治より仁川港に至る。陸行400里

海岸に循って水行。900余里

韓国を或いは南、或いは東に歴る。倭地の北岸(狗邪韓国南岸倭地)に至る。5700里

倭国里程5000余里

始度一海千余里至対海国
又南渡一海千余里至一大国
又渡一海千餘里至末廬国
又東南陸行五百里到伊都国
又東南水行陸行百里至奴国
又東行陸行百里至不弥国
又南水行千二百余里至川尻津
又北陸行百里到女王之所都

始めて一海を渡る1000余里。対海国に至る
また南一海を渡る1000余里。一大国に至る
また一海を渡る1000余里。末廬国に至る
また東南陸行500里。伊都国に到る
また東南水行陸行100里。奴国に至る
また東陸行100里。不弥国に至る
また南水行1200余里。川尻津に至る
また北陸行100里。女王の都とする所に至る

投馬国日程

不弥国又南水行二十日至投馬国 不弥国のまた南水行20日投馬国に至る

- (2) 郡より女王の都まで里程12000余里は「水行5100余里」、「陸行6900余里」です。

『倭人伝』で使われた一里は「古周尺一里＝100m」です。

「又東南陸行五百里到伊都国」は「唐津市役所から佐賀県庁まで500里」です。計測50kmです。「又東行陸行百里至不弥国」は「大川市役所から筑後市役所まで100里」です。計測10kmです。「陸行一里100m」は計測と一致します。

「始度一海千余里至対海国」は「金海市から対馬比田勝1000余里」としました。計測92kmです。「又南渡一海千余里至一大国」は「対馬比田勝から壱岐勝本1000余里」としました。計測92kmです。「又渡一海千餘里至末廬国」は「壱岐勝本から東唐津1000余里」としました。計測70kmです。3000里は計測254kmです。

「水行一里」は「100m」とはなりません。金海から唐津までの水路測定には誤差があります。計測の平均は「一里＝約84.6m」となりますが、この誤差はやむを得ないでしょう。

- (3) 帯方郡から女王の都まで日程は「水行十日陸行一月」です。「水行5100余里に10日」「陸行6900余里に31日」です。この日数ほど確かなものはありません。距離計測法は知らなくても日数は誰でも分かります。

- (1) 帯方郡から狗邪韓国7000余里は「水行2日」と「陸行28日」
(2) 狗邪韓国から末廬国3000余里は「水行6日」
(3) 末廬国から女王の所都2000里は「水行2日」と「陸行3日」

- (4) 『倭人伝』の「日数」は倭国の測定です。

『隋書』は「魏時譯通中国三十余国皆自称王夷人不知里数」と、夷人(倭人)は里数を知らないと書いています。倭国の距離測定は「里」ではなく「日数」だったということです。

陳寿は魏測定「里」と倭国測定「日数」の二つで旅程を示しています。なぜか。その理由は魏使が実際に行かなかった場合は倭国側の記録に依ったということでしょう。

従って陳寿は「日数表記」を必要としました。『倭人伝』には二つの日数表記があります。

「不弥国又南水行二十日至投馬国」と「女王之所都水行十日陸行一月」です。投馬国と女王之所都には実際に行かなかったから倭国の日数で表示せざるを得なかったのです。

では倭国表記「不弥国又南水行二十日至投馬国」は何里でしょうか？

『倭人伝』には換算方法がありません。そこで、私はYahoo地図の最新の距離計測ツールを

使って計測しました。むろん計測するには国の正確な現代都市名が分からなければなりません。不弥国は筑後市、投馬国は那覇市です。この都市間の計測は約880kmです。

「水行二十日 = 880km」です。

もう一つの日数が「女王之所都水行十日陸行一月」です。この記事は「従郡女王之所都水行十日陸行一月里」と「郡より」を補足して読まなければなりません。この日数は我が国の使者が都から帯方郡まで出かけて、その水行、陸行の日数を持ち帰った記録でしょう。

この日数も倭国側の計測記録といえます。

「水行十日陸行一月」の換算方法も分かりません。そこでまた距離計測ツールによって計測しました。ソウル市から熊本市中央区京町茶臼山まで旅程の各都市間を計測すると、陸行6900余里は690kmです。水行5100余里は429kmです。

「従郡女王之所都水行十日陸行一月」は $690\text{km} + 429\text{km} = 1119\text{km}$ となります。

里は魏の計測法、日数は倭国の計測法とすれば、新たな疑問が浮かびます。ではなぜ陳寿は帯方郡から女王の都までが12000余里と知っていたのでしょうか。不弥国までの10700里は魏使が計測した確かな里程です。だが、魏使は都まで到着していません。では、残りの1300里はどのように計算したのでしょうか。帯方郡から不弥国までの日程は陸行31日、水行8日です。不弥国から女王の都までは2日となります。従ってこの2日を1300里と計算したことになりますが、正確とはいえません。

私は筑後市から熊本市中央区京町までの1300里を「水行1200里・陸行100里」と設定しました。水行1200里は計測85kmです。陸行100里は10kmです。だが、85kmを1200里とすることには誤差が大きすぎます。例えば金海市から対馬比田勝まで1000里は92kmです。

この里程と比較しても85kmが1200里というのは誤差が大きく、1000里とするのが妥当と思えます。陳寿の総距離12000里には誤差があります。12000里は計測1119kmです。ここには80km程の誤差があります。

(5) 『唐六典』速度は「陸行一日50里」「水行一日100里」です。

帯方郡から女王国までの計測距離は1119kmです。日数は41日です。

距離と時間から『倭人伝』水行速度は一日43.9km、陸行速度は一日22.26kmとなりました。ところで、中国の『唐六典』巻三には速度に関する記録があります。

凡陸行之程、馬日七十里、步及驢五十里、牛三十里。水行之程、舟之重者日三十里、江四十里、余水四十五里。空舟溯河四十里、江五十里、余水六十里。沿流之舟則輕重同制、河日一百五十里、江百里、余水七十里

状況によって速度を細かく分けています。「人とロバ陸行は一日50里」「水行は一日100里」と考えましょう。この速度を『倭人伝』の「古周尺一里100m」で換算すると「陸行一日は5km」「水行は一日10km」となります。この速度はいかに考えても遅すぎます。小学生でも一時間4kmはゆうに歩きます。このような結果となるのは『唐六典』が誤っているからではありません。『唐六典』の一里を「古周尺一里100m」とした私の判断が誤っていたのです。

そこで、『唐六典』の「一里」を「漢尺一里 = 435m」に拠って換算しました。すると、「水行一日100里 = 43.5km」「陸行一日50里 = 21.75km」となります。この速度が妥当且つ実際のです。実速度といえます。

この『唐六典』の速度を使って『倭人伝』の「日程」を「里程」に換算してみましょう。

不弥国又南水行二十日至投馬国

水行20日 = $20\text{日} \times 43.5\text{km} = 870\text{km}$

(從郡) 女王之所都水行十日陸行一月

水行10日 = 10日×43.5km = 435km

陸行31日 = 31日×21.75km = 674.25km

私の「不弥国又南水行二十日至投馬国」計測は880km。

『唐六典』による「不弥国又南水行二十日至投馬国」は870km。

私の「女王之所都水行十日陸行一月(31日)」計測は1119km。

『唐六典』による「女王之所都水行十日陸行一月(31日)」は1109.25km。

この一致から、『倭人伝』と『唐六典』の相関関係は次のようにいえるでしょう。

- (1) 『唐六典』水行速度は一日43.5km、陸行速度は一日21.8kmである。
『倭人伝』水行速度は一日42.9km、陸行速度は一日22.26kmである。
- (2) 『唐六典』「一里」は「漢尺一里435m」である。
『倭人伝』「一里」は「古周尺一里100m」である。尚、「水行一里」は誤差がある。
- (3) 『倭人伝』「日数」は『唐六典』に拠ってkmに換算できる。
①「水行20日」は20日×43.5km = 870kmである。
②「水行10日陸行31日」は10日×43.5km + 31日×21.75km = 1109.25kmである。

- (6) ここで、もう一度、明確な里程を示している三木太郎氏の旅程を考えてみましょう。

帶方郡→(7000余里)→狗邪韓国→(1000余里)→対海国→(1000余里)→一大国
→(1000余里)→末盧国→(500里)→伊都国→(100里)→奴国→(100里)→
不弥国→(水行20日=2000里)→投馬国→(水行10日・陸行1月=2500里)→邪馬台国

三木氏が「一里」を何mと設定しているか、著書のどこを捜しても見当たらない。故、『唐六典』の一里は漢尺一里435mとしましょう。これに従って里をkmに換算すると、水行一日100里 = 43.5km、陸行一日50里 = 21.75kmとなります。これは実速度と判断できます。日程の距離換算は次のようになります。

水行20日 = 20日×43.5km = 870km

水行10日 = 10日×43.5km = 435km

陸行31日 = 31日×21.75km = 674.25km

三木氏旅程「不弥国→投馬国→邪馬台国」に「里」と「km」を示してみましょう。



「不弥国→投馬国→邪馬台国」は1979.25kmとなります。この三木氏旅程が実際でないことは明らかです。三木氏旅程には二つの問題があるからです。

- ① 「不弥国→投馬国→邪馬台国」は実際のルートではありません。

実際は「不弥国→投馬国」と「不弥国→邪馬台国」と別々のルートに分かれます。

「不弥国→投馬国」は870km、「不弥国→邪馬台国」は95kmです。

- ②「投馬国→水行10日・陸行30日(2500里)→邪馬台国」ではありません。
「帶方郡→水行10日・陸行31日(2550里)→邪馬台国」と補正すべきです。
帶方郡から邪馬台国まで日程41日は漢尺2550里、1109.25kmです。

- (7) 最後に女王の都(熊本市中央区京町)から帶方郡までの旅程を示しておきましょう。
国名は現代都市名にしましょう。
各里程はkmに換算しましょう。
日程は各里程毎に示しましょう。
女王国旅程とは別に投馬国旅程を作りましょう。

もし、あなたの友人が女王の都から狗邪韓国(金海市)倭地まで旅行したいといってきたら、419km、11日の旅のスケジュールを作ってあげましょう。そして、もっと知りたいので、帶方郡(ソウル市)まで行きたいといったら、全行程41日間、1109kmの計画書と地図を渡してあげましょう。あるいは、南の海の投馬国(那覇市)まで渡りたいといってきたら、不弥国(筑後市)から水行20日の船のチケットとマップを用意してあげましょう。いずれの国も古くからの友人です。きっと楽しい旅となるでしょう。

良い旅を！

女王国から狗邪韓国倭地まで

5000余里 水行4200里(339km=8日)
 陸行800里(80km=3日)

熊本市中央区京町→(南陸行100里=10km+北水行1200里=85km=2日)→筑後市
筑後市→(西陸行100里=10km=半日)→大川市
大川市→(東北水行陸行100里=10km=半日)→佐賀市
佐賀市→(東北陸行500里=50km=2日)→唐津市
唐津市→(北東水行1000里=70km=2日)→壱岐市
壱岐市→(北水行1000里=92km=2日)→対馬市
対馬市→(北西水行1000里=92km=2日)→金海市

狗邪韓国倭地から帶方郡まで

7000余里 水行900里(90km=2日)
 陸行6100里(610km=28日)

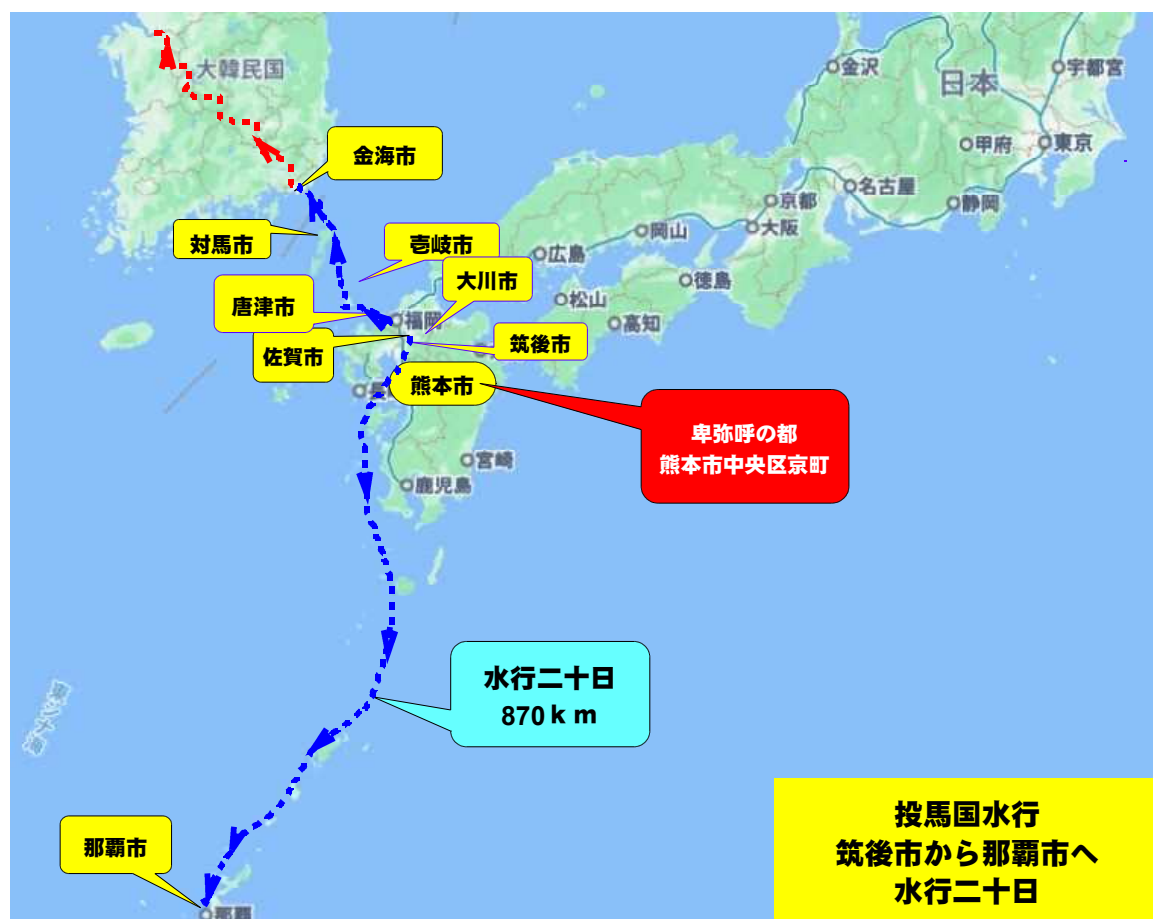
金海市→(北東陸行5700里=570km=26日)→挿橋湖
挿橋湖→(北水行420里=42km=1日)→前谷里
前谷里→(北水行480里=48km=1日)→仁川市
仁川市→(東陸行400里=40km=2日)→ソウル市

女王の都～帯方郡41日旅程図



不弥国～投馬国20日旅程図

不弥国から投馬国へ
筑後市→(南水行870km・20日)→那覇市



付記

本論でも述べたが、投馬国ほど『倭人伝』旅程を複雑にしてその解明を惑わせている国はない。ほぼ全ての史家が女王の都へは不弥国の南、水行二十日の投馬国へ渡る旅程を想定する。だが、この想定に立つ限り女王の都へは永遠に到着できない。この想定は投馬国位置未確定の産物である。とにかくまずは投馬国の位置を確定すべきである。

- (1) 不弥国の南水行二十日は一切変更しない。東への変更はあるまじきである。
- (2) 水行二十日は何kmか換算すべきである。『唐六典』によって870kmとする。
- (3) 投馬国の位置は不弥国の南870kmである。

この位置情報を日本地図で検索する。投馬国はおのずと鹿児島市の南の島となる。友人から”なぜ、陳寿は女王国旅程に投馬国を入れたのか”と問われた。陳寿が何を考えて女王国旅程から外れる投馬国を紹介したのか、確かな理由は分からない。不弥(船)国は港町である。その港から女王の都への船がでる。同時に投馬国への船もある。これはその港まで行った郡使の報告である。港から投馬国は二十日の航海、そのように陳寿は聞いた。その時、陳寿はもう一つの水行を思い浮かべたのではないだろうか。中国から韓国への水行である。むろん私の想定であるが、中国連運港市から韓国仁川港まで黄海水行はほぼ二十日要する。陳寿はこの水行を知っている。この水行が遙かな距離であることも陳寿は知っている。投馬国から不弥国への水行も同じ二十日である。陳寿は感慨を抱いたのではないだろうか。

倭国はなんと遠方の国と交易をしていることか。倭人は偉大な海の民である。

その感慨は投馬国記事となり、後生の研究者を惑わす結果となった。むろん、陳寿の責任ではない。

(不弥国の)南至投馬国水行二十日官曰祢祢副曰祢祢那利可五萬余戸

第3章 弥生遺跡

里程論、日程論共に女王の都は熊本市中央区京町に帰結する。では、この帰結は今日の弥生遺跡研究成果と合致するのか、どうか。『邪馬台国論争に決着がついた』で安本美典氏は三つの弥生遺跡人口分布図をのせ解説している。

古田武彦氏の「女王国＝博多湾岸説」を批判しておく。『魏志倭人伝』によれば、邪馬台国が倭人の諸国のうち、人口がもっとも多かったとされている。その戸数は「七万余戸」であったという。博多湾岸では、奈良時代に人口でも、七万余戸に達していない。このことをさし示すデータを、三つほどあげておく。(同頁62)

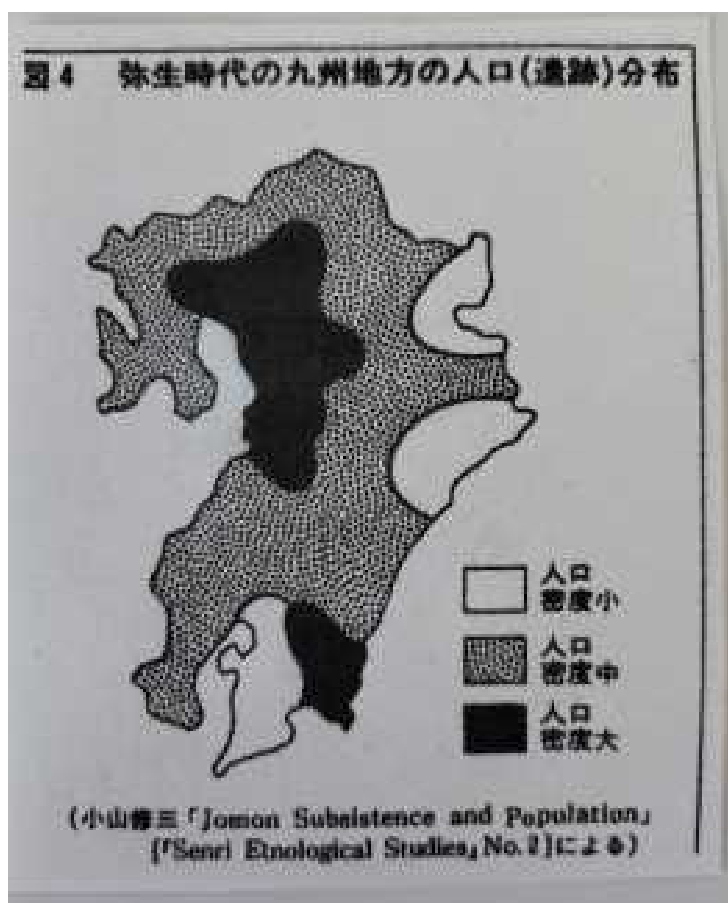
(1)

国立民族博物館助教授教授の小山修三氏は、欧文雑誌『Senri Ethnological Studies』(千里民族学研究)のNo2、「Jomon Subsistence Population(縄文時代の暮らしと人口)」という論文をのせ、その中でつぎのようなことを示している。

小山氏は、青森から鹿児島までの各都道府県教育委員会発行の遺跡地図に収められている集落、食糧貯蔵穴、土器大量出土などの生活遺跡のデータを、コンピュータにいれ、時代別に分類し、人口の推計をおこなっている。

分析した遺跡数は、縄文期二万七千九百十六カ所、弥生遺跡一万六百二十四カ所、古墳時代と奈良時代一万一千八百三カ所である。

そのうちの弥生時代の九州の人口(遺跡)の分布図が図4である。この図をみれば、弥生時代の九州の人口(遺跡)の中心部は筑後川流域から、熊本地方にかけてあることは、あきらかである。博多湾岸地方にはない。



小山修三氏作成の弥生の九州人口分布図では人口密集地域は有明海沿岸部、筑後川流域、熊本地方にかけてである。それと意外にも志布志、串間、日南に人口が密集している。安本氏の指摘のとおり、博多湾岸には人口はそれほど密集していない。

古田氏の博多湾岸＝邪馬台国は『倭人伝』陳寿里程を二重、三重に改訂して到着した結果であるから、博多に女王の都は存在しないのは当然で、その批判に人口分布を援用する必要もないと思われる。肝腎なのは、この弥生の人口密度の高い地域のどこに女王卑弥呼の都が存在したのか、そこである。

では、安本氏は卑弥呼の都はどこにあったと考えているのか。

朝倉平野の中心部、甘木市、夜須町の近くには、高天の原神話の伝える「安川(夜須川)」「香山」の地名が、

セットの形で存在することも考えあわせるならば、高天の原、すなわち邪馬台国は、この地域に存在したものと考えられる。私は卑弥呼の宮殿は、筑後川上流の朝倉盆地の甘木市、夜須町、朝倉町(以上、いずれも旧朝倉郡)にあったであろうと考えている。そして邪馬台女王国の領域は、

筑後川のほぼ全域におよんでいたであろうと考える。そう考えなければ邪馬台国の戸数七万余戸をおさめることはできない。大陸への通路である奴国や、伊都国など玄界灘沿岸にも出やすく、かつ背後に筑後川流域の豊かな生産力と人的資源を擁する甘木市、夜須町の付近こそ、女王の宮殿のあった場所としては最適であろうと考える。(同書125頁)



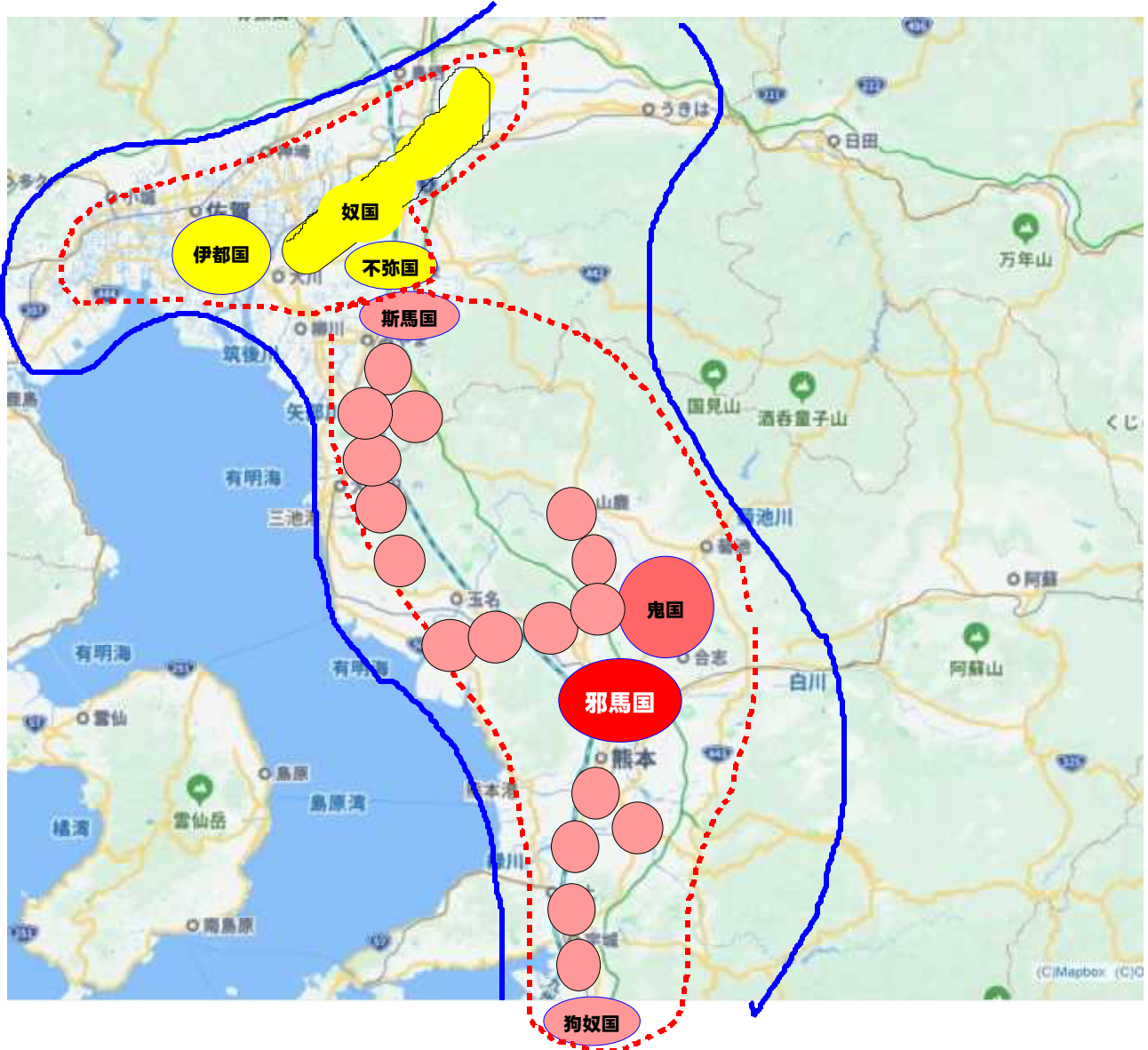
小山修三氏の人口分布図は九州航空写真でみる平野部とほぼ一致している。そこで安本氏

が卑弥呼の宮殿の場所として考える甘木市、夜須町はその場所として相応しいといえるのか、どうか、地政学的にみてみよう。

確かに甘木市、夜須町は人口密集地域ではあるが、密集地域の辺境である。現在でも朝倉市（甘木市・朝倉町・杷木町合併）の人口は47000人ほどである。水運、陸運に恵まれているわけでもない。もし、ここに権力の中枢（卑弥呼の都）が存在したのであれば、その権力はまず港のある北東の博多湾岸に進出、治めたにちがいない。そして、小倉市、行橋市等も治めたであろう。甘木市を中心とした政治経済圏を形成したであろう。だが、甘木市はそのような地政にはない。

図4では、権力の中枢は長方形の真ん中に当たる菊池市・熊本市にあったと考えるのが妥当である。北部平野でいえば佐賀市が中心である。これらの中枢権力が膨張して、図4にみるような長方形の人口密集地域（弥生国家群）を作り上げたのではないだろうか。

今、小山氏の弥生人口分布図を基に現代北九州地図に『倭人伝』の主要国を示してみよう。青線の内側が小山氏の人口密集地である。



佐賀平野を統治したのは伊都国である。筑後平野は奴国の管理下にある。だが、『倭人伝』によると奴国には王がいない。長官児馬觚と副官卑奴母離がいるだけである。二万戸の大国としては奇妙なことで、それではこの官は誰が任命したのか、という疑問となる。地政学的にみてもそれは伊都国王であろう。伊都国を中心に奴国・不弥国が一つの政治経済圏を形成していたと思われる。伊都国は韓国、中国との外交を担う。そして、検察も担う強大な権力である。その外交、検察の財政を支えたのが奴国の豊かな穀倉地帯だったのではないだろうか。不弥国は斯馬国から

始まるもう一つの政治経済圏との境、出入り口である。当然、副官卑奴母離（人守＝出入国管理官）が重要な任務をもつ。同じく奴国にも副官卑奴母離がいる。この官の任務は奴国の東北の勢力圏（安本氏のいう朝倉市）との出入国管理と思われる。

菊池平野・熊本平野を統治したのは鬼国（菊池市）・邪馬国（熊本市京町）である。鬼国は倭国連邦の始原の国、邪馬国には倭国22連邦の首都がある。

鬼国は北の斯馬国・己百支国・伊邪国・都支国・弥奴国・好古都国・不呼国・姐奴国・対蘇国・蘇奴国・呼邑国・華奴蘇奴国・為吾国・鬼奴国へと膨張し、邪馬国は南の躬臣国・巴利国・支惟国・鳥奴国・奴国・狗奴国へと膨張して一大政治経済圏を形成した。

伊都国と鬼国・邪馬国を中枢とする倭国の二つの政治経済圏は小山氏が作成した弥生人口密集地域にすっぽりと収まる。卑弥呼の国がいかに繁栄していたか、示す根拠となる。

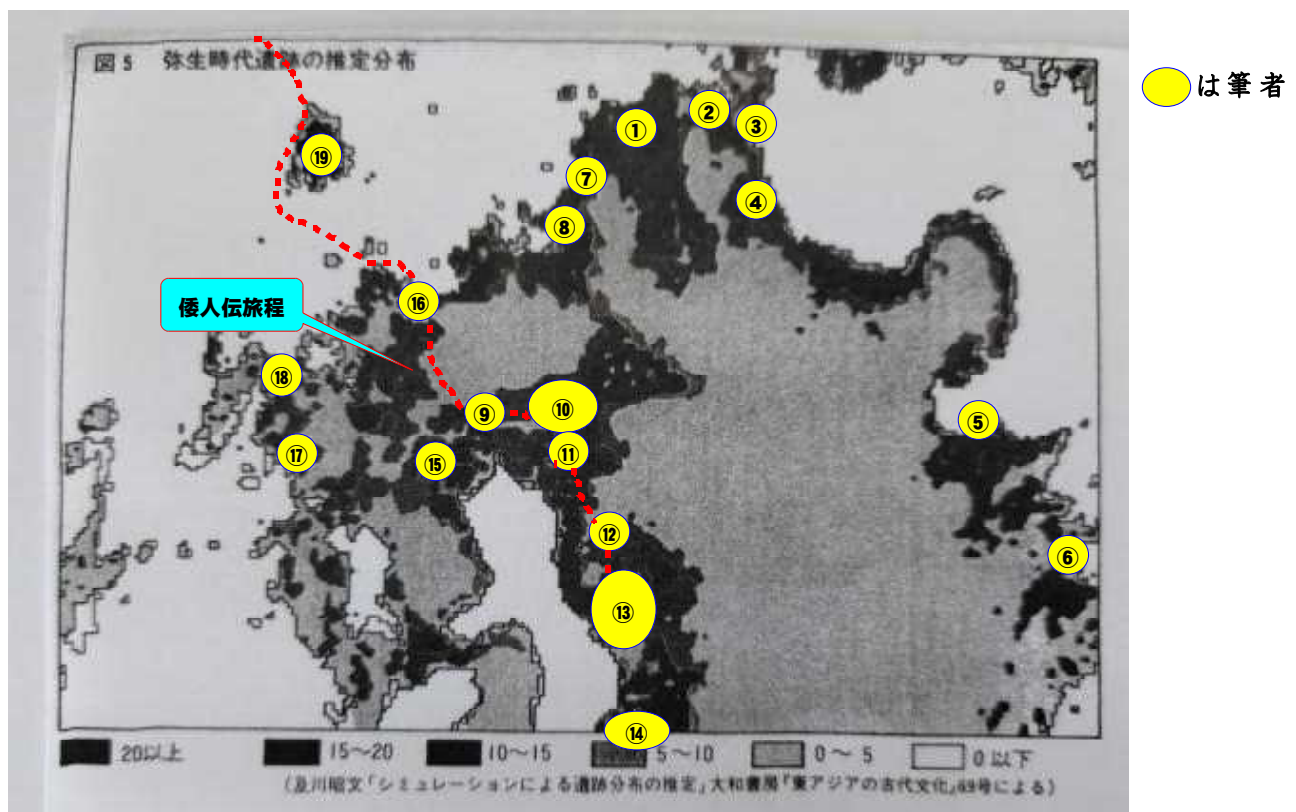
なお、不弥国から南水行二十日の投馬国はこの人口分布図には存在しないのはいうまでもない。投馬国は戸数五万戸の大国である。那覇市に存在する権力が統治した沖縄の全戸数と思われる。

もう一つ、安本氏は及川氏のシミュレーション弥生遺跡分布を取り上げている。

(2)

茨城大学の及川昭文氏が、『東アジアの古代文化』の69号に発表した論文「シミュレーションによる遺跡分布の推定」で示した資料がある。

及川氏は、弥生遺跡の発表された場所の、標高、傾斜度、傾斜方向、地形、地質等をしらべ、それと同等の性質をもつ場所が、九州において、どのように分布しているかを示している。図5に示すとおりである。及川氏は、そのような場所は、平野を中心にひろがっていること、筑紫平野（筑後川流域）が突出していること、伊都国にあてられる糸島半島、奴国にあてられる博多湾岸地域の合計にくらべ、筑紫平野は二倍以上の人口を含みうることを示している。



及川氏の研究は「弥生遺跡の発表された場所の、標高、傾斜度、傾斜方向、地形、地質等」と同じ条件をもつ地域をシミュレーションしたものである。弥生遺跡が多いとシミュレートされた地域は河川流域台地である。

①遠賀川②紫川③竹馬川④今川⑤大野川⑥五ヶ瀬川⑦青柳川⑧那珂川・三笠川⑨嘉瀬川⑩筑後川⑪矢部川⑫菊池川⑬白川・緑川⑭球磨川⑮鹿島川⑯松浦川⑰佐世保川⑱佐々川⑲芦辺川

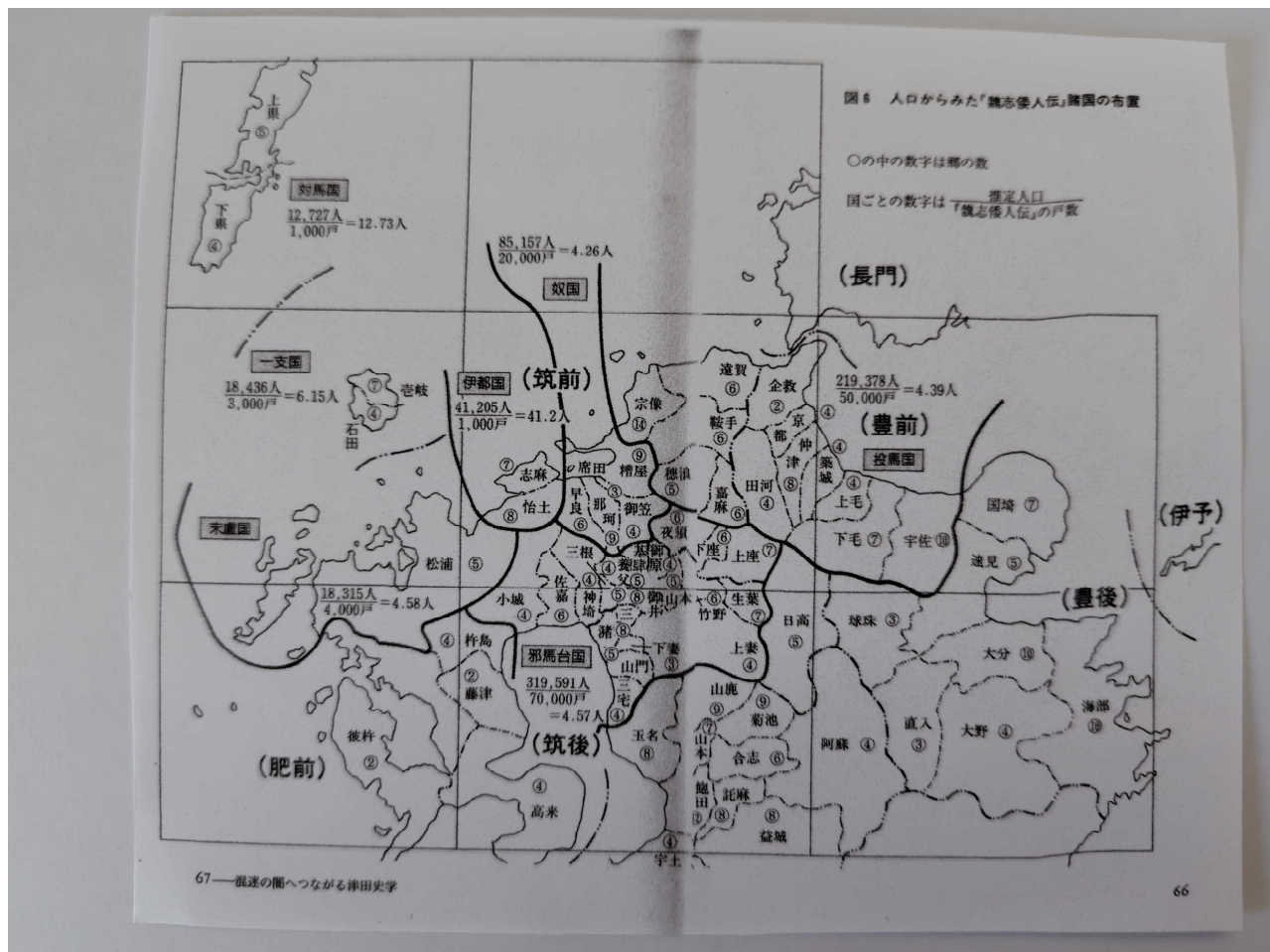
卑弥呼の国は単独の国ではなく、筑後川・矢部川・菊池川・白川・緑川・球磨川の各流域台地の弥生国家の連合体だった。それぞれの国には王がいた。卑弥呼は彼らによって共立された連邦王だった。卑弥呼連邦の中樞国がすでに述べたように熊本市の邪馬国と菊池市の鬼国である。連邦の都は邪馬国（熊本市茶臼山）に置かれた。卑弥呼もここに居た。卑弥呼連邦は当時最大、最強の国家連合だったと思われる。

図5が示すように、卑弥呼連邦とは別に各地に人口密集地が存在する。幾つかの密集地の権力（国家）は史料に残されている。

博多の那珂川・三笠川流域の国家は『宋書』に登場する「倭の五王」である。同じ倭国であるが、この国は太宰府を首都とした。彼らも熊氏一族である。

九州東北部の紫川・竹馬川・今川の各流域を支配していた国家も確定できる。それは『記紀』神武天皇家である。『記紀』はこれらの地域を統治する神武天皇家一族の物語である。景行紀は景行の足跡が九州であることを記している。景行天皇の都が今川上流のみやこ町であることはよく知られている。この今川が『古事記』では狭井河として登場する。狭井河とは犀川である。神武天皇が二度目の妻と一夜を過ごした家は狭井河（今川）のほとりにあった。神武も景行も今川（犀川）で繋がっているのである。竹馬川下流の小倉南区も神武天皇家所縁の地である。竹馬川は『記紀』では吉野川として登場する。神武が熊襲との戦いの最中に見学に訪れた吉野川の”たぎつ白波”とは竹馬川河口の干潟に満ちてくる潮との衝突によって生じる逆巻く水流のことである。

最後に安本氏の考える『邪馬台国人口論』（邪馬台国の位置）をみてみよう。



(3)

図6は、拙編著『邪馬台国人口論』（柏書房）に示したものであるが、奈良時代の人口データをもとに、郡ごとの人口を推定し、そこから『魏志倭人伝』に記されている諸国の布置を求めたものである（奈良時代には班田収受の法がおこなわれたので、戸籍データは比較的良好とされている）

この図をみれば、私の考える奴国・伊都国地区（つまり、博多湾岸地区）の人口を合計しても、十三万人たらずである。奈良時代の人口でも、「博多湾岸」に、七万余戸をいれることはできない。かつ、博多湾岸に、邪馬台国七万余戸をあてはめると、奴国の二万余戸のもっていき場所がなくなってしまう。以上三つのデータは、いずれも、ほとんど同じ結果を示している。

邪馬台国を九州に求めるとすれば、筑後川のほぼ全流域程度を考える以外にないのである。博多湾岸には、やはり、多くの人が説くように、奴国をあてはめるべきである。

安本氏の比定は以下のようになる。

- ①伊都国＝志麻・怡土
- ②奴国＝席田・糟屋・御笠・那珂・早良
- ③投馬国＝宗像・遠賀・企救・鞍手・京都・穂浪・仲津・築城・上下毛・田河・嘉麻・宇佐
- ④邪馬台国＝夜須・上下座・御原・基肆・養父・三根・佐嘉・小城・神崎・御井・山本・生葉・竹野・上下妻・三瀨・山門・三宅

これらの位置比定が陳寿の里程（方向と距離）を無視したものであることはいままでもない。豊前が投馬国にあてられている。投馬国は邪馬台国の北東の地となる。これでは「南、水行二十日」の南、二十日はむろん水行すら必要がないではないか。この比定理由は五万戸の大国は他に「もっていき場所がない」からであろう。あまりにも陳寿をないがしろにしている。

邪馬台国は安本氏が卑弥呼の都と考える夜須から佐嘉、山門まで含まれる広大な地域となっている。このような設定となった理由は「邪馬台国は一国で七万余戸」と考えた結果であろう。七万余戸の大国を求めるとすれば、「筑後川のほぼ全流域程度」が有力な候補であるのは安本氏のいうとおりであるが、設定の前提となった「邪馬台国・七万戸」を再考すべきである。

七万戸は「邪馬台国」の戸数なのか。ここに考察が必要である。

- ①南宋刊本、百衲本『倭人伝』では「邪馬壹国」である。
- ②百衲本『倭人伝』で陳寿が記した具体的な倭国名の中に「邪馬台国」はない。記録されているのは「邪馬国」である。
- ③「邪馬台国」という国名は『後漢書』で初めて現れる。「邪馬台」とは本来首都を意味する。「邪馬台国」という国名は首都名を利用した“仮”の国名である。
- ④卑弥呼の時代に「邪馬台」という首都名は使われていない。『倭人伝』ではただ「女王之所都」と記している。陳寿は「邪馬台」を知らなかったのである。「邪馬台」が使われていないなら「邪馬台国」も使われることもない。
- ⑤卑弥呼の時代に「邪馬台」という首都名、「邪馬台国」という国名も存在しなかった。
- ⑥具体的な国名で記録されているのは倭国22国である。だが、これらのそれぞれの国の戸数記録はない。陳寿は伊都国千余戸、奴国二万余戸、不弥国千余戸と記しているが、この戸数は郡使の報告に基づいている。しかし、郡使は不弥国まで行ったが、22国には到着していない。ゆえ、個別の戸数を知ることはできなかった。陳寿も記すことができなかった。
- ⑦ここで“七万戸”という数字の出所が推察できる。七万戸は倭国連邦22国の総戸数である。郡使はこの情報は得ていたであろう。連邦22国の平均戸数は、 $70000 \text{戸} \div 22 \text{国} = 3180 \text{戸}$ となる。伊都国1000戸、不弥国1000戸と比べてみても妥当な数字である。

安本氏は七万戸の大国をイメージした。結果、図6のように広大な邪馬台国ができあがった。がこのような統一国家は実在しなかったのである。